
いつか災厄の闇ウサギ

一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか災厄の闇ウサギ

【Nコード】

N6276S

【作者名】

一人

【あらすじ】

神の下らんミス（オレンジジュース）で殺された俺は神を説得（脅迫）していつ天の世界に転生した。さて、どうやって介入してやるのか。楽しみだ。

現在、ネギま！

転生の為のプロローグ（前書き）

大好きな作品の二次創作なので頑張ります。

転生の為のプロローグ

「ごめんなさい」

唐突で悪いが、俺は死んでしまったらしい。俺が気づいた時には既に目の前に土下座して謝っている幼女がいた。何でも寿命帳簿っていう人間の命の長さを記したものにオレンジジュースを誤って溢してしまっただけ。そのせいで俺含め約900人の命がなくなっただけ。つまり自分たちはこいつのせいで、こいつのミス（オレンジジュースを溢した）で死んだ訳か。

成る程…。

「ふざけんなアアアアアア！！」

アイアンクロウをおこなった。

「イタアアアイ！」

「キサマふざけんな何がごめんなさいだお前の下らんミスで殺されただろ！？そのていどの謝罪で許すとも思ってたのか許して欲しいんだっただけで転生みたいな事しろや！！アア？」

「分かりました分かりました！転生でも何でもさせてあげますから離して下さい！」

「マジで？」

「マジでマジで！」

「よし」

そういう事で転生させてもらえる事になりました。

「んじゃ、要望を言っぞ」

「…はい」

幼女は頭を抑えて蹲っている。可哀想と言う…気もしない。

「まず俺を不死にしろ。制限のない奴だ。容姿だが人間シリーズの零崎人識の姿をベースにして、身長は168センチにしてくれ。

そして能力だがまずめだかボツクスの異常と過負荷を全て使えるようにしろ。安心院あしむのようにな。それと刀語の真庭忍軍の忍術も完全に見えるようにしろ。いいな？」

「……ふあい」

何か凄い不安なんだけど大丈夫なんだろうか。

「何処に行きたいですか？希望を言っして下さい」

「いつか天魔の黒ウサギだ」

「分かりました」

よし。これでOKかな。

《パチン》

「は？」

《パカツ》

「え？」

下を見ると……

「穴？」

ちょっと待て。これって

「うあああああああ！？」

何処までテンプレなんだ！？

「い、ごめんなさい！！」

最後にこんな声が聞こえた気がした。

転生の為のプロローグ（後書き）

書いてて神を苛めるのが楽しかった。タイミングの良い時にもう一度やって見ようと思います。

第1話（前書き）

すいませんでした。

携帯での投稿方法がよく分からなかったなので投稿がかなり遅れました。

許してください。

第1話

0

取り返しのつかない過ちを犯したんだ。
精々無駄な贖罪でもしてろよ。

1

「うあああああああ!？」

気づいたら叫んでいた。飛び起きる。そして、

「あの神ばかいつか絶対ぶつ殺す!」

神に対してとりあえず殺害の決意をして、気を静める。

そして、

「知らない天井だ……」

一応お約束の台詞せりふを言う。

「転生は成功したのか? まあここが何処かってとこからわかんないけどね」

寝ていたベッドから降りて……

7

目の前の大きな鏡に、綺麗な女の子が居るのを見た。

「……………は?」

……………ハア!?

「な、何で女になってんの!? え、嘘!? え?」

パニックった。これ以上ない位驚いた。よりもよって女だぜ?

とにかく、俺は2分は落ち着かなかった。というより落ち着けなかった。

ひとしきり混乱した後、俺は部屋を見渡した。何かあるかも知れ

ないと思ったからだ。まあ藁にもすがる思いでの足掻きだった。

しかし、それは直ぐに見つかった。机の上に手紙らしきものが置いてあった。

内容はこうだ。

「お早うございます。神です。貴方、いや、貴女（笑）は今、とても混乱していると思います。なので、この気高く美しく完全無欠で失敗無しの女神、アフロディテがお教えます」

なんて事が書いてあって、そしてそれは滅茶苦茶腹の立つ内容で、だからそれを見て俺はこの手紙を即座に即行で破り捨てたい衝動に駆られたのだが、それを必死で堪えて続きを読んだ。

「まず、貴女の体に起きた異変ですが、これは創造神がミスをしたからです。これは私たちにも原因があるのですが、彼女はある理由から力が大変不安定になっていてこのミスは仕方がないことなのです。許してくれとは言いませんが、せめてもの償いを許していただけないでしょうか？」
なんて事が書かれていて、それを見て一気に怒りが冷めてしまつて。だから、「ああ、もう仕方がねえな」
続きを読む事にする。

「今から貴女の置かれた状況について記したいと思います。貴女は宮阪高校の1年3組、つまりいつ天の主人公の鉄大兎くろがねたいとと同じクラスです。そして、貴女は生徒会の副会長、紅月光くれないけつこうの部下という立ち位置です。これなら、介入しやすいでしょう？」

次に貴女の名前ですが、咎とが識零華しきれいかという名前です。良い名前でしょう？」
「へえ。中々のサービス精神じゃんか。まあ、

これなら許してやってもいいかな」

「まあ、この名前が付けたかったからなのですが（笑）」
よし、殺そう。

取りあえずこいつらの所に行って血祭りにあげてやる。まずはこいつを潰して俺の気を晴らそう。そして次にはあの創造神をアイアンクローで泣き喚かしてやるうか。そして、……フフフフフフフフフフ。

と、

ブルルルルル、と携帯電話が鳴った。

「あん？」

机に置いてあった携帯を取り開いてみると、そこに表示された名前は、《紅月光》だった。それに俺は思わずニヤリと笑った。

「原作介入の開始かな」

第1話（後書き）

主人公の設定は次くらいのキャラ紹介で補正します。零「次も駄文なのか？」

作「…頑張ります…」

なので、見捨てないでください、お願いします！

零「プライドとかないのお前」

キャラ設定1（前書き）

キャラ設定です。

見ていただければ幸いです。

零「お前俺の設定きちんと土台を固めてんだよな」

作「大丈夫だつて。……多分」

零「おおい！」

キャラ設定1

とがしきれいか
咎識零華

年齢 十六歳

容姿 戯言シリーズ、もしくは人間シリーズの零崎人識の容姿を女の子っぽくした感じ。ただし、携帯ストラップとピアスは外した状態（顔面刺青は健在）。

スリーサイズ 身長が女子の中では高い……割には余り大きな数字ではない。ただし、生徒会女子メンバーの中では一番良い。
スペック

身体能力 SSS

魔力 S+

知能 S

カリスマ A+

性格 基本的には優しい。が、相手が自分を度を越して馬鹿にする、見下す、相手が自分の命令を敵対心を燃やして突っぱねる等の行動をした場合、悪魔よりも悪魔っぽくなり、その場合相手は地獄を見ることになる。

…優しいんですよ？

能力（神様命名）

プラスマイナス

アブノーマル

マイナス

異常負荷

全ての異常と全ての過負荷が使える。まあ、ぶつちやけ

あじむ

安心院の持つ約一京のスキルも併用して使う事も可能性。選抜忍軍

刀語で出てきた真庭忍軍の使用していた忍術を、分かる限り、使用できる。不傷者^{ノーレッドゲージ} 傷つかないし死なない。それだけのスキル。首を斬りつけられても斬れないし、呪いをかけられても死なない。ただそれだけ。

キャラ設定1（後書き）

次回、遂に介入します。

相変わらず駄文と思いますが、お付き合いください。

第二話（前書き）

0

近道が有るからって、
それを使うとは限らない。

第二話

俺は宮阪高校の制服（セーラー服）に着替え、生徒会の腕章を付けて家を出た。月光から呼び出しがあったからだ。ちなみに内容は要約するところだ。

『俺だ』

『何だい月光』

『お前にしてほしい事がある。すぐに生徒会室に来い』

『そっちから道程^{みち}を繋いでくれれば良いのに』

『面倒だ』

『おいおい、その年からもう動くのが億劫になるほど老けたのか？』

月光ちゃんよ』

『うるさい。殺されなくなかったらさっさと来い』

『へいへい』

と、いう事で、現在歩いてます。いや、まあ腑罪証明^{アリバイプロック}使っても良かったんだけどさ、地理的な情報は手に入れておきたいからねえ。

その頃、生徒会室にて。「ねねねね月光。何で零華ちゃん呼んだの？」

月光と呼ばれた少年が鬱陶しそうに読んでいた本から顔を上げる。そこには、背の低い、童顔な整った顔たち、おっとりとしたたれ目、長めのポニーテールの可愛い容姿の少女がいた。

それはもう、男百人が見ればその全員が可愛いと言うであろう少女で、そんな可愛い少女にこんなに親しげに話し掛けられたら普通の男であれば一発で落ちてしまうだろうというような少女なのだが、
「……………」

目の前にいる男は普通じゃなかった。

そのまま彼は再び顔を手元の本へと戻し……、

「って何で無視かあああああああああああ！？」

少女が叫ぶ。それに月光が、

「……うるさいぞ、美雷」

と言う。

それに、美雷は、

「うるさくなあああああああああい！？」

と叫ぶ。

月光は顔をしかめて、

「ふむ。静かにならないのなら、今日のおやつは抜きにしよう……」

「あ、あー！ー！静かにします！静かにしますからあ！だから、それだけは」

「だったらお前はそこで卑屈な奴隷のように俺の偉大さの前に土下座して感謝しろ」

「な、何であたしが」

「おやつ」

「ううううううううううう」

誰がどう見ても明らかに苛めの現場だった。それも滅茶苦茶レベルの低い言い争いだった。

と、
コンコン。「入るぞー」ガチャツ。

咎識零華が入って来た。

「……………何やってんの？」

俺が入って来た時、目に映った光景は、実に俺を呆然とさせるのに充分なものだった。月光が美雷を涙目にさせながら土下座させている。何この分かりやすいドメスティックバイオレンス。

「来たか。全く、遅いぞ咎識」

「いやいや月光ちゃん。俺の事は零華って呼び捨てに……ってそうじゃない。お前何で美雷を土下座させてんの？」

「うん？お前はペットの躰はしないのか？」

「ええー……」

どん引きだわ。何こいつ真顔で『ペット』なんて言ってるの？すげーよ、お前。「まあいいや。それで、月光。何の仕事だい？」

「ああ。それなんだが」

「無視するなああああああああああ！？」

「うるさい」

「何でそこで息があうの！？」

「はあ。少し黙っている。そうすれば後で小遣いでもやる」

「ホント！？」

「ああ」

「やったあああああああああああ！」

「わかったら黙っている」

「はい？」

美雷はさっきとは打って変わって上機嫌でホワイトボードの方へスキップして行く。恐らく落書き《げいじゅつてきさくひん》でもかくつもりなのだろう。

「それで、何の仕事だ」

「ああ、実はお前にしばらく 軍 を押さえてもらいたい」

「軍を？何のために」

「これだ」

そう言って一枚の書類を見せてくる。そこに書いてあったのは、

「最古の魔術師サイトヒメア儀者鉄大兎そして、紅月光について…」

……。お前、何した？」

「俺は何もしてはいない。疑われる事もな」

「その言葉を信用するとして、こんなものがでてきたということは、」

「ああ」

「恐らく、日向^{ひなた}だな」

第二話（後書き）

ギリギリ原作に絡ませる事が出来ました。きつかった。
零「もうちょい後先つてもんを考えろ」
作「…善処します」

第三話（前書き）

すみません。今回は急いで作ったので短めです。ついでに少しミスりました。こめんなさい。

零「謝ってばっかじゃねーか」

作「謝らずにはいられないよ。だって初投稿からかなり時間が空いたし、中身もスツカス力だし、キャラの口調だって」

零「あーもううるせえな。良いから本編はじめるぞ」

作「お、OK」

零・作「はじまりまーす」

第三話

0

邪魔な奴らはなぎはらえ。1その時、《ドン!》という音が生徒会室の小窓から響いた。見るとその向こうに窓を割ろうとしている数十人の大人達がいた。あー、そーい、やいたなあ、この人達。

「紅月光!君は包囲されている!おとなしく投降するなら命までは奪わない。扉を開けて、出てきなさい!」

なんて事を言ってきた、それに月光は、

「……………」

笑う。

見下すように、哀れむように笑う。

「そんなんじや開かないよその扉は。開きたいんだつたら専門の解^カ呪屋^{スプレイカー}でも呼んでこい」

^{カースプレイカー}

「解呪屋はもう手配した。もうすぐ扉は開く!その前に投降しなさ

……………」

しかし、もう月光はその声を聞こうとはしなかった。彼は生徒会室の壁に向かって、

「開け」

と言う。

すると、その壁の一部が歪む。

空間を曲げて、次元を曲げて、ありえない世界に繋ぐ。

「俺達はこれからサイトヒメアと鉄大兎の所へ向かう。それまで時間を稼げ」

「ん。りょーかい。俺も少し暴れたいからね」

とりあえずそーう返事をする。正確には俺の能力の規模を試したいのも有るんだが。

「じゃあ頼むぞ」

「零華ちゃん、またあとでね」

そう言つて道程^{みち}を二人はくぐつていく。
一方、俺は

「そんじや、まあ軽く殺して解^{バラ}して並べて揃えて……晒して
やんよ」

第三話（後書き）

読み返すとホントに短い……。

次回、遂に戦闘開始です。

作者が文才ないので異常や過負荷や悪平等ノットイコールの様な戦闘は出来ないと思います。

それでも良ければ感想と評価、そして次回も読んでください。

第四話（前書き）

スピード投稿。

疲れた…。

えー、今回はオリジナルスキルをだしました。
是非見て下さい。

零「なんか今日は謝る事がねーな。やっと覚悟が決まったのか？」
作「ノーコメント」
零「……………」

少し短いかなあ…。

第四話

0

足搔け、藻搔け、抗え。

泣け、叫べ、狂え。

呪え、崩せ、殺せ。

そうすれば助けてやろう。

1

ライフゼロ

「無効脛」

俺はそう言って窓に手をかざす。すると、窓にかかっていた魔法が解ける。

そこから武装した大人達がなだれ込んでくる。

「紅月光を呼び戻せ。そうすれば命だけは助けてやる」

なんて事を部隊の誰かが俺に言ってきた、それに俺は、

「《命だけは》って事はそれ以外は助けないって事？例えば、……」

貞操、とか？きゃー、零華ちゃんピンチ。こんな大人数相手なん

ていくらわ・た・しても無理があるわよ。いやん恥ずかしい事言わ

「せないで」

俺の余裕綽々の態度に、軍くの方々も戸惑っているようだ。その証拠に全員が武器も構えず……

「撃て」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ
ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

一気に連射して来る。前言撤回。滅茶苦茶撃つてきやがった。その弾丸の雨あらは俺にとってスローモーション画像を見ている

ように感じられた。遅すぎだろ。なんか普通に避けられそうだが、でも、それじゃあ疲れるし面倒だし、あれやってみるか。

アサシンスキル
選抜忍軍、運命崩し発動。

無数の弾丸が俺に迫る。そして、

全ての弾丸は俺から逸れて背後の壁に飛んで行った。

魔法が何かで強化されたものだったのか、凄まじい轟音が響く。当たらなかつたから良かったものの、普通の人間が喰らっていたら死体が原型を留めないぞ。

「うわーコワッ。なにこの威力、こんなの女の子に撃つってあんたら正気？」

「なっ……！？効いてない!?!」

「当たってねーよ、ボケ」

そう言いながら一人の前に近づき、

「お返した。キルリベンジ 自故襲復」

手で触れると、

ボンツ！！という音と共にその部位、――心臓を中心に大きな穴が開いていた。内臓は根こそぎ吹き飛ばされ、その後ろに立っていた男も同じように被害を受けていた。

「アハツ、ごめーん。被害を被った人は諦めてね。あと数秒もすれば愉快的死骸になるから！あれ、何か被害と死骸しがいってなんか響きが似てねえ？俺ってばもしかしてそっち系統の才能あるんじゃない？おい、聞いてるー？」

「つくそ！」

俺が話し掛けたのに彼らは反応してくれない。あーあ、

「なーんか、つまなくなってきたな。よし、終わらそう」

「えー、おほん。『愚民共よ、ヒザマズケ』」

グシャアアア！！という効果音がふさわしい勢いで片膝と片手を床に付け、頭を垂れた姿勢になる大人達。各々『理解出来ない』とい

う表情を浮かべている。あー愉快愉快。

「あんたらは喧嘩を売る相手を間違えたんだよ。月光が出ていった時点であんたらは俺なんか放っておいて追い掛けるべきだったんだ。それなのに俺に攻撃してあまつさえ戦闘どころか行動不能になっちまうとはな。ははは、滑稽滑稽。大した戯言模様だ。傑作だぜ」
そして、俺も行こうとする。最後に振り返って、

「んじゃ、ごきげんよう。黒守^{くろす}にでも助けてもらえ」

アリバイブロック
腑罪証明を使い、その場から消えた。

第四話（後書き）

はい、出ましたね。自故襲復。^{キルリベンジ} いや、ぼん、と思いついた時は採用するかどうか迷ったんですが、友達に聞いてみたところ『いいんじゃないね？』と後押しされる形で出すことになりました。今考えるにあれって適当に流されただけじゃね？と思うんですが、まあいいか。

尚、零華のスキルで何かアイデアのある方は、そのスキルの名前、ルビ、内容等を詳しく書いて感想で送って下さい。

待ってます。

そして次回もよろしくお願いします。

零「後半も、謝らなかつただと……！？」

第五話・前（前書き）

今回は少し書き方変えたのに、長くない。
何故だ……？

零「文才だろ。下手くそだからじゃねーか？」
作「まじか!？」

頑張ろう。

第五話・前

「家族が縁の切れない他人なら、俺はその縁を断ち切って見せよう」

零華が>軍<を撃退（殲滅）する数分前、とある公園では、

「いけ、稲妻^{ビリビリ}！」

「な、何だこいつ！？うわ、やっべえ！？」

「あれ？あ、そうだった！こいつ首が千切れても死なない不思議君だった！流石ゲッコー！そこまでわかってたん……」

「てい」

「え？わ、わ、やめろお」

「うわ、こら暴れんな」

「私に任せて。制止^{アルト}」

「お、お、おー！？何これすっげー！やばいよ、ゲッコー。あたし動けない」

「この使えない雑魚が」
「さ、雑魚じゃな……」

.....

台詞だけじゃいまいち何が起こっているかよく分からないので、やっぱり描写は必要だな。

まあ、私が見る分には困らないが。いや、それにしても面白いないつ天つて。

あの月光って奴はあれだな、俗に言う『ツンデレ』だな。自分の好意を正直に相手に伝える事の出来ない奴だからな。今だって捕まった美雷のために自分の唯一の武器、スベルエライ凶剣をあつさり手放しちゃったよ。優しいねえ。

それにしても、我らが主人公はまだ来ないのか。あんなに介入するって意気込んでいたのに。

早くこーい。待ってたぞ。

.....

「ん？」

なんか電波を受信したきが……気のせいだよな？

まあ、どうでもいいや。そんな事より早く合流しよ。急げ、急げ、デジ。ポヘ！……………すいません、寒かったですね。

と、

「殺してやる」

「そりゃこっちの台詞だ」

なんか滅茶苦茶物騒な台詞が聞こえた。ああ、大兎と月光が殺しあうシーンか。

止めようか？いや待て、この二人の喧嘩面白いんだよな。今も必死の形相で押し合ってるしな。

「も、もう、いい加減にしろよ、月光。お前の負け、だろ」

「馬鹿な。ま、負けるのは、お前だ、鉄大兎。雑魚は、さっさと、くたばれ」

「アハハハハハハハハッ！」

も、もう限界だ！こいつら、面白過ぎる！

「んな！？と、咎識！？」

大兎が驚いた様な表情でこちらを見る。

「足止めは、どうした」

月光も突然現れた俺に少し驚いたようだ。理知的な顔立ちが困惑で彩られている。

「あー、心配ない心配ない。ちゃんと置き土産としてあの部屋には入れないようにしてあるって。俺の異常負荷の一つ、プラスマイナスアテンションリリースアテンションリリース刑戒区域で」

「…本当か」

「うわー、ひどい。信用してないんだ。あんなに助けてあげたのに」

「ふん。手下の事等いちいち記憶するのも面倒だからな」

「それは上に立つ者としてどーよ？あ、そうだ」

俺は大兎の方を向いて、

「おいこら大兎！その炎を生身の人間に向けるんじゃないやねえ。危険だろうが。お前殺人者になりたいのか？」

「え、いや、その」

「大体、お前は考えなし過ぎんだよ。それを使うと一回命使うんだぞ。6回までなら死んでも大丈夫だからってバンバン使うな！中学校で『命は大切です』って習わなかったのか？」

「いや待て、何でお前がこいつの事知ってるんだ？」

「お前こそ何言ってたんだ？俺は宮阪高校生徒会副会長だぜ？知らない事は、大体はない」

「大体って…」

「まあ、とにかく、あれだ。これ以上争うってんならてめえらも殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

俺がそう言った時、

「じゃあ、いつそのこと君も殺されちゃいなよ」

そんな声が、公園に響いた。

『ああ！？誰だ！？』

大兎と月光が同時に言う。

「僕だよ」

その声にヒメアが、

「う、嘘。まさか、そんな」

「ヒメア、どうした」

大兎がヒメアに近づく。肩を抱きながら、もう一度「どうしたんだ」

と聞く。

それにヒメアは震えながら、

「あれは……ヒナタ」

それを聞いて大兎は、

「なっ！？あいつが？……月光にそっくりじゃん」

「そりゃあそうさ。あいつらは、……双子だからな」俺がネタバラしをする。

「え！？そうなのか月光！」

月光は不機嫌そうに、「ああ…そうだ」と答える。

「あいつは俺の弟のくせに自分の方が天才だと思い込んでいる馬鹿だ」

「ははっ、馬鹿はどっちな？まあそんな事証明するまでもないけど」

「アハハッ。面白いなあおまえらは。よし、決めた」

「こいつは俺達全員で倒しちゃおう」

『ええええええええええええええええええええええええ！？』↑俺と月光と日向以外の一同。

「な、何言ってるのよ！？あんなのに私達だけで勝てるわけないでしょ！？」

「あれ？心配してくれてんの？」

「そんなわけないでしょ。私は私自身と大兎の心配をしているのよ。大兎以外の人間が全て消えようと私は構わないわ」

「いや、それはちょっと止めてくれ、ヒメア。俺は流石にそこまでされると」

「私は大兎と一緒にいいの！！」

そんなイチャイチャしているところを見せられると、

「お前らぶつ殺すぞ？」

わりと本気の殺気を放ちなくなってしまうじゃないか。

「ひっ」

「咎識、おちっ……」

「五月蠅い黙れ言い訳するな」

『はい！すいませんでした！！』

ヒメアでさえ謝った。

「……もう良いかな？」

日向が話し掛けてくる。今まで待っててくれてたのか。良い奴だ。

「おう。すまん。それじゃ、始めるか」

「イッツショウタイム。……ゲームの始まりだ」

次回に続く。

第五話・前（後書き）

はいはい、今回も新しいスキルが出ましたよ。

アテンションフリーズ
その名も刑戒区域です！！

内容は、まあぶっちゃけるとその場にいる人間の精神に作用するスキルです。

名前は最初考えた時、「これはねえだろ」と思いましたが、見てみるとどうでも良くなってしまっこの名前になりました。いや、一文字変えるだけでこんなにまがまがしくなるんですね。まあ、厨二っぽいですけど。

さて次回！

次回は遂に日向との熱い？戦いです！場合によっては熱くなる前に終わってしまうかもしれませんがその時は、

作「ごめんなさい！」

零「決意も三日坊主かよ」
作「うつつ」

次回もよろしく願います！

第五話・後（前書き）

何か変な人がいる……。

何この神っぽいの。

あ、後これで一巻の内容は終わりです。なので、次回から「紅月光の生徒会室1」の内容に入ります。

感想等よろしくお願いします。

第五話・後

「行くぜ。デーマソング 光化静翔」

俺は光の速さで動く。日向に向かって突進していく。それはもう人間には反応どころか視認すら出来ない超光速だ。

現に日向も俺のことは見えちゃいない。そして、もう少しで日向に届くというところで、

「キシヤアアアアア！」

日向の使い魔が反応した。異様な速さで俺に向かって糸を吐く。俺は咄嗟に異常負荷の一つ、オペレーション 狂操曲を使って空中を蹴って逃れる。

「…美雷。あの蜘蛛の動きを抑えろ」

「ふえ？わ、分かった」

「ヒメアは下がっていてくれ」

「……私も戦う」

「な！？駄目だって。お前がまた攫われるのは御免だ。俺はもう二度とお前と離れたくないんだ！」

「た、大兎／＼」

.....。

『おまえらいちゃつくのはあとにしろ！！！』

俺＋月光＋美雷の同時突っ込みであった。この状況でいちゃつくつて、どんだけバカップルなんだ。凄すぎ。

とりあえずバカップルは放っておこう。

「賑やかだね、兄さん。類は友を呼ぶって本当だね。愚かな兄さんに相応しい」

「ハッ。お前にはその魔物がお似合いだな。お前に似て糞の様な、雑魚だ」

「その雑魚に良いようにあしらわれている兄さん達はその雑魚以下だよ」

「馬鹿な。俺がその雑魚にどうあしらわれていると言っただ？」

「ははっ、そんな事にも気付かないんなんで、相変わらず兄さんは流石だなあ」

「まあな。そんな事に気付く必要もないくらいに、お前よりも二万歩程先に進んでしまった」

「二万歩先？二万歩後の間違いじゃないですか？」

こいつらはこいつらで兄弟喧嘩を始める。

「お前らいい加減にしろおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！！！！！！」

我慢できずに怒鳴ってしまった。こいつら緊張感つてもんがないのか！！どいつもこいつも勝手に自分達の世界に入り込みやがて！！叩きのめすぞ！！

「ああもう、イライラしてきた！もう限界だ！俺は本気でめえをぶつ潰す！その後てめえらもボコボコにしてやるから覚悟しろ！」
『すいませんでしたああああああああああああああああああああああああああああああ！！』

例により、月光と日向以外は土下座した。うん、少し気が晴れた。

「よし。まあいいか。じゃあ、お前らは動くなよ。俺が一人でやる」
『え！？』

鉄達は意外だ、という顔をする。

どういうことだったところ。

「いや、だってお前がそんな台詞を言うとは思わなかったから……」

「うんうん。だって零華ちゃん、それが人のためになる事だったら絶対にやろうとしないでしょ」

マジで？俺のキャラってそんな感じなの？何その鬼畜キャラ。まあ
そういうキャラなら、

「気まぐれだよ」

こう言って置けば大丈夫だろ。

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
 みだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽し
 しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
 みだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだな
 あ。

それじゃ、早速オチビちゃんに頼むとしようか。

[illegible]

「アハハハハハハハハハハッ！」

俺は笑いながら日向の周りを走る、奔る、趨る。

「キャハハハハハハハハハハッ！」

なんか俺、トリップしてしまったようだ。自分の中から沸き上がる衝動が抑えられない。

宗像形の殺人衝動。

[illegible]

あれ、こんな性格だったわけ？

……まあ、いいか。

「兄さんの周りにはこんな奴しかいないのかい？何なら僕の使い魔を一匹あげようか？」

日向が心配そうに月光に言う。ま、そもそも日向は月光の事を大切に思っているから悪魔の生け贄に捧げようとしたんだろうけど……。

「そんな事は関係ねえ！俺はてめえをぶち殺せたらそれで良い！！だからさっさと殺りあおうじゃねえか！！！」

「君、五月蠅いよ。僕は兄さんと会話しているんだ」

日向がイラッとした表情で呟く。そして右手をこちらに向けてくる。

「おい、月光」

俺は月光に都城の人心支配の応用で話し掛ける。

「（何だ）」

「（俺が日向にダメージを与える。その隙にあいつの核を斬れ）」

「（お前、何故それを知っている？）」「

「（俺を誰だと思っている？生徒会副会長だぜ？）」「

「（……………）」

「（やるか？やらないか？どっちだ）」

「（…良いだろう。やってやる）」

「（それでこそ月光♪）」

「いくぞこら」

俺は両手に荒廃した腐花ヨフロフレスシアを全開にした。余りの力に周囲の空間が腐っていく。

「お前、それ」

「気にすんな」

大兎にそう返して思いっきり突っ込んでいく。

「馬鹿正直に突っ込んでくるなんて、君は馬鹿かい？やれ」

日向は俺に向かって蜘蛛をけしかける。

「甘いッ」

俺はは蜘蛛を力一杯ぶん殴る。すると、蜘蛛は豆腐を殴った様にグ

ジュリと崩れる。辺りに腐肉が飛び散る。

「なっ!?!」

「ザーンネーン」

俺は右手を振りかぶる。え?何で右手かって?上条さんでもないのにつて?

ふふん。気分です。

「くっ」

日向は右手に集めた光を俺に向かって横風ぎに放つ。しかし、

「む・だ」

その光が俺の右手に触れた瞬間、光が、腐る。

「……ッ!?!」

日向が顔を歪ませる。

そんな日向に俺はとろける様な、腐った様な笑顔を見せ、

「くたばれ」

両手を日向の胸に押しつけた。

グジュリ、と日向の体が腐る。原型が失われていく。その中から小さな玉がでてくる。
その玉を月光が凶剣で斬る。

「終わった……」

誰かが小さく、呟いた。

後日譚、というか今回のオチ。

「おい、帰るぞ、美雷」

「ほーい」

「なあ、月光、俺も帰って良いか？」

「勝手にしろ」

「あ、なあ。俺達は…」

『勝手にしろ』

「何でそこで息が合うんだよ！」

『美雷と同じ事を言うな』

「…ああもう、いいや」

「あ、じゃあ大兎！私達もかえる？」

「ああ、そいつ《サイトヒメア》は駄目だ」

「なんでだよ」

「私は人間の指図はうけな…」

「また教会に監禁されるぞ」

『え！？』

「あ、じゃあお前ら生徒会に入れば？」

『え！？』

という訳で、

翌日。

ガラッ！

「あれ？どうしたんだい紅君？」

「仕事だ。鉄、とがし「れ・い・か」……零華、生徒会室に來い」

「OK」

「ちょ、ちょっと待てよ！？な、何で俺が」

「まあまあ、行こうぜ大兎」

「うわ、止めろとがし「れ・い・か」…零華。お前何で俺をつれてこうとすんだよ」

「ヒメアが今生徒会室で『大兎まだかな／＼まだかな／＼』って言うるんだけど」

「え！？」

「ついでに言えばこの仕事に失敗すれば世界が滅ぶ」

「え！？」

「そんじゃレッツラゴー」

「おっさんか!!」

「早く来い。零華、犬」

「誰が犬だ誰が」

「お前だ、雑魚」

「てめえ…」

「ははっ。楽しそうで良いね」

『どこがだ!』

「わお、息ぴったり」

『真似すんじゃないねえ!』

「ははっ」

いやあ。

退屈しないなあ、こっちは。

第一章、END

第五話・後（後書き）

さあ、始めました。もしくは終わりました。

いつか災厄の闇ウサギ、略せばいつ災！！の第一章、これでひとまず完結です。まあ、まだ続きますけど。

零「迷惑つてもんを考えろ」

作「おいおい、自虐は止めろ」

大「お前らいつもこんなんやってんのか？」

作「まあね」

零「俺はやりたくてやってる訳じゃない」

さて、突然ですがここでスキル説明！！

今回出てきたのは狂操曲オペレーションです！

これは、言ってしまうえば全ての無生物を、というか人間以外を操れるスキルです。何かチートじゃね？

零「チートだよ」

作「あ、やつぱ？」

言われてしまった。

それではそろそろこの辺で。

あ、次回は原作キャラと????の説明です。

キャラ紹介2（早い、そして蛇足）（前書き）

少しだけネタバレが含まれています。ご注意ください。ついでに零華の髪色ですが、黒髪のほうではなく、銀髪まだらの方です。ご注意ください。

では、始めます。

キャラ紹介2（早い、そして蛇足）

鉄 くろがねたいと
大兎

外見 少し茶色がかった髪、少しだけ吊り気味の強気な瞳、中肉中背・・というよりは、ほんの少し鍛えられた体。滅茶苦茶普通な奴でも顔立ちは一般的には格好いい部類。

能力 《七回死ぬまでは死なない》事。正確には6回目以降に死んだら不味い。《テンマ（漢字が出ない）の炎》。撃つ

代わりに使用者の上半身が吹き飛ぶ。大兎しか扱えない（今のところは）。大兎の右手に宿る。

性格 掴みきれないがお人好しと言う事はわかる。

身体能力 詳しくは知らないが人間の限界を遥かに越えてはいる（多分）。

くれないげつこう
紅月光

外見 漆黒の髪に、子供らしい感情をまるで感じさせない冷たい瞳、整った顔立ち。イケメンの部類に入る（全校女生徒↑零華は除く、に大人気になるぐらい）。

能力 魔術。黒守よりは劣る。

スベルエー
凶剣。神様でも殺す事が出来る剣。その力は圧倒的だが、唯一天魔には効果がない。

性格 簡単に言えばツンデレ。基本的には他人を見下すツンが勝っているが、仲間が危機に陥った時は助けようとするデレを発揮する。また、美雷には特に優しい。ロリコン？……すいません、暴言でした。

身体能力 高い。魔術で補強すれば更に。

あんどつみらい
安藤美雷

外見 百四十センチ台の身長、長い長いポニーテール、たれ目、お

つとりとした可愛らしい顔立ち。

能力 電。^{マクアエ}魔界という世界に住む《アンドウ》のスクラルドという強力な悪魔の子供。甘やかされて育ったため甘えん坊のマザコンだがその力は雷系統の全てを支配下におく。

性格 先程も書いた様に甘えん坊のマザコンのわがままな娘。それ以外ない。

身体能力 記す必要のないくらいに高い。

沙系ヒメア《さいとひめあ》

外見 十五歳くらい。細身のスタイルのいい体に長い足。身長は大兎の耳ぐらいの高さ。綺麗な薄桃色^{ラベンダー}の髪に白い肌。吊り気味の悪戯っぽい真紅の瞳、整った顔立ち。可愛いというよりは美しい。

能力 魔術。ただし月光より遙かに強大で黒守よりは少しだけ劣る。弱っているという事もあるが。

バールスクラ。ヒメアの中にいる、もう一人の人格？赤いゼリーのような力を使う。これに触れると溶ける。

???。ヒメアの中にいる女の人格。バールスクラよりも強力な力を持つ。使う魔術はバールスクラと同じ。

性格 大兎至上主義。人間嫌い、でも大兎が絡むと弱気になる（遥に対して等）。人間を見下す、大兎以外は。

時雨 遥^{しぐれはるか}

外見 綺麗な黒髪のみディアムに、優しげな笑顔。かなり可愛い部類。

能力 不明

性格 優しい。大兎の事になると特に。原作では大兎にヒメアが抱きつくとき涙目になって教室から飛び出していった。

身体能力 普通の人間。

備考 何らかの秘密あり。

????

外見 ???
能力 ???

???
???
???

性格 面白いもの好き。トラブルメーカー。適当、何に対しても。
身体能力 ???

備考 転生者を零華以外にも一人送った。

???

外見 百八十センチ台のかなりの高身長。イケメン。黒髪、黒瞳、
褐色の肌。

能力 刀神祭。ブレードカーニバル様々な刀を呼び出し使える。更に刀を持った場合、
身体能力が五倍になる。ホワイトアウト再開。不明。

性格 温厚、多分。零華と戦った後、零華に惚れた。

身体能力 零華の半分程度。ただし、刀を使うと零華を凌ぐ。
備考 転生者。

キャラ紹介2（早い、そして蛇足）（後書き）

何か、長く、書く、氣力が、ない……。

零「うわ、真っ白じゃねえか！何があった？」
作「……………」

次回から、紅月光の生徒会室1の内容です……………。

よろ、し……………。

バタッ！

零「あ、死んだ」

第六話（前書き）

何となく長くなった。

第六話

0

閑話休題。

一息憑こうぜ。

1

時系列的に大兔がゴキブリの襲撃を受けている頃、なぜか俺も襲撃を受けていた。相手は黒いフードを被った怪しさ100%の奴だ。こんな原作にいたっけ？と、こいつが目の前に現れた時思ったのだが、その疑問を解決する前にこいつが攻撃してきたのだ。何回か打ち合って見たが、こいつの速さは俺よりも数段遅い。これなら、異常負荷や選抜忍軍を使わなくても力押しで沈められる。そう思い、打撃を更に速くして目の前の相手に突き出し――

「ブレードカーニバル刀神祭、命名、>椿雨<」

空中からどこからともなく抜き身の日本刀を取り出し斬り掛かって来た。その速さは先程とは比べ物にならない。言うなれば自転車と音速ジェット機ぐらいの差だ。俺はまるつきり油断していたので、その斬撃を躲したり防いだりは出来なかった。がら空きの脇腹に日本刀の刃が迫る。触れる。そして上半身と下半身が離れ離れに――

ならなかった。

刀は俺の脇腹に触れている。服もその部分だけ裂けている。でも、

俺の体には傷一つない。

傷一つ。

これこそ、神が俺に与えた最後のスキル。

ノレッドゲージ
不傷者。

これは致命傷を受けた時のみ発動するスキルだ。例えば、首を叩き折られる程の蹴りを受けた場合、その場合だけダメージを受けない。それに、今のだって――。

俺は刀を持っている右手を掴み、荒廃した腐花を発動させる。右手首が腐った襲撃者は即座に振り払って後ろに下がる。逃げようとはしない。ただ自分の右手首の様子を調べているようだ。本当ならこ

の際に畳み掛けるか、逃げ出すという手があるのだが、今の違和感がそれを留める。

- - - 今の力、何だったんだ？ - - -

さっき奴が俺の手を振り払った時、あの時の力は尋常ではなかった。俺は万力で掴んでいた訳ではなかったが、あいつが振り切る事の出来ないぐらいの力で掴んでいた。そのつもりだった。なのに、なぜ？それに、刀を出した時もそうだ。あいつの身体能力は確かに人間の限界を越えるか越えないかぐらいだったが、デフォルトで人間の全てのパラメーター限界を越えている俺の反射神経をあっさりと越えて斬撃を通らせた。何なんだ？あの力は。

「あんたが咎識零華か？」

フードの襲撃者が話し掛けてきた。

「……………人違いです」

そう言つて踵を返し、逆方向へ歩きだす。それを見て

「いやいやちよつと。嘘つくなよ。確かに変な仮面をつけてはいるけど、その銀髪まだらと生徒会副会長の腕章はお前だろうが」

と言つてきて……俺はこいつと戦う理由も戦う気もないので適当に手を振つて歩いていく。ちなみにちらつとあいつがいった変な仮面だが、戯言シリーズの狐さんの仮面を拝借しているから。さーて今日から紅月光の生徒会室の始まりだ。この後芋虫と大兎が戦うからな。見なきゃ損損」

「お前も転生者だろ？咎識零華」

「……………何で知ってる？」

何でこいつが知っている。こいつはバグで現れたモブキャラのはずだ。そんな事知っている奴なんてこの世界にはいな――

「俺も転生者だよ。咎識零華」

は？

転生者？

俺と同じ？

.....。

奴はやつと相手をしてくれた、というような表情で答える。声が少し
涙ぐみながらに聞こえたのは、気のせいだと、信じたい。

「あんだ、名前は？」

男はフードを取る。その男は褐色の肌に整った顔立ち。黒い髪に、
同じく黒い瞳。百八十センチはある身長、それに比例するかのよう
に巨大な大太刀（>椿雨<と言ったか？）を肩に担ぎ堂々と名乗っ
た。

「俺の名は、やまはつら鞘走 そりし殺人だ。よろしく！」

暑苦しい奴だ、と思った。

2

この場合、どうすれば良いのだろう。フード野郎……もうフードではないが……、つまりこの鞘走だが、俺を襲撃したのは神……俺を殺して転生させた奴とは違う神様……に『俺を襲撃しろ』と言われたらしい。名前は教えてくれなかったそうだ。まあ俺もあの馬鹿の名前は聞いてないからな。聞きたくもないが。まあ、とにかく。俺達にはそもそも戦う理由はなかったと言う訳だ。互いに互いを攻撃する必要など全くとってないし、鞘走に至っては神から俺が女だと聞いて、襲撃の直前まで迷っていたそうだ。何だそのフェミニズム。転生者なんだからそれなりの能力を持っているにきまつてんだろが、と言ったらそれでもやっぱりなあ、と言っていた。だから何だよそのフェミニズム。

閑話休題。

まあ、悪気はなかったみたいだし、いいか。

ちなみに俺が仮面を外したら鞘走は顔を赤らめて目を逸らしやがった。……男だっつってんだろーが。

その時、プルルル、と携帯がなった。俺は近くで悶えてる鞘走を放つて置いて「もしもし」と応じる。月光だった。

「何だー」

『生徒会室に來い。掃除を手伝え』

「はいはい。あ、そうだ、月光」

『あ？』

「戦力になりそうな奴見つけた」

『はっ、どうせ雑魚だろ……』

「真っ二つにされかけた」『……………』

「本当だつて」

『……良いだろう。連れてこい』

「オッケー」

携帯を閉じる。そして、

「どうする？」

と問いかけた。

「どうするって、何を？」まだ顔を赤くしていた。だから男だつての。

その言葉に俺は全開の笑顔で答えた。

「生徒会、入らねえか？」

番外編にて、まさかの仲間ゲット。イエー。

第六話（後書き）

新しいキャラをだしました。キャラ設定でだした????の転生者です。やっと出せた……。

第七話（前書き）

今回は戦闘はありません。それどころか咎識と鞘走の絡みしかありません。

ご了承下さい。

零「何しようとしてんだ？」

作「ノーコメント」

零「……はあ」

第七話

「近寄るな。勘違いされるだろうが」

これまた時系列的に月光と美雷が二人で帰っている時、なぜか俺も男と帰っていた。先程戦った、というか俺としては遊びの一環だったのだが、まあ、とにかく戦った相手とだ。試合、いや、死合かな？俺はあいつに胴体真つ二つにされかけたし、あいつは俺に手首を腐らされたし、……………あ、そっぴゃあ、

「お前、大丈夫か？」

「え？何が？」

「何がって……、

「手首だよ、手首。右手首。俺が腐らせたところ」

「ん？心配してくれてんの？いやー、嬉しいなあ、心配してくれるだなんて。さっきまで敵だったのに。本当に嬉しいよ。それだけで俺の傷ついた心は癒えていくよ。

あ、じゃあお詫びとして俺とキスを……………」

「調子乗んな」

「いてっ」

ヒートアップした鞘走を殴り付ける。一割弱の力だったし大丈夫だろ。ついでに、右手首を掴み状態を調べる。

「あれ…………？」

そこにあつたはずの腐蝕がなくなっていた。きれいさっぱりになんの痕跡もなく。俺の大嘘憑きでもなけりゃここまで完全に、それもこんな早く治る訳もないのに。

「……お前、お前も、死なないためのスキルを？」

「おう。『ぶち殺されても大丈夫な様に渡しとくわ。まあ、怒らせん様にな』とか言つて」

「俺は虐殺嗜好の異常者じゃねえぞ……」

誰だ、俺のイメージをそんな不名誉な物にすり替えたくそ神は。本当に殺して解して並べて揃えて晒して刻んで炒めて千切つて潰して引き伸ばして刺して抉つて剥がして断じて刳り貫いて壊して歪めて縊つて――――、

閑話休題。

そのくそ神の事はとりあえず放つて置いて、問題はこいつの能力だ。俺の握力を軽々と振り切り、なおかつ荒廃した腐花で腐らせた右手首の腐蝕を簡単に、そして完全に消した。俺の大嘘憑きとも取れるスキル。まるで、傷を『なかったこと』にしたような。だが、少な

くとも、アブノーマル マイナス異常や過負荷ではないだろう。もしそうなら俺が感知出来るはずだ。なぜなら俺は、全てのスキルを保有しているのだから。だが、だからこそ、俺は違和感が拭えない。めだかボックス以外にそんな荒唐無稽で問答無用なスキルがある作品を俺は知らない――

「ああ。そりやそうだろ。だってこれは神様のオリジナルだからな」
「オリジナル？」

ブレードカーニバル
「刀神祭も、あと再開も神様が即興で作ったスキルだ」

「ふーん。けど何で？お前も間違って殺されたんだろ？だったら、自分の欲しいスキルなんて頼めば貰えるだろ？」

俺は疑問を口にする。俺を転生させた神は頼めば欲しいスキルをすぐにくれたんだが、こいつを転生させた別の神は願いを聞かなかったのだろうか。

「いやー、俺は特に希望はなかったからな。『おすすめでお願いします』って言ったら『んじゃ、適当に決めて、後で後悔すんなよー』って言つて、気が付いたら、この世界に放り出されてたんだ」
「アッバウトだな、おい……」

神様ってそんなんで勤まるのかよ。適当すぎるだろ。そんなんで良いんだったら俺だって神様になれるぞ。神話なんて余りあてになんねえな。まあ、神話なんて結局はただの創作だからな。だから、性格が違っていてもおかしくはないんだろうけど……、まさか、ゼウスとかオーデインとかヘラとかもそんな適当な奴らなんだろうか？

.....

おお、すげーなあいつ。適当に言った癖に私の名前をあてやがった。もしかして、あいつただの人間じゃないな！……まあ、転生者なんだからただの人間じゃないのは当然なんだけど。

きひひひひひ。

……キモいな。この笑い方は止めるか。私のキャラってこんなじやなかったはずだ。いや、双。さんじゃないけど。あそこまでキャラがぶれるのは異常だからな。あ、一番キャラがブレたのは忍。忍だったけど。

[illegible]

……うえっぷ。ゲエエツ。……笑い過ぎて昼ご飯がリバーすしかけた。

きもちわり……。

.....

何か盛大な笑いが聞こえた後、腹の底からアレなものがせりあがってくるような音が聞こえた気がしたんだが、……気にしない方がいいんだろうか？ 多分良いんだろうな。うん。

気にしない。

とにかく、だ。

俺が聞きたいのは、こいつの能力だ。

「えー、面倒くせーよ。キャラ設定2（早い、そして蛇足）を見りや分かるだろ」

「てめえ、こんなところでメタ発言してんじゃねえぞ……！？俺達には読めねえんだよ」

発言には気を付ける。

「つーかお前さ」

俺は鞘走に顔を近付けて言った。

「いちいち質問はぐらかして答えようとしてねえな。何を隠してやがんだ？」

「い、いや、その」

顔を近付けた途端、鞘走はいきなり赤くなって吃った。……男だつて何回言わせるつもりだ。いい加減にしないと、存在ごと『なかつたこと』にしてやろうか。

鞘走はひとしきり慌てた後、「いや、まあ別に隠す事じゃないし、いいか」と言つて、説明し始めた。

内容は、割愛。

「へえ、そんな能力なのか。チートだな」

「お前程じゃない」

「はは。まあな。でも、そのスキルは俺の、というか黒神の完成で
も習得は出来ないみたいだな」

「ブロックしてあるって言うってた」

「なーる」

道理でコピー出来ない訳だ。そんな理由があったとは、な。感じていた違和感はこれが原因か。

「はー納得納得、これでしっかりきっちりはつきりくつきりぼつきりごつきりぽつきりと納得したよ。ありがとな、教えてくれて」

「後半が異様に恐かったが、うん、役にたったのなら良かった」

「うんうん」

こんな話をしながら、俺達は二人並んで帰路についた。

「あ、やっぱお前離れて歩け」

「何で！？そんな嫌な事したか！？」

「いや、さつきから感じていた生温い視線は多分俺達が仲睦まじそうに並んで歩きながら会話していたからだということに、今思い当たってな。恐らくデート中のカップルだと思われたんだろう。俺もかなりお前に接近したような事があったからな」

「え？そう思わせておけば良いじゃん。別に悪い事じゃないだろう」

「……………」

「どうした？いきなりだまつ……………」

「じゃあな」

アリバイブロック
腑罪証明発動。

「ああっ！？逃げやがったな！？」

「何だっただ？今の感覚……………」
カップルだのデート中だのといったワードが出た時、落ち着かなくなった。俺は普通に言葉を発したただけなのに…………。

どうなっただ？

.....

体が変化すれば精神も変化する、ということだよ、咎識くん。いや、咎識ちゃん、かな？

[illegible]

第七話（後書き）

零「とんでもねえ伏線をはってくれたな……！！」

作「まあまあ、伏線つてのは放られるためにあるんだぜ？」

零「読者に見捨てられるぞ……？」

作「え！？」

それは困る……！！

すいませんでした……！！何とか辻褄合わせするんで見捨てないで……！！

零「ホント、馬鹿だな、こいつ」

あ、まだ紅月光の生徒会室に絡ませてない。

次回こそ！絡ませますので！見捨てないで下さい！

お願いします……！！

第八話 爛れた愛のキューピッド（前書き）

今回は吸皮塗の事件です。零華の心の女化はどうなるのか!？
それでは！スタートです!!

零「テンションたけえな」

作「うざいと思うかい？」

零「かなり」

シヨボーン。

は、始まります!!

零「……焦りすぎ」

第八話 爛れた愛のキューピッド

0

二度有ることは、

三度どころか幾度とあるだろう。

1

中学の頃、誰もが振り返る程の美人になりたいと憧れた。

そのために、美人になるためなら何でもした。化粧やファッションの勉強、整形、男の子の目に魅力的に映るための仕草の研究。

高校デビューを果たす頃には、街を歩くだけで殆どの男子が振り向くような美人になっていた。二年で美人が多いと言われているこの、西アリア女学院のミスの肩書きまで手に入れた。

もう手に入らない物などない。欲しいバッグがあれば男の子から貰えば良いし。ちょっと好きな男の子がいれば、街中で声を掛けるだけではいほいついてくる。今や私、こと佐藤早苗は、この世の春を完全なまでに謳歌していた。

零華SIDE

なぐんで。

どうでした？俺の朗読は。なかなか良かったでしょ？え？鬱陶しい？いまさら言うことじゃない？

……すいませんでした。
まあ。

とにかく、だ。

今の俺の目的は、あいつと月光のやりとりを目撃することだ。何故かって？

まだ、紅月光の生徒会室に介入してねえからだよ！

「俺としたことが、とんだへまをしちまったもんだぜ。ったくよー」
鞘走の襲撃があつたし、俺は俺でキャラがブレるし、なーんか上手
くいかねえんだよな。くそ神が何か細工してんじゃねえのか？

.....

げっ、気付かれるか。何だあいつ、滅茶苦茶勘が鋭いじゃねーの。
あんな（元）人間がいるなんて、しんじらんねー。

それに鞘走も鞘走で零華ちゃんに惚れちゃうしさ。計算外の事ばっ
かだよ。

畜生、これじゃ鞘走を送ったのは間違いだったかな？あいつがフェ
ミニストって事は分かってたけど、まさか、零華ちゃんみたいな性
格と容姿の子が好みだったとは。いやはや、かなりのミスだな、こ
りゃ。

「やあ、.....久しぶり」
あん？.....おー、.....君かー、おっひさー。元気してた？

「まあまあ、かな？」

ふーん。あ、そっぴや聞いたぜ？お前さんとも一人転生させたんだってな。どうだいそちらは。

「うん、まあ楽しくやっっているみたいだよ。僕の渡した能力も使いこなしてるみたいだしね」

ハッ、>能力く、ねえ……。何だっただけ、えーと、>全ての存在は墓標の証へと化すくだったっけ？

「うん。造語で>オーツール・イズ・ザ・グレイヴシンボルくだよ」

でも、お前も物好きだよな、自分のスキルをわざわざ貸し出すなんて。それも丸ごと、さ。

「それを言うなら、君だって刀神祭を彼に貸したじゃないか」

ハッ、あれは本来の半分程度の力しか渡してねーよ。本当なら、刀を出した瞬間に相手は終わってる。あいつには、アレくらいが丁度良い。

「…………>彼くみたいに、暴走しないように？」

……………今それを蒸し返すか。お前も執念深いね。

「でも、事実だ」

……………。

「それに、あのせいで、>彼女くも力をいつ暴走させるか、暴発させるか分からない爆弾になったんだよ？」

それをさせないために、私もバランスをとっているんだ。オチビちゃんには、あれ以上背負って欲しくない。

「そうだね……」

.....

「さて、と。どうしようかな？あいつの罾っばいイベントが起こるまで何しとこう」

正直、暇です。何もする事ねえんだもん。

「あ、そうだ」

今の内にちよつと調整しとこう。

チューニング
「調慄師」

「完了」

俺は閉じていた目を開く。少し滲んでいた汗をハンカチで拭き取る

うとポケットをまさぐったが、空っぽだった。その際、スカートが若干めくれたが、俺はもう（一応）男の精神に調律したので、精々ウザイ、と思うくらいだ。まあ、急場凌ぎだろうが。そろそろいいかな？

よし。

帰ろう。

「おい、待てよ零華」

……。うざい奴が来てしまった。これだから嫌なんだ。

「一緒に「断る」まだ言い切ってないよ!？」

俺は即答で却下する。もうこいつに介入の邪魔をして欲しくない。

帰ろ、帰ろ、お家に帰ろ。……………まだ調律が必要かな？

「おいおい、無視すんなよ、零華」

「うるさい黙れ俺を名前で呼ぶないっそのこと話しかけるな俺はお前の事が嫌いですこう言っておけばいいかな、鞘走君それともぼこぼこにされなきゃ気が済まない？ だったら早く言ってくれればいいのに言ってくればさっさと殺して解して並べて揃えて晒して刻んで炒めて千切って潰して引き伸ばして刺して抉って剥がして断じて剥り貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して食らって辱めて叩いて殴って蹴って踏んでへし折って裂いて崩して砕いて狂わせて溺れさせて欠けさせて溶かして病ませて外して散らせて切って割って渴かして腐らせて無くして開いて劣化させて押しつけて傷ませて燃やして焦げさせて破って埋めて死なせて終わらせてあげるのに」

「前より長くなってる……………」

当たり前だ。お前にはこのくらいで……………いや、まだいけるかな？

「コワッ！既に顔に考えが出てるよ!？」

閑話休題。

俺達は再び一緒に道を歩いていた。

何故だ……。

調律したはずの精神にまた歪みが生じている。まずい、これは非常にまずい！頭では否定しているのに心がこいつに傾き始めている。俺は男だああああああああああああああああああああああああああああああ！！

と。

「おいこら、そこのにーちゃんたち」

滅茶苦茶頭が悪そうで不細工っぱい声が聞こえた。

.....

早苗SIDE

私は次の標的、咎識零華と鞘走殺人を襲うべく住宅が並ぶ道で待ち伏せていた。この前の安藤美雷の時とは違って変な噂もない、普通の高校生、らしい。

まあ、あんな化物がそう何人も何人もいるわけないしね！！
自分に言い聞かせる様に心の中で呟く。

「来ましたぜ、早苗さん」

と、見張っていた不良の一人が言った。

ふふん、さあ、どんな奴らか面を拝ませてもらおうじゃない。恐怖で歪む前のね！

私は笑みを浮かべて、その二人を見て、

「え？」

絶句した。

咎識零華の方は、はつきり言って、とんでもない美人だった。

整った顔立ち――整形でもこうはいかないだろうと思うくらいに、綺麗な顔。身長も女子の中では高い部類に入るだろう。体の線も細く、すぐに折れてしまいそうな印象を受ける。それによって、彼女のスタイルも一層良いものに見えてくる。

しかし、その中で、最も際立つのは、今日、不良でもそうはしないだろう銀髪まだらに染まった鎖骨辺りまで伸びた髪。そして何より異彩を放つのは、彼女の右頬に刻まれた刺青だろう。女子が顔に刺青。頭髮は毒々しい印象の銀髪まだら。これ程の悪印象があるにも関わらず、彼女は美しかった。

……って、何で私はここまで詳しく描写してるのよ！
もう良いわ。と、男の方は……

こちらも、超美形だった。

というより、超の上に更に三つ程超をつけてようやくバランスがとれる程の、美形だった。

褐色の肌は、見るものにいかにもスポークスマンという印象を受けさせる。

黒い髪に、同じように黒い瞳。黒い瞳はあの紅月光と同じだが、彼とは真逆で、むしろ明るそうな、快活なイメージの光が宿った瞳。

何だか見ているだけで引き込まれそうな印象がある。身長は、こちらもまた高く、優に180センチはあるだろう。背の高い美少女と背の高い美少年。

とても、お似合い野組み合わせだった。

男の方は女の方に何かを話しかけ、彼女はそれに呆れ顔で返す。男の方は彼女のリアクションに一喜一憂し、女の方も、そんな相方のため息をついてはいるが、そう嫌でもないのか、口元が少し綻んでいる。

見ているだけで、嫉妬の炎に焼かれそうな雰囲気だった。

……あれ？

何で私はあのカップルに見惚れているの？

……ああもう！？

「貴方達！！早くあの二人をやってきなさい！！」

「で、でも早苗さん……」

あーくそ！こいつらもあてられた！

「やってきたら、あの女の方は好きにしていいわよ」

前にも言った気がする台詞だけど、その言葉に不良達は、

『はい！行つてきます！！』

と、張り切つて出ていった。

ふう、これで決まりね。

『おいこら、そこのにーちゃんたち』

『あん？何だお前ら』

『……あーはいはい、成る程ね。あの話のモブキャラか』

『んだとてめえ！？』

『俺達が女に手を出せないとも思つてんのか？』

『……うわー、相変わらずモブっぽい台詞』

『なあ、零華。こいつら、どうする？』

『んー、俺が片付ける』

『おいおい、ねーちゃん。どうやって俺達を片付けるって？』

『こつやつて』

咎識零華の声が聞こえた後、ぐしゃあ、という音が聞こえた。
慌ててそちらを見ると、

不良達が彼女の前に跪いていた。

「……へ？」

我ながら、間抜けな声を出したものだ。

.....

さつてと、終わりだな。

「……凄いな、言葉の重み」

「まだフルパワーじゃないけど」

よし、今度こそ帰ろう。

跪いている不良の間を通り、帰路につく。

ふと、横を見ると佐藤早苗がいた。目が合うと、滅茶苦茶恐怖に歪んだ顔でこちらを見ていた。
だから、

「さようなら」

にっこりと笑いかけ、その場を去った。

二日後。

吸皮塗^{きゅつひじ}が、学校に現れた。

「……げえ……」

と大兎が言った。まあ、その気持ちは分かる。

佐藤早苗「吸皮塗だが、彼女は天井にブリッジして張りついていた。エクソシストかよ。口からはよだれが垂れ流しだし、マジでキモい。」

「佐藤早苗か？」

分かり切っているくせに。

『ソ、ソウダ、キョウフ、ニオビエル、オンナノネガイ、ヲキイテ、コロ、コロコロ、コロシニキタ』

「そうか」↑月光

「暇な奴」↑俺

『サアモウアキラメロ、コロシテヤルゾ、クレナイゲッコー』
ブリッジな女の子、略してブリッジ子と月光の会話。

「要人ってお前かよ！」

月光は大きく頷き、

「俺を中心に地球は回っているからな」

「はあ？じゃあ何？お前が原因つて事？」

「ああ。全く、迷惑だ」

「迷惑なのはお前だあ ああ！」

ウルサイ

あ、
粘液。

「危ねえ！つていてええええええ！？」

『ナ、ナンデシナナイ、ノロイノカカタ、イエキダゾ？ニンゲンガフレテ、イキテイラレルハズガナイ』すると、何故か月光が得意げな笑みを浮かべ、

「……だから前にも言ったろう？ 雑魚と神では格が違うと。妖怪風情が一体、うちの生徒会に何をしにきた？ 俺を殺す？ 誰が？ お前では俺の部下すら殺せない。悪魔と、最古の魔術師ヴァンパイアと、不死身の雑魚と、生徒会副会長と、女ボケの剣豪と……そして天才の俺を相手に、妖怪一匹が何をするつもりだ？」
『ア、アクマ？ ヴァンパイア？ ソ、ソッナハナシハ、キイテナ……』」

「聞いてなくても不幸は訪れる」

良いこと言った、月光。

『チヨ、チヨットマツテクレ、アノ、ナンデモイウコトヲ……』

「ハッ、雑魚の命乞いなど聞こえないな」

タ、タスケテエエエ……

うん、もう良いだろ。

月光が倒したし。

それでは、また会おう！

ついでに、

この二週間後、再び吸皮塗が現れた。

この時の月光の一言。

「……………嘘だろ、おい」

以上、終了。

第八話 爛れた愛のキューピッド（後書き）

……いやー……。何でしょう。

コメントしづらい話でしたねえ。

誰だよ、>彼くって。

まあ、もう決めてありますけど、登場。

オリジナルストーリーくらいです。

いつになるか分かりませんが、それまで応援、そして感想、レビュー、PV等、よろしく願います。

後、微妙に『アスラクラインの世界に転生しました』とクロスしました。

平行世界の接点です。

そちらもよろしく。

それではこの辺で。

あ、それと、零華のスキルは多すぎるので、今度まとめっぽいものを作ります。

また会いましょう！

恐怖と恐慌の校内ドラッグストア（前書き）

これからしばらく投稿出来ません。

色々あるので。

ごめんなさい。

恐怖と恐慌の校内ドラッグストア

「手を差し伸べるのは容易だ。
だが、差し伸べ続けるのは拷問だろう?」

学校の講堂に、

『ダメ。ゼツタイ』

と書かれた垂れ幕がかかっている。

その下を生徒会長である紅月光と副会長である咎識零華がゆつくりと進んでいく。

漆黒の髪に、冷たい瞳。宮阪高校の詰め襟の制服をきっちりと首まで締め、腰のベルトにはフェンシングの剣のようなものを吊り下げている――なんていうその姿に、学校中の女子達は夢中だ。

またもう一人だが――説明は省かせてもらうが、男子達女子達には隠れた人気がある、らしい。

……うん。

彼らが講堂に現れた瞬間から、まるでアイドルか何かが登場したかのように、キヤーキヤーと黄色い声上がり始める。

「……………」

「……………(苦)」

しかしその、女子達の声をまるで気にせず(若干一名苦笑い)月光

達は進んでいく。そのまま壇上へと上がり、まるで睨み付けるかのように全校生徒1320人を見つめる。続いて前にあるマイクがオンになっているか確認するように、彼はマイクをポンポンと叩く。するとまた、女の子達がキヤーと叫び、それにむかって月光は、

「黙れクズども」

と、言った。

そんなことを女の子に言った日にはもう、翌日から学校中の女子に一斉に無視とかされそうなものだが、しかし女の子達は、

『はい？』

とか、言う。静かになる。その余りの月光の人気ぶりを、男子生徒達（プラス副会長）が苦々しい（副会長は苦笑い）でみる。

スポーツ万能学業優秀女の子にモテモテ先生の信頼も厚い、更にまだ一年生だというのになぜか生徒会長……なんていう、もう漫画のキャラでもないような肩書を持ちまくっている彼は、静まり返った講堂の中を鋭い瞳で見回す。

「（お前に逆らおうとする奴はいねーって）」

後ろに立っていた零華が月光に耳打ちする。

その時また五月蠅くなりそうな雰囲気になったが、それを彼女は一睨みで静める。

そして、月光は彼女に小さく頷くと、続けた。

「あゝ、五、六時限めを潰してお前らに集まってもらったのは、俺から少し話があるからだ。しかしその話を始める前に、まずはこの、上に掛かっている垂れ幕を見てみる」

と、じぶんの頭上を指差す。それに生徒全員が、月光の頭上の壁に掛かっている垂れ幕を見る。するとそこには、

『ダメ。ゼツタイ。薬物の恐怖について考えてみよう教室』

なんて事が、……ってもういいや。どうせ読んだことのある人には分かっているし、読んだことのない人もここまで聞けばわかるだろう。

俺たちは今、講堂にて講演みたいなことをしている。まあ、こんな

ったのはここにいる俺様生徒会長のせいなんだけど。
そこら辺は、まあ、割愛させていただきます。

.....

その>男<は荒野を歩いていて、>男<は、浴びるものを焼き殺さんばかりに照りつける太陽をもとめせずに、のんびりと歩き続ける。

正体不明の>獣<の死体を量産しながら。

蛸のような怪物や鷲と象を組み合わせたような怪物。麒麟の様な角を持った狐や鮫のようにエラやヒレがついた馬。

他にもアメンボやら狸やらイタチやら羊やら蛇やら鰻やら鰐やら蛭みみず

やら鯨やら鴉やらロバやら鯨やら鯛やらエイやら獅子やら虎やら熊
やら蜥蜴とがげやら兎やら猪やら犬やら猿やら雉なめくじやら蛙やら狼やらピラニ
アやら猫やら蟹かたつむりやら蝸牛かたつむりやらキツツキやら蜂やら蟻やらバッタやら
蝙蝠こうもりやら亀やらカッコウやら白鷺しらぬぎやら螳螂かまきりやらモグラやら金糸雀かなりあやら
蝉せみやらカワウソやらハブやら牛やらカンガルーやら鼠ねえやら鴛鴦あざやら海
豹やらペンギンやらゴキブリやら蝶々やらチンパンジーやら翻車魚まんぼつ
やら鮫鯨あひづやら蠍さそりやら蛙やら海老やら烏賊いかやら蛭こおろぎ - - 鵜うやら龍やら
ペガサスやら火蜥蜴やら鳳凰やら人魚やら巨人やら鬼やら悪魔やら
天使やら蛇女やらミイラやらゴブリンやら - - 、
様々な>獣<が、死んでいた。

>男<は歩く。

>獣<が襲う。

>男<が睨む。

>獣<が死ぬ。

この繰り返しだった。

>男<は荒野を歩く。

ただただ、歩き続ける。

不遜に不敵に不穩に不屈に不快に不毛に不徳に不純に不吉に不壊に
不当に不実に不様に不朽に不正に不断に
不死に。

歩き続ける。

そして、

『きひ』

高らかに、

נענע

誇らしげに、

עצערענע

狂^{たの}しげに、

[illegible]

哄笑した。

大兎SIDE

「……てか、こんな人数の中からクスリやってる奴を探すなんて、ぜってー無理だと思っけどなあ」

俺は独り言を呟く。

前を通り過ぎる二、三年生の先輩方を見ながら、愚痴る。

『俺の演説を聞いて、拳動不審になる奴がいるはずだ。それを見つけて』

と、
いう月光の命令を思い出す。

「拳動がおかしい奴、拳動がおかしい奴、ねえ」
 呟きながら、先輩方の群れを見ていく。

しかし、やはりと言うか、見つからない。

第一、まだ一年生の俺が上級生ばかり通るここに立っているだけでちょっと睨まれたり、絡まれてしまつて、とても監視なんて出来ない……

とそこで、ガラが悪い事で有名なラグビー部の先輩達がこちらを睨みながら、

「一年坊が誰を肅清するって……？」と言つて、

続いて、柔道部の奴らが

「ガキがあんまいきがんなよ」と言つて、

更に吹奏楽部の女の子が

「ちよつと一年の子を苛めるのやめなさいよ、震えておしっこちびりそうじゃな」いぎやははは

つてね、おまえらまじでぶっ飛ばすよほんとに。

しかし、そのイライラをどうにか堪える。

まあ、以前の俺だったら本当にちびつていたかもだが。

今は違う。

あの俺様生徒会長の月光に無理矢理生徒会役員の役職を押し付けられ、したらその生徒会は日々異世界から侵入してくる化け物やら悪魔やら>天魔くやらもうよくわからないものを退治したり管理する、なんていうこの漫画の話だよ、という様な、明らかに頭がおかしいとは思えない事を仕事にしている。

昨日も巨大なムカデのような化け物と殺しあいをしたのだ。

その翌日に今更柔道部の先輩に「てめえむかつくんだよ」とかいわれても、なあ。

「……はあ」

思わずため息をついた。

「ああん！？何だよそのため息はよ！？」

「……ああ、ええと……すみません。ちよつと先輩方に囲まれて、緊張しちゃいました」

「ああ？なめてつと痛い目みんぞコラア」

「んー、まあ>彼くが強いのは当たり前だし。それに苦戦するのは僕等がこつちの世界でしか実力の三割も引き出せないからだろ？」

それでも、だよ。

あいつの力は私すらも軽く凌駕する。自分の貰った能力を天井知らずに凶化しやがって。……オチビちゃんの責任とは言わないけど、>アイツくに自身の力の一つ、位置支配を丸ごと一つあげて、更に凶化のための>素質くまで渡しちまった。アレが一番のミスだな。

「……まあね。それでも、>彼くは止まる事は出来た。止められなかったとしても、止まる事は出来たはずだ。>彼くはそうしなかった。だから、」

オチビちゃんには罪はないって？そんな事はねえよ。……人間はそこまで強い心を持つている訳じゃねえ。力に引き摺られもすれば、力に溺れもする。私たちはそういう人間を導くために存在してるんじゃないか？

「……………悪かった」

良いって良いって、謝らせるためにいったんじゃねーから、さ。

「ああ。……！？おい！！」

んあ？どうし……

「>彼くがいない！！」

アアッ！？嘘だろ！？

「……………ツクソ！>彼く、君が送った少年（？）のところにんだ」

……………マジかよ。

……………

『俺、彼女にするなら絶対、弓道部の子か新体操部の子にするんだ』

「いや、回想を読むなよ」

「別に良いじゃん、空気読まない奴に比べたら」

「いやそういう事じゃなくて！？」

俺達は今、体育館のいり……

「ああん？てめえら何あたしらの場所に勝手に入ってきてんだよおい！」

「っああ！？どこがてめえらの場所だつて？ここはうちの通り道なんだよ！万年レオタード着た露出狂共は裸で街中走ってるや！」

「っんだとコラア！チョーシこいてっつつテコマスぞこの昔女共が！着物着て男の氣い引こうとしてんじゃねえよ」

「っなことしてねーし」

「してるし」

「アア！？」

「ンアアアアア！？」

「……………（哑然）」↑大兎

「……………俺、彼女にするなら絶対、弓道部の子か新体操部の子にするんだ！』」

「や、だからもう良いって」

リピートしてみた。

「あらら、ほんとにバジリスクの毒にやられてるね」

「ん？あれ、ヒメアこの毒について知ってるの？」

「知らないのはお前だけだ」

俺がそう言つと、

「マジで！？知らないの俺だけ！？」

大兎は一人頭を抱えた。

ぷっ、おもれー。

「何か、馬鹿にされた気がする」

「気のせいだ（ちっ、勘の鋭いやつめ）」

「副音声聞いてるけど？」

ミスった。

面倒なので、色々割愛。

「ええつと、おまえらがクスリやってんのはわかってんだ。で紅月光生徒会長が言った通り、生徒会は薬物中毒者を取り締まる事に決めた。手荒な真似をされたくなければ、俺の言う事に従え！」

大兎が啖呵を切った直後、彼女達の姿が変わる。皮膚が緑色になら、鱗のようなものが現れる。

そして、

『……ほう、ワタシが生み出すタマゴを奪うと、人間がそういうのか？』

なんてことを弓道部、新体操部、両方の女の子達がハモるように同

時に言つて。それもその声はまるで老人のような声で。

「……キモい」

と、それだけ俺は言つた。「近づくな、気持ち悪い、汚らわしい、皮膚が緑色だと？そんな人間に模した姿で俺の前に姿を現すな。おまえらみたいな殺して解して並べて揃えて晒す気すらしない。双。さん風に言えば人間試験不合格だ。まあ、おまえら等試験を受ける権利すらないがな。全く、そんな気持ち悪い姿でよく生きていられるな、この身の毛もよだつ化け物が。風穴すら開ける気の失せる、無関係でも関係なく、無抵抗でも抵抗なく、没交渉でも交渉なく貪るように食らい尽くそうという衝動すら起きないとはどういうことだ？それ程までに貴様らは人間として見られないと言う事か。まあ当然だろうなあ、クスリなんていけないもんやっちゃったもんなあ。おまえらもう終わったわ、後はおまえらは、精々派手に心臓を爆発させて死ぬだけだ。お疲れ様、おまえらの人生はもう終わりだ。

『残念だったね』

『モブキャラの皆さん』

『さつさと死んじまえ』」

ぐしゃあ、と。

魔獣化した女共がくずおれる。その顔は、絶望しきつたような、根こそぎ心の支柱をへし折られたような、そんな顔をしていた。

「完了っ」と

俺がそう言った直後、

「お、おい。お前今、何したんだ？」

と、大兎が聞いてきたので、海よりも深く空よりも広い心を持つ俺はその質問に答えてやる。

「……今、猛烈に異議を唱えなくなったんだが」

「気のせいだろう」

俺に矛盾はない。

「そうだな、これは強いて言えば、咎識零華の真骨頂その、『無意味な敗北感』と言っべきかな？」

「真骨頂？」

「ああ、そうだ。それを語るには、少々時間がかかるが良いか？」

「お、おう。良いぜ」

「そうか。ではどこから話したのか……」

「……」
↑大兎

「……」
↑ヒメア

「……」
↑俺

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ってなげーよ!!」

「どれだけ時間かける気よ……」

「……よし」

「考えがまとまったのか!？」

「ああ」

「全く、人間はどうしてこうも愚鈍なの？」

「では話そう」

『（ドキドキ）』

そんな二人の態度に報いるべく、俺は理由を……

「その場で考えた即興だが？」

『……………はああああああああああ！？』

「そんな怒鳴らんでも」

「普通に怒るわ！」

「人間の癖に私と大兎に無駄な時間を使わせるなんて！身の程をわきまえなさい！！」

「いや、そんな怒らんでもそれに、俺は言っただぞ？」

「『時間がかかるが良いか?』、と」

「そういう意味とは思わねーよ!」

「それはおまえらの受け取り方だろう。勝手に解釈した上でおまえらは俺を糾弾するのか?」

『う……………』

「あ、それにこの状況も俺のそのを上手く再現しているじゃないか」

『は?』

「無意味に時間を費やし、俺に言い負かされたじゃないか」

『……………』

鉄大兎、サイトヒメア。両者沈黙。二人とも開いた口が塞がらない。

そのまま固まる事、一分。

そして、

『負けたああああああああああ!』

絶叫。

その後、数時間は壊れていた二人だった。

ちなみに、その夜の鉄大兔をモルモットに使った実験には勿論と云うか何と云うか、俺も参加した。

「てめえらやめろ！それ以上俺に変なクスリ……がぁ」

「んー、月光。これも失敗だわ」

「くそが。……まあいい。よし、次の薬だ」

「ちょ、待って。ほんとそれ以上は……っていてえええええ！？」

「あ、また死んだ。なあ月光。ひょっとしてバジリスクの成分だけじゃ駄目なんじゃないか？」

「零華！？」

「ふむ、それも一理あるな。よし、じゃあ次はこいつで」

「月光！？」

「あははははは！不死身君顔真っ青！」

「美雷！？ちょ、おい！ほんとにやめる！」

大兎が生徒会室の隅を見る。そこには、昼間の講義の垂れ幕が丸めて放ってあった。

そして大兎は叫ぶ。

「ダメ！ゼツタイ！」

恐怖と恐慌の校内ドラッグストア、終了。

恐怖と恐慌の校内ドラッグストア（後書き）

鞘走が出せなかった……

まあいいや。

一応、次の話は本編の二巻目からです。
時期は合ってるのかなあ。

第九話（前書き）

すいません！

色々あって空きました。

もう終わりましたので、これから専念……とまではいかなくとも二日おきぐらいに投稿できそうです。

これからもお付き合い下さい！

あ、後いつの間にかアクセス数が一万越えていた事に驚きました！
本当にありがとうございます！

これからもよろしく願います！

第九話

0

君の行動は悪くないよ。

君の存在が悪かったんだ。

1

「あーめあーめふーれふーれもーっとふれー」

歌い声が聞こえる。

「あー……、れ？ 忘れた。……」

適当だった。

「……ピッチピッチチャップチャップランラン」

端折った。

替え歌したくせに途中で止めて端折って完結させやがった。

作曲者に謝れ。

「っていう自虐だったりなんだったり」

意味がわからない。

少しラリッてしまったのだろうか？

「まあ転生なんてしてる時点でラリッてるもくそもないだろうけど、な！」

と、言いつつ起き上がる。寝ていた態勢から飛び上がるように、跳ね起きる。

……俺ってもう人間捨ててるよね？ 異常の連中も過負荷の連中

も一部を除いてそんなにアクロバットは出来なかったはずだ。

十三組の十三人の一部くらいだろ、身体能力高いのって。

え？ 跳ね起きたぐらいで人間捨てるとは言わないって？

いや、違うんだよ。ごめん、少し捕足説明しようか。

分かりにくいしね。

実は今、まさしくI can flyしてるんだ。跳ね起きたただけで。

もう100メートルぐらいは跳んだんじゃないかなあ、うん。人間じゃない。

ここまで身体能力上がってるなんて聞いてねえぞ、幼女。

あ、いまさらだけど、咎識零華です。

歌ってんのも俺です。

妙に上手かったらしいけどね。

うららかなある日の昼休み風景だった。

これからのストーリーには何の関係もないけど。

.....

それは置いていて。

ただ今ゲインヴィックが校内で暴れています。

既に一クラスが喰われたところで、そして今もう一クラス、いや、二クラスが喰われてしまった。

大食いってのは本当みたいだ。どんな速さだよ。

いくら何でも速過ぎだろ。
どんな食いしん坊だよ。

あ、月光が首刎ねた。

黒い影からなんか人っぽいのが出てきた。

リアルで見ると、キモい。

小説の挿絵だとあんまり嫌悪感はなかったけど（むしろ『あゝ、何だこいつなんかかけ』とか言っていたはずだ）さすがに、ねえ？
フィクション リアルティ
二次元と三次元の差、というものが理解出来たよ。

ちなみにどうやって観察しているかというところ、
スルーシーイング
境界夢視を遣っているから。

補足説明は大事だからね。

教室内にて。

月光は影から（ゲインヴィックの死骸という名の影だが）現れた人（？）と対峙していた。

（？）と言うのは、それが人とあまり思えなかったからだ。
かけ
死骸にうねうねと絡み付く銀色の髪に、猫のような縦長の瞳孔を持った銀色の瞳。人を小馬鹿にしたような、裂け気味の大きな口。

（？）というか、もう明らかに人間ではないが、しかし化け物の血が半分混じった、人間の男のようにも見える。軽薄そうな二十代前

半の男のようにも見える。

人の姿を取る事のできる種類の化け物はいくつか知っているが、半妖なら、血が薄まっている分たいした相手ではない。

妖魔でも、たいした相手ではない。

狂った妖精の相手をした事もあるが、まあ、それも対処出来るだろう。

だが、そいつが悪魔なら。

「……………」

人の姿を取り、人語を解する悪魔は、彼の経験上それなりに厄介な相手だった。

月光はその、明らかに人には見えない銀髪男を見上げ、言った。

「半妖か？」

「へへへ」

「もしくは妖魔か？」

「ホホホ」

「……………」
「くそ。やはり悪魔か……………」
「なら、手加減はできんな」
すると銀髪の悪魔が言う。

「えへへ〜。ただのヒトが、僕相手に手加減んん？アハあは。笑わせる。アンマ吐かすと、思わずボク、キミを殺し……………」

「黙れよ雑魚……………」

と、月光の台詞が中断される。

銀髪の悪魔も笑いをおさめる。一瞬で警戒する。
なぜなら、

「刀神祭、命名、柳影 壺の型、――尽死――」

突如教室に乱入した鞘走の一撃が悪魔を襲ったからだ。

刀身を水平に構え、光速で振られた斬撃は悪魔の首に一直線に向かう。

「オットット」

悪魔はそんなことを言いながら、躲す。影に潜りながら刃を避ける。鞘走はちょうど月光と悪魔の間に停止する。つまらなそうな表情で立ち尽くす。

「……何の真似だ、鞘走。俺は出て来いとは言ってないぞ」

「ははっ、そう言うなって。別に邪魔をしに来た訳じゃない」

「じゃあ何なんだ」

苛立たし気に詰問する月光に鞘走は笑って告げる。

「いやー、凶剣はこいつには効かないよ、と言いに来ただけだ」

「……どういう事だ」

「そのまんまの意味だよ。凶剣そいつは確かに神でも悪魔でも殺す事のできる剣だ。だがな、その剣にも殺せないものは、あるんだよ。例えば、転がってきた柔らかく軽いボールが足にコツンと当たっても死ぬ事はない。たとえそれがメチャクチャなスピードでぶつかっても被害は皆無と言っても過言じゃない。それが柔らかく軽いボールではなく堅く重く速い弾丸 だったら話は別だが、それが『避ける必要のない脅威』ならそれはイコールで『殺す事は出来ない』、と言う事になる。……ん？話が逸れたな、ああ、つまりただのボールでは巨大な象は殺せないということだ。多少煩わしく思われるだけだろうな」

鞘走はそう言つて、締めくくつた。

それに月光は、「まさか」と呟く。

「まさか、天魔か？」

「正確にはその遣いだがな。まあ、どちらにせよ効かないのには違いない」

「へえエ。まさか、そこマデ知つてイルの力。『日向』が言つていたよりケツコウ良い駒を揃えてイルな」

その言葉に。

目の前の銀色の天魔の言つた一つの『ワード』に月光が反応を見せる。

「おい、貴様。今『日向』と言つたか？」

「ンン？ああ、言つたけど？ソウダ、この際だから今日向に言われた事、ソノママ復唱しちゃう」

「……………」

「ヒナタはこー言つてた。『サイトヒメアを飼うの、やめといた方が良く、兄さん。愚かな兄さんには多分、あの狂った魔女は手に負えない……』と言つてもまあ、聞いてくれないだろうから、もし、自分の分をわきまえずにあの女を飼うつもりなら、一つだけ忠告してあげよう。『月』からの侵蝕にだけ、気を付けて……』とか、言つてたかな〜ん」

と、言つたところで、化け物は、言つた。

「ハイ、ボクの仕事、おわ〜り」

しかし、月光は化け物に掴み掛かり、

「おい、今何て言つた？ヒナタと……日向とお前は言つたのか？」

「コタエル義務はないけれど……そーだよ」

「日向とは、紅日向の事か？」

「そー。おまえのフタゴの弟。見た目はオンナジなのに、性格と能力は、全然違うオトウ……」

「ふざけるな！」

月光はそこで怒鳴る。怒鳴つて剣を振るう。剣は化け物の頬に頭を

真つ二つにできる程の勢いで当たる。だが剣は、化け物の肌に傷一つつけられない。

しかし月光は言葉を止めなかった。化け物を睨み付け、

「弟は……日向は俺がこの剣で、殺した」

「と、キミに思わせる事がデキル程、二人の能力はかけ離れ……」

「黙れ！」

月光は革靴の底の、針を掴む。投げる。針が薄く光を纏って、化け物へと飛んでいくが、

「アハハハ、怒った。オコッタ。凶星を突かれて、おこった」

化け物はそれを、あっさり舌で絡めとってしまう。

「おいおい、まさか俺の事を忘れているわけじゃないよな？」

鞘走がその舌に向かって斬撃を繰り出す。光速で飛来したそれを化け物はなんとか回避する。

それに鞘走は刀の切っ先を向け、

「用事は済んだんだろ？なら、さっさとでていってくれないか。目障りだ」

「イワレなくても出ていくよ。もう、こんなトコロにいる必要もないし」

そう言つて、化け物は再び影に沈んでいく。

「うええ、何だこいつ」

鉄大兎と、サイトヒメアが入ってくる。

「雑魚どもが、遅すぎるぞ」

「いや、途中で教師に捕……」

「言い訳するな、クズが」

「つておま、わざわざ助けに来たのに、その言い方………ああああくそ、ま、まあ、今は状況が状況だから、良いけどさあ。で、一体どうなつてんの？」

「お前らが来るのが、馬鹿で有名な鉄大兎の頭の巡りよりも更に遅いから、既に俺が始末を終えた」

「つてほんと殺すよお前！」

しかし月光は相手にしない。天井のゲインヴィックを見上げ、
「で、これからお前はどつする？全ての仕事を終えたのなら、帰る
んだらう？」

「アア」

「生徒は返して貰えるのか？それとももう食ったのか？」

「ボクは人なんて下品な物、タベないよ」

「ならなんのために攫った？」

「シラベルためめ」。聖地 にいるモノの中身が、一体ドウナッ
テルかをネ」

「それで？」

「もう、主が満足するであロウだけの情報は、シラベ終えた」

「なら返せ」

「返すよ」

そう言つてらゲインヴィックが口を大きく開く。そのまま、こちら
を向いて、襲い掛かつてきて、

「うお、全然始末終わってねえじゃねえか！」

《ギギギギギギツガガガガガグがアガガガガガガ》

ゲインヴィックの刎ねられた首は悲鳴を上げた。その首を、剣で貫
く。床に縫い付ける。そして月光は、小さく呟く。

「こいつの命を消去しろ、凶剣」
スベル・エラ

「あー面白かった。あそこで鞘走を乱入させてみたけど、あいつ中々だな。剣の速さが常に光速って化け物かよ。零閃もビックリの光速剣術。いや、零閃はあくまで抜刀術だし斬刀狩りは刀身を血で塗らして鞘との摩擦を零にして発動するもんだからこの場合ただ振っただけで光速の斬撃を繰り出した鞘走はもつとすごいって事なんだろうなあ。あれは見習うものがあるな。今度俺も教わってみるか。いやいや、でも俺には光化静翔があるし、あんまり関係ねーんだよな。わざわざ振るより飛び回る方が面倒じゃないし、すっぽ抜けたらどうすんだ？素人が迂闊に手を出して限りある人生の時間を無為に浪費するのは避けなければいけない事態だよな。うん。諦めよう。ハッハッハ、俺は諦めの良い男と言われているからなあ。今は女だけど。あのくそ幼女のミスで女にされた訳だけど。でもやっぱりなんか納得いかねえんだよな。胸がなんかざわつくっつーか落ち着かねえっつーかよ。違和感ありまくりだぜ。スカートはスースーするし周りの視線がうぜーし、やなことだらけだぜったくよー、あ、そういうえば骨肉細工があったんだ。よーし、これで男に『性別の変換は出来ませんよ』という事だコラア！骨肉細工は性別関係ないんじゃないのか！？」

「エヘ」……顔面の皮剥ぐぞ。……

「ッ！ー」……まあいい。その事については今度たっぷりお話ししよう。さて、そろそろ俺も介入を再開するかな。とりあえず、……

「大兎と鞘走をぼこぼこにしよう。気晴らしとして」

「クスノキさん、こんにちは」

彼女は微笑んでそう言った。

「いつも学校を守ってくれて、ありがとね」

彼女は微笑んでそう言った。

「でも、今日はちょっとだけ……ちょっとだけ、その大きな力を抑えて貰うね」

彼女は微笑んでそう言った。

そして鞆から ナニカ を取り出す。人には見えない ナニカ を取り出し、それを塀の向こう、クスノキに向かって投げ込む。

「……さあ毒^{まじゆ}よ、弾けて」

と、そう言った、瞬間。

塀のなかの。

学校の中の雰囲気が変わる。

クスノキが苦痛の悲鳴をあげるのが、分かった。

大きな悲鳴が。

まるで雷鳴を轟かす様な悲鳴が学校の中で上がるのが、分かる。

「……ごめんね」

と、彼女は……遥はもう一度言う。

「……ほんとにごめんね」

と、彼女は……

第九話（後書き）

中途半端に終わった……。

零「お前、ほとんどいん」

作「それ以上言うな」

零「……はあ」

次回もよろしくお願いします。

第十話（前書き）

それでは、開始致します。

第十話

「友情は素晴らしい。
愛情は美しい。
妬ましいぐらいに」

零華SIDE

空が暗くなった。そろそろ原作の血の雨が降る頃だ。あれには少し興味がある。なんたって触ったら体が腐って崩れるんだぜ？荒廃した腐花とどう違うのか調べてみたい。

窓から眺めるともう夕方と思ってしまっ程に暗くなっていた。アニメ化したらどう表現するんだろう。気になるところだ。

閑話休題。

……閑話休題、なんか良いな使い勝手が。都合が悪くなったら『閑話休題！』とか言えば誤魔化せる気がする。
これからも積極的に使っていこう。

とか考えてるうちに、

ガガガガァン！

と、耳をつんざくような轟音が鳴り響いた。それはまるで、雷が脳天に落ちてきたかのような轟音で。

「でも、どっちにしろ不傷者があるから死なないけどね」
ノ・レッドゲージ

ガガガガァン！

もう一度轟音が鳴る。

それは、音だけで学校全体が壊されそうな、あまりに破壊的な轟音で。

「おゝ、こわ」

俺はそう言って、さして目的もなく、校舎を歩き始めた。

SIDE OUT

.....

その、約三十分前。

ゲインヴィックを操る銀色の化け物との戦闘を終えた後、月光は生徒会室へと戻ってきていた。

聖地 と呼ばれる次元の歪みを管理する事が出来るこの場所は、しかし、そんな特異な能力を持っている空間には見えない程、普通の、何の変哲もない生徒会室だった。

部屋には、あまり整理されていない書類棚に、美雷の馬鹿が妙ちくりんな犬の絵をラクガキしてしまっているホワイトボード（この前銃の乱射でぶっ壊れたので代わりを買いました）。長方形の会議用

机には、お湯を入れた保温ポットと、小さなカップにティーバッグ。後、カフェインの錠剤が四カプセル。

月光はその、カフェインの錠剤を口に放り込み、更に紅茶で胃の中に流し込む。

昨日の晩、丑三つ時まで 軍 に対する報告書を書いていたので少し寝不足だった。

山のようにあつた書類を丑三つ時までに仕上げる事が出来たのは咎識零華がいたおかげだろう。彼女がいたおかげで恐らく朝方まで粘らなければ終わらなそうな書類仕事を丑三つ時までに終えることが出来た。

そのまま、彼は椅子の背もたれに体を預け、

「ん」

と、伸びをする。それから、

「眠い」

と、呟く。

だが、まだ寝るわけにはいかなかった。

本当ならあの後、直ぐに帰って寝るつもりでいたのだ。書類をまとめ、提出し、帰る準備をしていたところで、更に追加の書類が来てしまった。

咎識とその対応に追われ、終わったのが結局、朝方だった。

それをもう一度提出し、登校してくる愚民共を尻目に家に帰って今日は休みにしてしまおう、と思ったところで、妙な報告が入ってしまった。朝のかなり早い段階で、用務員の一人が消えたのだという。その報告が月光のもとへやってきたのが朝六時。そして時間がたつごとに何人かの生徒達が消えていき、どうもそれが、ゲインヴィックという蛇の化け物の仕業だということが分かったのが、昼休み前。続いて 軍 からゲインヴィックの排除命令が出て、対応したのがついさつき。

そして。

「……………」

と、そこで、月光は机の、保温ポットの横に置いてある、書類の山を見る。

そこにある書類の山は、

- ・ゲインヴィック排除についての報告書
- ・何故、ゲインヴィックの侵入を許してしまったのかについての報告書。

- ・ゲインヴィックから受けた、被害状況についての報告書。
- ・今回の学校修復にかかった、術的費用についての報告書、などなど。

その全てのくだらない書類の、全ての馬鹿らしい設問を埋めて、提出する必要があった。

「……あの、無能なクソ役人共が」

そう言つて、長い足を上げる。そのまま革靴の裏で、書類を蹴り飛ばす。

この問題について咎識が言っていたのは、

『んゝ、こりゃいくら俺でも対処しきれない。せめてこつこつこの専門、書記が居れば少しはわかるんだけどなあ……』

だった。

「……書記^{ドレイ}、か。確かに一理あるな」
とそこで、

「じゃーん！」

という、女の声が、生徒会室後方の扉から上がる。

「じゃじゃーん！」

という、もう、こつち見てと言わんばかりの女の子の声が上がる・

- - が、しかし、月光はまるで何も聞こえていないかのように、振り回らない。そのまま腕組みをする。目を閉じる。独り、考えに耽

……

「ちょっとおおおおお、あたしじゃじゃーんって言ってるじゃん！何で無視かあああああああ！」

と叫んで、何かが迫ってくる気配がする。何かもの凄くめんどくさいものが迫ってくる気配がする。

が、それに、

「おい美雷。もし、おまえが俺に蹴りでも入れようものなら、お前が密かに俺の財布から金を抜いて買い集めている漫画本を全て焼き捨てるぞ？」

と、月光は言う。

『外道だ。下衆だ。悪鬼羅刹だ』、というのは鞘走の感想。

『いいねいいね、それでこそ月光だねえ。そこに痺れる！憧れないけど』、というのは咎識の感想。

とにかく、月光はそう言った。
すると、

「……あうあ」

という、恐怖に震えたような声がする。その声の方を見る。するとそこには一人の、たれ目なのに何故か強気そうに見える小柄な女子高生が、スカートが捲れるのもまるで気にせずに、蹴りを月光にたたき込んでこようとしている。

月光の生徒会役員ドレイの一人、安藤美雷だ。

その、美雷の革靴の裏を見る。靴下を見る。ふくらはぎから太腿へいき、スカートの中が目に入りそうになって、

「う、うわあ！？」

美雷が叫ぶ。足を下ろし、スカートを押さえる。童顔の- - -とい
うか、実際にまだ十四の子供なので、童顔という程でもないのだが
- - - その、小さな顔を、怒ったような、それでいて恥ずかしそう
な赤い色に染めて、

「げ、ゲッコーの、スケベ！」

と、叫ぶ。

それに月光は、美雷を見つめる。

なんでも、彼女が転入した一年四組の男子生徒達からは、美雷って抜けてるけど、可愛いよな、とか言われているらしい、可愛い顔を見つめ、一言。

「……俺はガキの汚いパンツには興味がな……」

「汚くなああああああああああああああい!？」

美雷が、今度こそ思いつき顔を赤くして、叫んだ。

ガチャツ、と扉が開き、鞆走が入ってきた。

「……お前ら、いつもそんななの？」

「女たらしに言うような事はない」

「相変わらずつめてえなあ、月光。そんなに試合で負けた事根に持つてんのか？」

「はっ、あれは負けたとは言わないな。そもそも奴隷に俺が本気でやと思うか？」

「……お前それ、負け惜しみって言うんだぞ？」

「負け惜しみ？馬鹿な。事実を言ったただけだ」

「なら、もっかいやる？」

「良いだろう」

「あたしを無視するなあああああああああああああい!？」

「うるさい」

「美雷、少し黙ってくれ。俺はこの天才^{はか}に優劣を教えてやらなきゃならないんだ」

「うるさくなあああああい!？」

『はあ……』

おさまるのに、かなり時間がかかった。

閑話休題。

閑話休題！

『もし兄さんが、狂った魔女、サイトヒメアを飼うつもりなら、
月』からの侵蝕にだけ、気を付けて……』

日向の言葉を思い出す。

この言葉について一番気になるポイントは、最後の、『気を付けて……』という部分だ。

その、まるで本当に心配しているかのような言葉の語尾に、
「……………」

月光はずっと、イライラし続けている。ヒナタの奴、俺をずっと馬鹿にし続け、おまけに悪魔に喰わせようとしたくせに、

「今更気を付けて、だと？笑わせる。……あいつは、どういう意図で俺に忠告なんてしてきた？」

理由を、考える。

月の侵蝕に気を付けて。

月。

「……月、か……」

そう言つて、彼は、机に立て掛けてあつた漆黒の剣を、見る。剣の、柄の部分を見る。『月』の形が装飾されている、剣の柄の部分を見つめる

「……月。月が一体、どうしたというのだ？……クソ。

少し寝よう」

「あ、ゲッコーお昼寝？」

「いや、本気で寝る」

「帰らないの？」

「うん？ああ……まあ、帰っても良いが……」

月光が頷いた、その時。

グニヤン、と。

生徒会室の壁の一部が歪む。ナニカが、こちらに入ろうとしている。

「……敵が来る」

「へ？」

「……椿雨、式の型、……染道……来た」

「ほえ？」

と、美雷が間抜けな声を出した直後、壁の歪みが穴になり、そこから化け物が現れた。

描写は……キモいので割愛。

「つかマジで割愛させてください！いくらなんでもキモいんですよ！

「何こいつ！？」

「俺が知るか」

「簡単に斬れそうだなあ」

更に突進してきた鞘走がその刀を掴み、化け物を文字通り粉微塵にした。

「ああ、愉しかった」

爽やかな笑顔で言う鞘走に、

『.....』

月光と美雷は、どん引きしていた。

.....

一方、零華はこっそりと大兎とヒメアを尾行していた。二人に気付かれぬように、知られざる英雄ミスターアンノウンを使い、更に光化静翔テーマソングを少しずつ、手加減しながら使用しブーストをかけて。

時刻は現在二時二十五分。大兎達が校舎内を走り始めて、二分程度たっていた。「つーか、マジはえーな、おい。光化静翔使ってるけどそれでも速いつて分かるな」

零華自身の身体能力は件の大兎のものを遥かに上回っているのだが、それについて零華の一言。

『えー、だって走るのめんどくさいんだよ。アレだぜ？体力使うんだぜ？筋力使うんだぜ？運動馬鹿とか大兎みたいな疲れても回復できる体質なら良いんだけどさ。その点、光化静翔は大してエネルギー使わないしな。っていうかむしろ俺はヒメアの魔法が習いたいね。走るより断然有意義な力と時間の使い方だぜ？それに大前提として、俺はインドア派なんだよ、インドア派。んじゃ、そういう事で、あ

でゅー』

だった。

もはや一言じゃない。

閑話休題。

大兎とヒメア《バカップル》が話している。

「……なんか、いるよな」

「いるね」

「すつげえやばそうだよな？」

「うん」

「敵かな？」

「……分かんない。けど……」

「ああ、まあ、俺既に四回殺されてるもんな。明らかに敵意はあるよな」

「……………」

「（目を閉じてても大丈夫なのか）なら、目つぶつても大丈夫か。………」

大兎がそこまで言った瞬間、いきなり廊下の灯りが一斉に消えた。一気に暗くなったためか大兎が慌てて足を止める。

「（慣れる、慣れる）」

大兎が心の中でそう念じると、段々と目が慣れ、周囲の景色が捉えられるようになる。

「さーで、バールスクラとごたいめ〜んってか？」

零華はニヤリと笑い、ヒメアが居るはずの視聴覚室に先回りする。

.....

大兎SIDE

「おい、ヒメア！どこだ！？」

俺は、ヒメアとはぐれてしまっていた。

カチカチ、カチカチ、という音に気を取られてヒメアがいなくなった事に気付かなかった。

「やつべ、嘘だろ。はぐれた」

俺は慌てて、廊下を戻る。最初の教室を覗いたがそこにはいなかった。更に走り、プレイホールを覗く。しかしそこにもいなかった。そのとき、

こっちだよ、ばか

という、声がした。妙にキーの高い声。

そちらに目を向けると、暗い廊下に、ヒメアが倒れていた。その彼女に群がるように、赤い、ゼリーのような物体が集まってきていて、それを見て俺は、

「ヒメア！？」

と、叫んだ。

そちらに走りだそうとすると、

「……き、来ちゃ駄目！」

ヒメアが言った。泣きそうな声で、こちらに顔を上げないまま。

「今行く」

「駄目」

「今行くから」

「こないで」

彼女が苦しそうに言う。泣きそうな、それでいて、もう、死んでしまいうような程苦しそうな声で、

「私を………こ、こんな私を………見ない………で」

彼女は言う。

一瞬、足を止めそうになる。彼女のあまりに必死な声音に一瞬、足を止めそうになる。

しかし、

「今、助けるから」

と、俺は言った。

「……駄目……駄目……駄目」

呟き続けるヒメアの方へ、走る。走り続ける。

「嫌だ、嫌だ、嫌だ………。……嘘だ………い、嫌だよ………こんなに早く、元に、元に戻りたくないよ………せつかく大兎にやっと逢えたのに………大兎ともう………もう、離れたくな………」

「ヒメア！」

俺は叫び、彼女の周りを覆っている赤いゼリーを蹴散らして、彼女を助け起こそうとする。

とそこで、ヒメアが突然顔を上げた。

いつもの人間離れした異常なまでに綺麗な顔で、大兎を見る。

彼女の瞳が、ウサギの様に、真っ赤になっていた。

次の瞬間、俺は――

SIDE OUT

.....

???

SIDE

[illegible]

「……消してやる。完膚なきまでに破壊してやる。跡形もないように解体してやる。影も残さず殺戮してやる。再生しないように蹂躪してやる。未練も含めて殲滅してやる。迷いを棄てて虐殺してやる。殺して殺して殺して殺して消滅させてやる。彼女の世界に存在して良いのは——僕だけだ！！貴様等は、僕が殺す！！絶対に！！」

『そんな事言っちゃダメだよ。彼等だって好きで来たわけじゃないんだし』

「何だと、白。じゃあテメエあいつらの事を認めるのかよ」

『そういう訳じゃないけど……』

「だったら、殺し尽くそうぜ。徹底的に。絶対に。完璧に。完全に。」

『蹂躪して駆逐して排除して一掃して破壊して斃し尽くして。』

「『跡形もなく、消し飛ばそう』」

SIDE OUT

第十話（後書き）

すいません。投稿遅れました。

最近忙しかったので、隙を見つけてちよくちよく書いていたのですが、やっと投稿出来るレベルまで書けました。

次回は？？？の正体を明かします。

それとPVが二万を越していました……。

ありがとうございます！

それでは次回！

第十一話（前書き）

長いですが、始まります。

新キャラ登場（というか神キャラ↑決して自慢じゃありません。新しい神様が登場するだけです）します。

まあそういう事ですので、気長に見てください。
それでは改めて。
始まります。

第十一話

0

後悔をしない人生はあり得ない。

だが、後悔する程の人生でもない。

1

??? SIDE

ん？

何か見られてる様な気がするんだが……？

まあいいか。どうせ 僕 には関係ないんだし。

それにしても、

「やつぱ 彼女 の世界が一番落ち着くな」

他の世界はみーんな空気が汚れていたり雰囲気くそがキモかったり転生者どもがごろごろいたりしてたしなあ。

『相変わらず破滅的な思考に嗜好だね、 黒 』

「よお、起きたのか 白 お前も相変わらぬの根暗寝太郎だな」

『それは言わない約束じゃなかったっけ』

「僕が約束を守るとか、本気で思ってた訳じゃないだろ」

『そうだけだね、万に一つの可能性というやつが、もしかしたらあるかもしれないじゃないか』

「そうか、なら無駄な期待だったな」

『ちえ、ホントに 黒 は黒いなあ』

「お前は 白 と言う程白くはないがな」

『まあね』

あははー、と僕は笑い合う。

多分はた目から見れば独り言を言って勝手に笑い始める異常者として見られないだろう。

しかし、それを知っていられる人間は少ない。
いや。今は一人もいない、と言うのが正解だろう。

正解で、正確だろう。

なぜなら、僕達の後には死体しかないから。

僕達の後には死人しかないから。

生存者は零人。

生還者は零人。

例えば相手が不死身でも、僕達という 死神 が通れば、全て等しく
死に至る。

殺す事しか能がない。

生かす為の能がない。

僕達は、そういう存在だ。

「僕達は、いつも」

孤独だ。

『俺達にあるのは』

孤独だ。

正に二人で一人。

歪に一人が二人。

僕達は所詮、二人いるだけ ではなく、
二ついるだけ なのだ。
別々の個々とした存在ではなく、

個々とした別々の存在なのだ。

『いつも、俺達は弾かれる』

「いつも、僕達は省かれる」

『いつも、俺達は拒絶される』

「いつも、僕達は排除される」

『それは人間の中でも変わらない』

「それは神様の中でも変わらない」

『そんな中、彼女 だけは俺達を見捨てなかった』

「そんな中、彼女 だけは僕達を見放さなかった」

『だから俺達は 彼女 の世界を求め続けるんだ』

「だから僕達は 彼女 の世界を巡り続けるんだ」

『終点はない』

「終末はない」

『結果があるとは限らない』

「成果があるとは限らない」

『それでも俺達は』

「それでも僕達は」

『「永遠に彼女の世界を、愛し続ける。」』

SIDE OUT

「.....うつー!？」

俺の背筋に寒気が走った。

それはまるで、降り積もった雪を背中に落とされたような。まるで、どろどろに殺意と殺意と殺意と殺意を煮詰めた死線をぶつけられたような、そんな感覚。

でも、それも何だか違う様な感じがする。

それはまるで、同一の、同等の、同列の、同系統の鏡写し、水面の向こう側、表裏一体、寸分違わず一致している、細部変わらず、一致している存在に出会ったかのような。出遭ったかのような、そんな感覚。

そんなこと、あるはずがないのに。
そんなこと、あってはならないのに。

.....

くそがっ！遂に出やがったか！

念の為に張っておいた結界も最終防衛用の 要塞 も軽々と突破しやがって。

いくら何でもチート過ぎるだろうが。

ありや多分、零華ちゃんライフゼロの無効脛ホワイトアウトでも無効化出来ないだろうし、殺人くんの再開でも太刀打ち出来ないだろう。

そういう物だ。

そういう者だ。

物理的な位置でも心理的な位置でも時間的な位置でも空間的な位置でも概念的な位置でも存在的な位置でも世界的な位置でも次元的な位置でも——何でもかんでも問答無用で、没交渉に、関係なく、前触れもなく前置きもなく事前動作も事後動作もなく、ただただ自然的に、ただただ現象的に『位置』を司る能力。

インハンド・ポイントマスター
系統支配・位置支配

それは、もともとの持ち主であるオチビちゃんすらも凌駕する規模にまで膨れ上がった 才能 にして 性能 にして 本能 にして 全能 の能力。

こいつを倒す事は、誰にも出来ない。

私らすら一掃されたくらいだ。

元が人間の転生者達では傷一つ付けられない。近づく事すら不可能に近い。

どうすれば良い？

どうすれば……………。

……………

零華SIDE

おかしいな気配を感じ取った後、俺はしばらく気を失っていたのかもしれない。もしくは、我を失っていたのかもしれない。何故なら、

「な、何だよ、これ……」

俺の目の前には、学校の校舎ではなく、黒白の大地の、荒野が広がっていたからだ。

突然の事に、呆然とする。

ナニガオコッタ？

イッタイナニガ？

「ようこそ、モノクロ黒白の世界へ

「ここは、黒と白が支配する世界だ

「ここは、漆黒と純白の世界だ

「ここに転生者きみたちを連れて来るのは初めてでさ

「なんたってここは俺達の造り上げた世界だからね

「本来なら、君達なんか遠くから惨殺してやるからねえ

「その点に関しては、俺達の行動はべた褒めされても当然というものだよ

「おめでとう

「君は俺達に認められたんだ

「光栄に思う事だね

「あは♪

「なーんて

「ね」

「あ、ああ？」

後ろから、いきなり声がかけられ、俺が振り向くと、そこには俺と同じくらいの年（俺は十六歳だ）の少年が立っていた。整った顔には優しい微笑が浮かんでいる。

だが、着ている服には、べつとりと、

血が付着していた。

それも生半可なレベルじゃない。むしろ血こそが服だと言わんばかりに染められている。

「ん？この服の事が気になるのか？ああ、いやいや済まないな。相手がいくら転生者だからって女の子にはきつい格好だ。はっはっは、転生者には人権はないってのが俺の主義なんだけど君みたいに可憐な美少女が怯える姿を見るとやっぱり罪悪感に苛まれるなあ。うんわかった。少し待ってね」

奴はいきなり長文を喋ると（その中に失礼かつ男に対する名誉毀損なワードがあつたが、今はスルーだ）、返り血にまみれた服を触る。そして、

「『消える』」

と、言う。

すると、付着した返り血が、綺麗さっぱり消え失せる。

まるで、時間を戻したかのように、消える。

それを見て俺は、

「……………」

ただ、立っているしかない。

それ程のプレッシャーだった。

「……それで」

なんとか、口を開く。

「それで、俺に何の用だ。あんたみたいなのに絡まれる覚えはないな」

「君にはなくても、俺達にはあるんだよ」

「……さっきから気になってるんだけど、俺達と言う割りには、あんた一人しかいないように見えるんだけど？」

「ん？あ、そっか、そうだよな。じゃあ、起こすから、しばしの間待たれよ」

そう言つて、今度は心臓の部位に片手を添えて、

「えい」

心臓を握り潰した。

「……………は？」

思考が停止した。

何を今更、という異論がでるかもしれないが、俺が驚いたのはそこじゃない。

問題は、

『はああああああ、よく寝たあー』

潰された心臓から、白い影のような物が吹き出て、ヒトの形を取り始めたからだ。それは心臓を握り潰した少年と瓜二つな姿で、唯一違うのは、出てきた方は半透明になっている事だった。

霧はしばらく欠伸をしていたが、俺を見ると、

『おいおい、 白 。 お前^{クズ}転生者を招いたのか？何考えてんだよ』

「いや、何かこの子、普通の転生者とは違うような気がするからさ」
『気がするって……そんな理由でいれたのかよ。僕達が苦労して奪い取った世界なのに』

「良いじゃない。どうせ直ぐに殺すんだし」

「言ってくれんじゃねえか」

口喧嘩を始めた二人にいい加減焦れたので、俺から仕掛ける。

「怒刀乱舞^{スレイドンシンゲ}発動。そして」

アサシンスキル うずかたな
選抜忍軍、渦刀^{うずかたな}発動。

いつの間にか握っていた鎖付き日本刀を腕に巻き、飛び上がり、螺旋しながら振り回した。

怒刀乱舞を遣っているからか速さは恐らくオリジナルの三十倍ぐらいと思う。敦賀迷彩でも捉えることは出来ないだろう。

そのまま大地に渦のような跡を遺しながら刃は奴らに迫っていく。すると、

「……ん？」

こちらを向いて、

「うわ、やつば」

『切り刻まれるな、これは』
掌を向けて、

「——。」

何かを呟いた。

「……………あれ？」

違和感に気付いたのはその一瞬後だった。

もう少しで奴らの体を捕らえそうだった刃が、逸れた。

あり得ない程に、螺旋^{ねじ}曲がった。

「……………いつ!？」

激痛に気付いたのはその二瞬後だった。

その感覚がする方を見ると、右腕の肘部分が、螺旋曲がっていた。

これもあり得ない程に、螺旋曲がった。

（何を、されたんだ——？）

（いつの間に、やられた？）

そんな事を思考しながら、咄嗟に距離を取る。その際、振り回していた刀がこっちに向かってきたが、大嘘憑きで鎖をなかった事にして光化静翔で更に距離を取る。

そのついでに傷を不慮の事故で手近の木に押しつける。
エンカウンター

「酷いなあ。その柳の木、気に入っていたのに」
奴が、隣で並走していた。「……………ッ!？」「逃げられないよ。君はもう」

マヨイコンデイルカラ。

そう言つて、消える。

「消えた？」

「消えたとは失礼な。ただ、君の真上に移動しただけなのに」
という声がした直後、俺の背中に衝撃が襲い掛かった。

「あ、ガア……………ッ!!」

「おいおい、この程度でもう降参なんて言わないでくれよ？俺達の復讐は、まだ始まったばかりなんだか……………らッ！」

靴の踵を使い背中を抉るように踏み付けてくる。

「う……………あ……………」

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

.....
???? SIDE

俺が止めをさそうと力をためた直後。

ナニカが俺の攻撃を遮った。

「ん？」

その影は、外套を着ていた。黒く暗い、闇色の外套だ。

「……ハハッ。冗談がきつい。俺達を知る限りそれを着ているのはただ一人ですよ」

「残念ながら、その『一人』だよ、『滲み出る災厄』」

その声は、低く低く低い、地獄の釜が沸騰するような恐ろしくおぞましい声。

「貴様の行動は目に余る。もう好きにはさせられんな」

『つかぬ事をお聞きますが、キレてます？』

「当たり前だ」

「『マジかよ……』」

地面に膝と手をついて、俺達は同時に呟く。

「（ふむ、しかしこやつらが反転していなかったのは運が良いと言えるな。儂も、この小娘も）」

『なあ、あんた。もしかしないでも、見逃したりしてくれない、よな？』

「無論、貴様らは儂が直々に地獄に叩き落としてくれよう」

「『マジかよ！』」

まずいな、流石に俺じゃきつい。

だが、今は 黒 は動けないし、こいつは無印^{ノーマーク}だし。
よし。ここは、

「『ダツシュ!!』」

逃げるが勝ち!

三十六計逃げるに如かず!

「さらばだ!『ハデス』殿!!」

『ご老体に鞭打っていらつしゃったところ悪いけど多分二度と捕ま
えられないでしょう!!』

「『good-bye!!』」

そう言い捨てて、俺達は次元を抜け、逃げた。

SIDE OUT

.....

「ふん。逃げ足だけは速い小童どもめ」

彼は重々しい雰囲気撒き散らしながら呟いた。

逃げた二人の行方を探っているのだ。が、

「やはり、見つからぬか。儂の探知すらも『位置』をずらして避
けているのじゃろな。悪知恵ばかり働かせおつて」

苦々しげに言う。そして、自身の右手首を見る。

そこには、何やら鎖のような模様が浮かび上がっていた。
即ち、

「マーキングされたか……これで儼も、もう奴らには対抗出来んということになるのかの。猪口才な真似ばかり上手くなりおるわい」
少し残念そうに、しかし、明らかな喜色を含めた表情で言った。

「……うぐ」

小さな呻き声が聞こえた。さっき彼が被せた外套の中からだ。

「ふむ。そういえばおったのう、小娘。どれ、大丈夫か」

外套を退けると、恐らく人間が通うという がっこう の指定服だった物を着た少女が横たわっていた。

この外套には、被せた対象の外傷や損傷を治すという特性があるのだが、それを行使してもなお、この傷は治りは遅かった。

「やはり、同属か。へおい、小娘。大事ないか」

「へねん、わ……？」

「へそうじゃ、そのまま話せ」

「へは……、大事ないか、ね。正直きついな。大嘘憑きも不慮の事故も発動出来ない。不傷者も充分に機能していない。瀕死だよ」

「へむしろあやつら相手にここまで善戦した主は大したものじゃ。普通であれば既にただの肉片になっておるわ」

「へあいつらは、何者なんだ？」

「へそうじゃの、とりあえず神の界に行く。そこで思う存分聞き出すがよい」

「だれ、から……？」

最後の一言は直接口から放たれた。

それを見て、彼はこう答えた。

「そなたを転生させた、我らが主。——エンプティ様じゃよ」

第十一話（後書き）

今回出てきたハデスは神話で出てくる冥界の王とは関係ありません。あと、??? 達の名前が出せなかった訳で。

つまり予告が嘘になってしまった訳で。

本当に申し訳ありません。

次回は、ほぼ鞘走メイン（かもしれない）で短いかもしれませんが、タイミングを図って零華と神様エンフデイとの会話となります。多分。

それでは次回！

よろしくお願いします！

第十二話（前書き）

始まります。

地味に長くなったうえに鞘走がほとんどでていないことに謝罪します。

ごめんなさい。

第十二話

「きみの世界を壊したい」

零華が謎の襲撃者にぼこぼこにされている同時刻。月光達は 聖地から出てきた管に引き摺られ、妙な空間に連れてこられていた。そこは、何もかもが赤い世界。実に目に悪い環境だ。その証拠に、

「……………くそ。目が痛い……………」

と、月光が呟いていた。

「目がチカチカするなあ」

そう言ったのは、鞘走だ。整った顔に非常に気の抜けた緊張感ゼロの表情を浮かべている。シニールだった。

「それで？何故俺をここへ連れてきた？」

「そつだそつだー！一体何であたし達を……………」

「うるさい。お前は黙れ」

「ええええええええ！？」

「五月蠅いよ。美雷」

「そつだ。黙れ。知ってるか美雷。俺は今日、ほとんど寝ていない。寝不足だ。寝不足だと機嫌が悪くなる。お前のキーキー声を聞くだけで頭痛がする。だから、少し黙れ」

「あたしキーキーしてないもん！」

「じゃあピーピーだ」

「ピーピーもしてなあああああああい！ってそれゲリみたいじゃあ

ああああん！」

（うん。ほんと五月蠅いな）

月光と美雷のやり取りを見ながら、鞘走はそう思った。

そもそも彼は面倒事と、騒音が嫌いだ。だからこそ、彼は零華を襲撃したし、変なミミズみたいな怪物も文字通り抹殺した。

前者は、その方が後々神とかとの軋轢も少ないだろうと思ったからだし、後者は単に存在が既にうざかったからだ。

つまり、短気なのである。他人からは『優しい』やら『面倒見が良い』やら言われている鞘走は、実は全くの逆の性格の男だ。

それ故に、今の状況は鞘走にとって非常に不愉快極まりないものなのだった。

更に言えば、彼は今自らが持つ精神力を総動員してキレないよう懸命に努力している訳だ。

つまり、そろそろ限界な訳で。

だから。

スキル、作者権限。

閑話休題。

「……で、一体俺に何の用だ？」

月光が目の中の山のような化け物に問う。

顔を見ようと思って

性別の判断が出来ない声だった。

「俺の顔を見たいって？」

ああ

「何のために？」

今回は、どのような鴉が選ばれたのか、知りたかったから

「俺は鴉じゃない。人だ」

ハハハ、ははは、ハハハ

「黙れ。お前の笑い声も癪に障る。頭が痛くなる」

ハハハハハ、今回はまた、面白い奴になった。で、お前は何だ？

「俺は天才だ」

お前が闇を抱える、右首か？

「闇？」

ああ

「意味が分からないな」

分からないか

「ああ」

じゃあ……きつと、闇を抱えて苦しんでいるのはお前の弟だ

「弟を知っているのか？」

ああ。でも、それは良い。それよりも、遠くで月が昇るな……月が……赤い月が泣く……狂った魔女が泣く。鴉の右首が啼く。それでお前は

左首はどのような声を出して鳴く？

.....

「天魔」

誰かがそう呟く。

「それは、仏教やヒンドウ教で出てくる用語から取られた名前。しかし、実際はそれより更に質の悪い代物で本物で化物だ。あくまでも便宜上つけられた呼び名に過ぎない。奴らには、神を殺す力すら効かないのだから、質が悪いのは当然か。第六天魔王波旬とも呼ばれているらしいがな。幸か不幸か今は関係ない。いや、関係はあるが俺にとってはどうでもいい、取るに足らない些末な問題だからな。——あー、どこまで話したかな？ああ、そうだ。神殺しも効かないというくだりだな。うん、そうなんだよ。天魔という奴らはびつくりする程質が悪い。太刀打ち出来ないしな。大袈裟や大法螺ではなく、真正正銘の真実で問答無用の現実だ。これは変えようがない。例えば、^{スベル・エラー}凶剣は相手が神だろうと悪魔だろうと殺す程の力を秘めているが、それが天魔には全く効果がない。期待する奴は馬鹿を見る。期待するだけ時間の無駄だ。天魔^{やつら}にかかつちゃ凶剣なんて千切れかけのスポンジ棒より危険怒は低い。そう断言しても過言じゃないと俺は思うね。

そう、人間に天魔と張り合うのは不可能事を通り越して絵空事だ。絵に描いたただの餅にも程がある。見ているほうが片腹痛いね。そんな事を夢想するくらいなら天魔以外の生物に無双してろ、高嶺の花に無闇に手を伸ばすな自分達の限界を見極めろ。正直俺は、ここまで言つて天魔^{やみ}に逆らおうと言つ奴は見た事がない。そんなのは勇気じゃない。ただの自殺志願だよ。

「……いつてえ」

もう一度呟く。そして辺りを見渡した。

「……ここは……」

見覚えのある場所だった。というか覚えていないと恐らく俺の脳細胞は死滅している。

そこは、俺が転成する前にいた、空間だった。

あの時は焦ってるくに描写出来なかったが、今は落ち着いて確かめられる。

真っ白な神殿のような場所だった。不快感は感じない、心地よい白。いつまでも居続けたいと思ってしまう安心感。そんな気持ちにさせるような優しい空間。

アノ、白黒ノ世界トハ違ウ。
アノ、地獄トハ――。

「あの、大丈夫ですか？」

気が付くと、俺の隣に幼女がいた。言わずと知れた、神様だ。彼女は不安そうな、心配そうな顔で俺の方を見上げていた。

「……ああ、大丈夫だ」

「ほんとですか？ほんとにほんと？」

「大丈夫だったの」

その姿が可笑しくて、俺は笑った。

「な、何を笑ってるんですか！」

「いや、面白くてつい」

「こ、こっちは本気で心配したというのに……っ」

「はははははは」

「うーっ」

こいつを見ていると何だかほっとする。それは多分、自分の事を顧みずに他人の事を心配してくれるからだろう。

だからこそ――、

ん？

「なあ、一つ聞きたい事があるんだが」

「は、はひっ。何でひょうか！」

噛み噛みだった。

「あの 黒 やら 白 やらは何なんだ？」

その問いを聞いて、

「……………それは」

言い淀む。

「どうしたんだ。教えてくれ。奴らは、何なんだ？」「彼女の世界に存在して良いのは、僕だけだ」とかなんとか言ってたけど」

「……………」

未だに黙ったままの神に、俺は更に質問しようとしたが、

「それについては、私が説明するよ、——くん」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと、金髪の女性が立っていた。彼女は、

「私は『ヘラ』という神様だ。よろしく」

名乗った。

「何故、名前の部分に括弧がついてんだ？」

「それはね。この名前はあくまで便宜上つけられたものだからね。

ほら、他人の名前を自分の物のように名乗るのは気が引けるからさ」

「便宜上？つけられた？どういう事だよ。お前らは神様じゃないのかよ」

「君達が認識し、信仰している『神』とは違う存在さ。そうだな、いつ天で言えば、天魔のようなものだよ」

「はん、つまり俺達の世界で言われている『神』は、あんたらより下って事か？」

「それは些か暴論で極論だ。別に私達は上とかそっちが下とかそういうのではないよ。むしろ、私達の方が名前を使わせて貰ってるんだから、こっちの立場の方が危うくてね」

「まあよく分かんが、要するに、お前らの方が下って事だな」

「…………いや違うって」

閑話休題。

「で、あいつらは何なんだ？」

「ああ、それはね」

と、少し顔を曇らせて、やがて意を決したように言った。

「彼はね、オチビちゃんが最初に転生させた、人間なのさ」

.....

「さあ、この物語もいよいよ大詰めになってきたかあ！？何たってあの黒白コンビはかつて世界を渡り歩き三十七個もの世界を破壊し破綻させ破滅へと導いた、通称『黙示録の魔障』『滲み出る災厄』『闇色のウサギ』とまで言われる破壊者だからねえ。これは世界がまた一つぶつ壊れんのかな？それとも『彼』が闇ウサギを倒すのかな？どっちに転んでも俺としちゃ楽しめるから良いんだけどね。まー気になるところではある、.....しかし、こんな戦いを果たして『超越者』達が許すのかな？俺が許可を出したところで奴らが却下したら一氣に否決だもんなあ.....、俺がいくら最高発言権を行使しても押し切られるんだろうなあ.....、どうしようかなあ.....。.....あ、そうだ。そうだよ。こりゃ名案だ！なんて単純明快な問題なんだ！くはは、こりゃ面白くなりそうだなあ。

に 慎重に 慎重に ね

第十二話（後書き）

続く。

伏線ばかり増えていく。

第十三話（前書き）

始まります。

なんか今回も伏線がばらまかれます。

回収するのでご安心を。

第十三話

0

きみの意見は、聞かない。

1

「……いま、なんて、いった？」

「あんたと同じ、転生者だ、と言ったんだ」

「どういう事だよ！」

俺は思わず怒鳴る。奴が転生者って、どういう事だ？

すると、エンプティ が俺を諫めようと話し掛けてくる。

「あ、あの」

「お前もお前だ！」

「ひう！？」

「何で黙っていたんだ！あんな化け物の事を！おかげで死にかけたんだぞ！？」

「す、すいま……」

「謝って済むか！」

「う、……ふ、ふえええええ……」

終には泣きだしてしまった。

「もうやめな。それ以上その子を虐めるんなら、あんたの存在ごと、あんたの元居た世界を消す」

それを聞き、俺は頭を冷やされる。冷水を思いっきりぶっかけられた気分だ。

「……悪い。少し焦り過ぎた」

「まあ仕方のない事だとは思うがね。それでもオチビちゃんを責めるのは許されない」

「も、もう良いんですよヘラ」

「オチビちゃん……」

エンプティ を庇う『ヘラ』。見てみるとこいつらは姉妹なんじゃないか、と思ってしまう。

「……相変わらずだな、お主らは」

気付くと俺の後ろに闇色の外套を着た老人が立っていた。老人と言っても、その立ち振舞いからは、まだまだ若さというものが感じ取れる。あれか。老化現象か。

「老師。いらしていたんですか？」

「うむ、その童わらわの様子が見たくてな」

こちらをちらりと見て言う老人。

「あんた、誰だよ」

「ふむ、礼儀がなっておらぬな、童。儂が貴様を助けてやったというのに」

え？マジで？俺こんな爺さんに助けられたの？

「やっぱり貴方だったんですね、『ハデス』」

『ハデス』？冥界の主の？

「ええ。しかし、儂も『憑かれ』ました。この通り」

そう言つて、エンプティ に腕を見せる『ハデス』。覗いてみると、手首に何やら鎖の様な模様が浮かんでいた。タトウー？

「……そうですか。貴方まで……」

「これで天界にも冥界にも神の界域にも彼らに太刀打ちできる戦力はなくなつたつてことだね。思いつき劣勢だ」

「こつなつたら……」 エンプティ、『ハデス』、『ヘラ』が俺を一斉に見る。つてあれ？

「え？何で三人共俺を見るの？」

そう言つと、今度はこそこそ固まって話し始めた。俺は弾かれた形だ。……さ、寂しくなんか、ないもんね！！

「こつなつたら、あの二ートに『種』の手配を頼むしかないんじゃない……」

「しかしあれは反動が大き過ぎる。仮に転生者だろうと、根付いた

よ——……」

.....

とある空間。

とある次元のとある世界。

とある街のとある議事堂。

とある部屋にとある七人がいた。

「終に 黒白 が動くのか」

誰かが言った。

「 イマジナル は未だに雲隠れを続けているのか？」

誰かが言った。

「 うむ、あの裁判長殿は口先ばかりの様だな」

誰かが言った。

「 我らの力に怖気づいたのか」

誰かが言った。

「 それとも、『神々』が奴を匿ったのか」

誰かが言った。

「 それとも、 黒白 に殺されたのか」

誰かが言った。

「 どちらにせよ、奴が邪魔をしないのであれば、好都合」

誰かが言った。

『 我らは我らの策を行う』

『 我らの前に壁はなく』

『 我らの前に敵はない』

『 邪魔するものはなし』

『敵対するものはなし』

『全てを終わりへと』

『総てを終焉へと導け』

『それこそ我ら、【セルエンド】だ』

第十三話（後書き）

次回に続く。

ちなみに読み方は『はいかのたね』ではなく『はいかのしゅ』です。

正直に言つと正しく読める人は少数かと思ひます。
読みにくくして、ごめんなさい。

第十四話（前書き）

始まります。

第十四話

「お疲れ様。

もう考えなくていいよ」

あの魔女を……世界を異常おかしくする狂った最古の魔女を殺すための方法を、お前に教えに来た

天魔はそう言った。

月光は、その最古の魔女が誰の事なのか、理解した。

サイトヒメアだ。彼女を 魔女 と呼んだ奴を知っていたからだ。

——日向だ。

あの、クソむかつく弟のご忠告を聞いていたので、すぐ分かった。

「成る程。で、お前らが『月』から侵蝕してきた奴らか？」

月？それは最古の魔女を生んだ化け物が棲む場所だろう？だがそれは良い。お前はあの魔女を殺す事だけ考えていれば良い

「……誰に向かって指図している？」

お前だ。黒い鴉

「俺は鴉じゃない」

ハハは、ははは

天魔は笑う。嗤う。

それに、

「……ちつ。気に入らないな。全く、気に入らない」

と、言った。

言おうと、した。

その直前。

「うお、でっけえなあ。何だ何だ。まさかこれ龍か？」

という声が響いた。その声に天魔は驚いたように、

何だ貴様は。ここに這入ってこれるのは 聖地 か、我々が招いた者だけのはずだ

と言った。

「はっ。だったら僕はその 聖地 とやらを持っているって事なんじゃねえ？そんな小難しい事はあんま好きじゃねえんだよ。だからまあ、その、なんだ。……少し黙れ」

その声には、何の感情も含まれていなかった。極めて義務的に、極めて事務的に天魔に向かって話したのだ。

……………

天魔はそれを聞いて口をつぐんだ。

「うん、よし」

それに満足したように頷くと、ついで月光達に向き直った。

彼の目には何も浮かんでいなかった。その視線も月光達を通して、どこか遠くを見つめているようだった。

心ここにあらずと言ったところか。

「……おい、鞘走。何だ奴は」

月光は鞘走に言った。

「俺が知るかよ」

「しかし、あれからはお前と同じような圧迫感を感じるが？」

「そういえば、そうだな」

（何だ、この感覚……。零華と戦ったときもそうだったが、妙に胸がざわつく。まるで――）

（――まるで、鏡合わせのような他人に遭ってしまった感覚は）
「くくく」

鞘走が警戒を強めていると、不意に目の前の男が含み笑いを漏らした。

「何がおかしい」

「いやあ？……成る程ねえ。お前が影　って訳か。案外良い出来じゃん」

「はあ？」

「いいや、こつちの話だ。いや、僕達の話、かな？」

思わせ振りの態度ばかりとる男に鞘走はキレた。

「てめえ、舐めてんじゃねえぞ！」

三下のような台詞を吐きながら突進する。空間から刀を呼び出し、

「刀神祭、命名、絶焰、伍の型――怨斬――！」

チェーンソーのような形の刀を思いつきり突き出した。

「……何だ、そんなもんか」

男はつまらなそうに舌打ちすると、鞘走を軽く睨む。すると、

背後から首を切断された。

いつのまにか回復した鞘走が 絶焰 を遣い、男の首を斬ったのだ
った。

「はぁ……はぁ……」

鞘走は肩で息をしていた。そもそも致命傷を負っていた身なので、
よく動いた方だろう。
しかし、

「何だ。やっぱりその程度なのか」

首は笑いながら言った。

「な……！？」

「何を驚いている？わざわざこんなところに保険も持たず来ると思
うか？やれやれ、やはり劣化は劣化か。この程度とはな」

「なんかムカついたから、お前殺すわ。だからさっさと死ね」

.....

「彼——南那籤^{みなみなくじ} 黒白^{くしろ} は、エンプティ が最初に転生させた人間でね——相当に複雑な事情があつてここでは説明出来ないんだけど、確かに言える事は——あいつは私らよりも強い力を持つてしまったということだね」

『ヘラ』はそう言つて、俺を見た。

「南那籤は エンプティ の力である系統支配——位置支配^{ポイントマスター}をその時に受け取つていてね。——最初は彼も明るく人当たりの良い好青年だった。……しかし、ある時から変わつてしまった」

「どういう事だ？」

「『超越者』だよ」

聞き慣れない単語に俺は眉をひそめる。

「『超越者』とは、君達と同じ転生者の成れの果てでね。いや、成れの果てというよりは神化の最果てと言うべきなのかな。読んで字のごとく神の領域に足を踏み入れた転生者を私らは『超越者』と呼んでる。こいつらは本物^{わたしら}を越えた偽物だ。そして南那籤は、奴らに唆されて…… エンプティ を裏切つた」

「……そいつが力を失つた原因つて、もしかして」

「ああ、そうだ。なかなか察しが良いな。南那籤は、ある日突然ここに来て、 エンプティ の力を根こそぎ奪い取つていったんだ。今考えてみれば、最初からそんなリスクは目に見えていた。人間は簡単に力に左右される。力を求めるし、手に入れるためにはどんな

罪だつて犯す。それは転生者も変わらない」

「でもあいつ、えらく エンプティ にご執心だったか？」

「まあそうだろう。あいつが力を欲したのは彼女を守るためだしな」

「はあ！？」

「よく言うだろ？『恋は盲目』って」

「なんか違うような気がする……」

「まあとにかくだ。あいつは恐らく『超越者』にこう言われたんだろうな。――『我々に従え。そうすればお前はもっと強い力を手

に入れる事が出来る。もし従わないのなら、貴様のご執心の神を我々が殺してやろう』――とね。そんな事を言われた南那籤は最初は奴らに攻撃しただろうな。あれは冷静ぶっててもかなりの直情野郎だから」

「それで、あいつはその『超越者』って奴らの手足として動いてるってわけか。んで？俺にそんな事を言っただろうってんだ」

「ああ。それなんだが……老師。あのニートに連絡はついたか」

『ヘラ』は床に何やら仰々しい陣を描いていた『ハデス』に言った。

「……いや、どうやらないようだ。全くあのニートは……！」

「誰がニートだよ」

「む」

毒づいた『ハデス』の後ろにいつの間にか奇妙な青年が立っていた。闇よりも深い黒色の長髪に同じく黒い瞳。ビジネススーツのような服を着て、髪や瞳とは対照的な目も眩みそうな白いベレー帽をかぶっている。

その顔には愉快そうな笑みがはりついていた。

その男を見て、『ハデス』は、

「やっと来おったか、 イマジナル」

その青年の名を呼んだ。

.....

「あーあ、つまんねー。あんなが僕の影分身だなんて認めたくねーよ」

男——南那籤は盛大にため息を吐きながら言う。彼は既にあの空間にはいなかった。鞘走をばこぼこにすると、さっさと違う次元に飛んでいた。

「なんたって僕の影分身だぜ？なんたって僕の複製品だぜ？なんたって僕の力の3%だぜ？なんたって僕の一片だぜ？なのに、あの程度とは……笑えねえ」

八つ当たりの様に近くを歩いていた魔物を惨殺する。それだけでは飽き足らず半径六キロ内に存在する全生命を消滅させて、一息吐いた。

『黒。どうしたんだい？』

「どうしたもこうしたもあるか。あんなのが僕の分身だなんて認めたくねえ。『超越者』共の命令でいやいや造ったとしてもだ」

『ふーん』

「……てめえ、何だその気の抜けた相づちは」

『いや。別に興味ないし』

「お前も僕の別人格とは思えないな」

『ははは。そうだね。……でも、忘れるなよ』

白 は今までとは雰囲気を一変させて、黒 に警告した。

『俺も『超越者』達にお前の監視をさせるために創られた傀儡だつてことを』

「忘れてないさ」

それを 黒 はさらりと流す。

「お前が僕の監視をしている事くらい、そしてそのために創られた事くらい分かってる。僕はそれ込みでお前を信用してるんだ。長いこと一緒にいるんだからそのくらい分かれよ」

その言葉に、

『……………ああ』

と、 白 は頷いた。

……………

「様子はどうだ」

「まあ、及第点くらいはやれる出来だ」

「そうか。急に造らせたから手抜きがあるかと思っただが」

「奴は仕事になると真面目だからな」

「しかし奴も愚かな者だな。未だに気付かぬとは」

「やはり元・半転生者では負けず劣らず愚者か」

「全くだ」

「あの白が、『背徳の鏡』とも知らずに、
軽々しく信用すると
はな」

暗く暗い部屋に嘲笑が響いた。

第十四話（後書き）

読み方は『はいとくのきょう』です。『鏡』と『凶』を掛けたもの
なんで、特に難しいようなものはなかったりします。

まあ、そんなわけなんです。

というか、思ったよりPVとかユニークとかがめちゃくちや増えて
います。

PV30000越えユニーク40000越え。

皆様のおかげです。

ありがとうございます！

それでは次回もよろしく願いします。

第十五話（前書き）

今回は繋ぎです。だからと言っておまけとか付録とかじゃありません。至って真面目です。それでは開始します。

第十五話

0

神に祈る。

きみに幸せを。

きみに恵みを。

きみに望みを。

与えてくれと。

1

「それでは、『**廃華の種**』の植え付けを始めようか」

「ちよつと待て。何だその無駄に不吉な宣言は」

は突っ込むが イマジナル は反応を返さず、

「まず種の三割を、——くんに入れる。その三十分後に四割を、その五十分後に残りの三割を入れる。激痛だろうが我慢してくれ」

「聞けよ！」

「許してくれ。これが奴らに勝つ、最後の希望なんだ」

「シリラスっぽく言っても騙されねーぞ………」

え え え え え え え え え え え え え え え え
え え え え え え え え え え え え え え え え

?

「ふむ。三割入れてもこの程度の痛みなのか。なら大丈夫だな♪」

[illegible]

の絶叫が、神の界域に響き渡った。

.....

「ぐ……っ、あ……」

「おい、しっかりしろ鞘走」

「ソギト、大丈夫？」

三つの声が薄暗い生徒会室に響く。あの後――

以下回想。

「貴様、何をした」

月光が目の中の男――時系列的に明かしてよいのか悪いのか、それはこの物語の読み手に判断を任せるとして、とりあえずのところ明かそう――南那籤 黒白に警戒心を滲ませながら言った。

「『何をした』、ねえ。強いて言えば『何もしてない』が正答かな」
対して南那籤は軽い口調で楽しげに、どうでもいい様に投げやりに応えた。

「今のは僕は何もしてない。そいつが勝手に斬られただけだよ。つかそいつの責任だろ。睨むだけで斬られるなんて、この世界で言えは魔界の魔物レベルの脆さじゃねえか。そんな弱さを僕のせいにされてもねえ」

と、まるつきり訳の分からない事を言う。月光はそれに対し顔をしかめるが、それを理解する猶予はなさそうだった。

それは南那籤が月光や美雷に攻撃してきた――という事ではなく、単純に南那籤がさっさと次元の歪みを開き、別の空間に飛んだからだ。

最後に奴はこう言った。

『僕はもう君達には関わらないよ。彼女の世界を壊したくないしね。それでも僕が信用出来ないなら、あの銀髪まだらの女を僕にけしかける事だね。お前らの中で僕達に勝てるのは、あいつだけだろう。まあ、来たら来たで容赦なく惨殺するけど、それでもよけりや、O T O 三 δ σ K X M K で待つてゐるって伝える』
と言つて、次元の穴に入つていき、消えた。

後には、呆然とする月光、美雷、天魔、そして瀕死の鞘走だった。

回想終了。

結局あの後、天魔が月光に 力 を入れ、生徒会室に戻り、今に至るという訳だ。未だに鞘走の体を揺さ振り続ける美雷は放っておき（その揺すり方に怪我人に対する思いやりという成分はなかった。下手すれば、鞘走が目覚めるどころか永遠に眠る事になりそうだった）、月光は先程から廊下から聞こえてくる馬鹿の声の方を見やる。「ふざけんじゃねえ！ヒメアは、ヒメアは絶対に渡さねえぞ！つかクソ月光、お前何やってんだ！もう俺らの声聞こえてんだろうが！ならさつさと出て来て、けの化け物なんとかしろよ！じゃないと後で、てめえの机に犬の糞入れんぞ！」

という声を聞いて、

「全く、本当に……本当にこれはクソ筋書きだな」

使えない奴隷なかまを助けるべく、生徒会室のドアに向かった。

.....

「ハア、ハア.....ハア、ハア、ハア.....殺す気が
てめえら！なんだっていきなり皮が剥がされるような痛みや肉が食
い千切られるような痛みや骨が引き抜かれるような痛みや内蔵を挽
き潰されるような痛みを味あわなきゃなんねえんだ！ショック死す
るかと思ったわ！いや、もう死んでるけど！転生して今更？って感
じだけど！だからってこの仕打ちはないんじゃないの！？」

『廃華の種』植え付けを開始して、五時間後。

——は床に突っ伏して、ゼイゼイ咳き込みながら『神』共に文句
を言っていた。いや、これは素直に抗議、というか正當に裁判起こ
しても勝てるんじゃないかと言えるぐらい、人権を踏み躪った仕打
ちだった。転生者に人権があるのかどうかは不明だが。

「はっは。まあ、成功だな」

「ふむ。完全に入れても体が壊れんとは、やはりただ者ではないの」

「やったー！成功、成功！」

「これ全部、俺の手柄な」

(.....)

.....

.....)

「.....てめえら、ほんっ気でぶち殺すぞおおおオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

波に対するものだ。

この状況で、驚くべき事に一番落ち着いていたのは、——だった。自分の中にある力が何なのか、理解出来てしまっていた。この力がどういうものなのか。どう遣うのか。その正体は何か。この力に溺れないようにするためにはどうすれば良いのか。

完璧に理解できる。

完全に理解できる。

何に遣うべきか。

どう扱うべきか。

自分がこれから何をすべきかも、分かっていた。

「なあ」

——は神々に問い掛ける。

「俺は、あいつをどうすれば良い」

それは疑問ではなく最終確認。

「俺は、世界を救えば良いのか」

それは疑問ではなく最終確認。

「俺は、あいつを救うべきか」

それは疑問ではなく最終確認。

「なあ、どうすれば良い？」

「そうですね」

いつの間にか起き上がっていた エンプティ が応えた。

その確認に、エンプティは、

「好きにしたら良いんじゃないですか？」

満面の笑みを浮かべ、言った。

.....

「どっしするっ。」

「どっしするっ。」

「どっしするっ。」

「どっするっ。」

「どっするっ。」

「どっするっ。」

「決まっている」

「『背信の鏡』を覚醒させる。奴はもう、用済みだ」

第十五話（後書き）

今更ですが『――』は主人公の名前の伏せ字です。現時点で明かす訳にはいかないので、まだ明かしません。

ただ、一つ言うとしたら、僕の作品は、全部が全部、リンクしているという事です。

つまりそういう事です。

まあ、そんな感じで、繋ぎの第十五話でした。

今回は少し遅れると思います。他の連載作品の投稿しなくてはならないので。

同時連載すると辛いね！

申し訳ありません。完璧に自業自得です。

まあ、そんな訳で。

次回もよろしくお願いします。

第十六話 南那鑑 黒白（上）（前書き）

短いです。

ご注意ください。

始まります。

第十六話 南那籤 黒白（上）

「道を外れれば、外道。

人を外れれば、人外。

差はないんじゃない？」

「さて。んじゃ、行ってくる」

「気をつけて下さいね」

俺は再びいつ天の世界に行こうとする。『廃華の種』を入れられてから、妙に己の中の力が不安定になるのが、分かる。

いつ暴れだすか分からない、力の奔流。それが俺に入れられた『廃華の種』の副作用の一つ、らしい。よく分からんが、これは神が言うには、

『神様になるための手段の一つですから。転生者が神様になるためには、それなりのリスクが伴うんです』

だそうだ。

別に俺は、好き好んで神様になろうとしたわけじゃない。ついかなとんど強制じゃなかったっけか？

……まあいい。問題は、いつ天の世界に戻った後だ。

どう説明しよう、この姿。

.....

大兎SIDE

「零華が、いなくなつた？」

「そうだ」

「何でもつと早く言わなかつたんだ！」

俺達は生徒会室に集まっていた。理由は、生徒会副会長で、俺達の仲間である咎識零華が行方不明になつたからだ。あの人間とは思えない程にチートのあいつが、そうそう怪我をしたり、ましてや殺されたりはしないだろうが、やはり心配は心配だ。

「お前に言つて何になる。お前がどうにか出来るのか」

「っ！？ それは」

「それに、俺達が遭遇した男は、咎識の事を知っているようだったしな」

「鞘走をぼろぼろにした奴か？」

「ああ」

そうだ。月光達が遭遇したという、『南那籤』と言う化け物は、剣の扱いにかけては月光すら凌ぐ鞘走すら、軽くひねり潰したのだ。そんな奴が俺達にどうこう出来るはずがない。しかも、それが零華を狙っているだと？

「大兎……大丈夫？」

ヒメアが心配そうに俺を見上げてくる。悪戯っぽい真紅の瞳に不安げな光が揺れている。

「大丈夫。ありがとな、心配してくれて」

俺はヒメアの頭を撫でてやる。薄桃色ラベンダーの綺麗な髪感触が、気持ち良かった。

「ん……」

ヒメアも気持ち良さそうに目を細め、次いで俺に抱き付いてきた。

「うお。いきなり何よ、ヒメア」

「大兎、大好き」

「……んあゝ、えと、いきなりそんな事言われてもなあ。反応にこま」

「お前ら、生徒会室で発情するな。するなら余所でやれ」

「ちげえよ！」

「人間の分際で、偉そうにしないでくれる？」

「ねねねね、ゲッコー。『発情』ってどういう意味？」

「ガキが知る必要はない」

「ガキじゃなあああああああああああい！」

「はっ、じゃあクソガキだな」

「ちがあああああああああああう！」

と、全員が好き勝手に喋り始め、そろそろ收拾がつかなくなってきたその時、

「……相変わらずうるさいな。何か良い事でもあったのかい？」

月光の後ろの空間から、零華が現れた。

.....

「相変わらずうるさいな。何か良い事でもあったのかい？」

俺はそんな事を言いながら全員に話しかける。思った通り、呆けた様な顔をしている。まあ、恐らく俺が突然現れた事の他に、俺の容姿が変わって居るからだろう。

ベースは零崎 人識だが、容姿はほとんど違うものになっている。まず、髪の色が銀髪まだらからまるで燃え尽きた灰のような色に変わっている。そして、肌も病人のように白い。目も瞳は紅、その周りは黒く染まった。何より一番変わったのは、両頬に浮かんだ柳の枝のような模様の刺青だ。それらが合わさり、見事に化け物の体^{てい}を表している。

「おいおい、なーにいきなり黙っちゃってんのさ。俺の姿にビビった？」

俺は半ば自虐的にそう言った。まあそれも仕方がない事だと思ってくれ。だって、まるで化け物の風貌を引っ提げて戻ってきた奴を素直に愚直に受け入れる馬鹿が、存在するなんて有り得ない――

「.....ばっか野郎が!!」

と、怒鳴り声が聞こえ、その直後に俺の右頬に痛みが走った。

「.....え？」

俺は呆然として立ち尽くした。しかしそれだけではない。

「ぐっ……！」

「今まで、どこに行つてやがった！」

大兎に胸ぐらを掴まれ、壁に叩きつけられる。思わず声が漏れた。

「皆、お前の事を心配してたんだぞ！お前が何も言わずに、消えちまうから！それなのに、お前は……お前はっ！！」

おかしい。何故か酷く苦しい。それに、胸がキリキリと痛む。何でだ？俺は今や擬似的とはいえ、神の一人だ。たかが人間の腕力で、ここまで苦しくなるはずがない。

「何、で」

「何で、だと？決まってるだろうが——仲間だからだよ！」

その言葉を聞き、俺は驚いて、目を見開いた。

仲間？ほんの数週間一緒に戦っただけの俺を、仲間だと？ふざけるな。同情なんかいらぬ。半端な心配なんか欲しくない。そんな事されても良い迷惑だ。

なのに、

「お、おい。何泣いてんだよ」

俺は涙を流していた。俺の意志とは関係なく。

「って、いきなり泣かれるとどうすれば良いか分からなくなるから。ちよ、月光なんとかして」

「……俺が知るか」

「あはははは、不死身君、零華ちゃん泣かした」

「いや、だからちげえって！」

「……んで」

「ん？」

大兎がこちらに向き直る。

「……何で俺を仲間だなんて言うんだよ！？俺はもう人間じゃねえんだぞ！？人知を越えた化け物だ！だったら敬遠しろよ軽蔑しろよ差別しろよ！何でそんな台詞が吐けるんだ！何で恐怖もせずに関われるんだ！この偽善者！！この嘘つき！！この……この………」
涙を流しながら叫ぶ。耐えられなくなり床に座り込む。

——生前もそうだった。俺には妹がいた。二歳離れた、妹。俺の味方は、彼女だけだった。

——五歳で両親に捨てられ、

——三年間、親戚に次々にたらい回しにされ、

——中学に入ってもいわれなき迫害に晒され続けた。

——そんな中、彼女だけはいつまでも味方でいてくれた。優しく俺を励まし、明るく俺と話し、何も言わず慰めてくれる時もあった。

——今の大兎は、彼女と重なる“何か”があった。ただただ真っ直ぐ、相手を思いやる“何か”。

人はそれを、優しさと言うのか。

流石に知らないが。

「——俺は、お前がどう変わろうと、お前を見捨てたりはしない」

「……………」「お前が何でそんな姿になったのか、俺は知らない。だけど、お前はお前だろうが」

「……………」

「だから、もう一人でどっかに行くんじゃない」

「……………」ん」

俺は静かに頷く。まだ涙を流していたが、それを拭い、立ち上がる。

「あ、その、つまりだな」

大兎は少し赤くなり、慌てたように付け加える。

「ここには仲間がいるんだ。遠慮せずに、頼れ」

「……………」ああ！」

俺は笑って頷いた。

とりあえず、場が落ち着いた後に、俺は皆にこう切り出した。

「じゃあ、話そうか。俺について」

「どういう事だ？」

「俺にはまだ秘密があるって事だよ。それを話そうと思ってな」

「秘密？」

「ああ」

「それは、あそこにくたばっている女たちにも関係あるのか？」

そう言って月光は顎でソファで転がされている女たち——鞆走を示す。ああ、最近空気と置いていたら、そんなところで転がっていたのか。

「まあそうだな。っていうか、全員にも関係ある話だしな」

「——まあ、簡単に言えば、鞘走は南那籤の劣化コピーで、俺はそいつを倒すために『廃華の種』で擬似的な神になった、というわけだ」

「そうなのか……」

大兎が複雑な表情で呟く。まあ仕方ないだろうな。俺だってこんな話いきなり聞かされても戸惑うだろうし、最悪そいつの頭を疑うだろう。

だがしかし、事実だから偽りようがないし、偽る理由がない。

「それで？」

月光が俺に視線を向ける。

「お前はどうする気だ」

「ああ？そりゃ決まってるんだろ」

俺は月光に向かい、笑って言う。

「倒すさ。倒して、この世界を守る」

「開け」

月光が生徒会室の白い壁に命じる。

すると 聖地 が命じられた通りに開かれ、

座標は、O Z T O 三 δ σ K X M K。

南那籤が待つという次元だ。

「んじゃ、行ってくるよ」

「絶対、帰ってこいよ」

大兎が言う。

「俺の部下が負ける事は許さない」

月光が言う。

「零華ちゃん頑張れ〜」

美雷が言う。

「……まあ、頑張きなさい」

ヒメアが渋々と言う。

それに俺はもう一度笑い、

「ああ」

道程^{みち} を繋ぐ。

道程 をくぐった。

続く。

第十六話 南那鑑 黒白（上）（後書き）

次回バトル。

かなりガチです。

ぶっちゃけ神々の戦いと言っても過言ではないです。
ではまた次回。

第十六話 南那鑑 黒白（中）（前書き）

はい。戦闘描写が色々な意味で痛々しいです。
それで良ければ、どうぞ。
では、始まります。

第十六話 南那籤 黒白（中）

0

僕の好きな色は緑だよ。

きみたちの好きな色は？

「黒」

「白」

「灰」

1

「よう。死に損ない」

俺が 道程 をくぐると、目の前に南那籤が立っていた。心底むかつく笑みを浮かべているのが憎たらしい。マジで殺したい。

「うるせえよ、ストーカー」

「なっ！？何て事言いやがるてめえ。僕は彼女のために……」

「その考え方が既にストーカーなんだよ。押し付けがましい善意は相手にとって悪意だぜ。現に エンプティ は迷惑だって言ってたしな」

「――」

南那籤は絶句した。呆けた表情でこっちを見ている。

「……………な」

「あん？」

「僕をストーカーと、呼ぶなああああああああ——！」

あ、理解はしてたんだ。

「ガアアアアアアアアアアアアア！」

こちらに突っ込んでくる南那籤。相変わらず恐ろしい速度だが、

「遅いよ。『廃華の種』—— 劍枝^{しるぎえだ}」

空中に無数の劍が現れ、

「……………ギアアアアアアアアアアアアアア！」
南那籤に突き刺さった。

「……………ガハッ……………てめえ、……………何なんだよ、そりゃ
恐ろしい形相でこちらを睨む南那籤。怖い、怖いよ。マジで怖い。
心底、心臓止まりそうなくらい怖い。」

今、余裕綽々な表情ですが、かなり引きつってます。
落ち着け、落ち着け。大丈夫。怖くないから、うん。
「教えてやろうか？」

「……………」

「んー？なんつった？」

「……………教える」

「人にも頼むときは何て言えば良いのかなあ？」

……死亡フラグが立ちました。

「『廃華の種』——はぜわかば爆若葉」

南那籤の周りが大爆発を起こす。

「——ッ！！？？」

悲鳴が掻き消される。辺りが決れるどころか、まとめて消し飛ぶ。その余波でさえ、半径二千キロにも及ぶ、文字通りの『災厄』だ。音が消え、光が消え、生き物が消え、存在が消え、全てが消える。それは、一瞬で有りながら、永遠ともとれる地獄を造り上げていた。せめてもの救いは、その次元が消し飛ばされなかったところか。

「……ガッ、ア……」

そんな中、未だに南那籤は生きていた。既に残りカスとしか言えない程にぼろぼろだったが、あの『災厄』の中、生き延びていた。呆れるくらい無駄にしぶとい。さっさと死ねば良いのに。

「——カフッ……」

俺の口から血が零れ落ちる。次いで、体の至るところから激痛が上がる。『廃華の種』による反動だ。

やはりと言つか何と言つか、コレは完全には俺の体に馴染まなかったらしい。イマジナル が言うところによれば、精々八割というところらしい。残りの二割は未だに俺の体内で暴れている。普段なら抑え込めるが、いざ戦うとなればそれを前面に押し出さなければいけないわけで。つまり戦闘が長引けば長引く程に俺の体は傷ついていく。下手すれば、戦闘終了時点〃俺の寿命になる可能性もなきにしもあらずだ。

「しかし、無駄に頑丈だな」

「は……はん。てめえはかなりきつそうじゃねえか。僕が優しくやさしく抱き締めてやろうか？ 子守唄でも歌ってやろうか？ ああん？」

「………殺す。『廃華の種』—— 刹死々々々々」
せつしゅんひやくんじゅつしゅん

劫火。沸騰。獄炎。蒸発。

正にその言葉がよく似合う地獄だった。地面は一面全て焼け爛れ、溶け崩れ、燃え消える。生物どころか神すら殺してしまうくらいの、一掃火炎。

ネーミングセンスないけどな、はっはっは。

『なめるなよ。……位置支配——ピンポイント指定砲撃・五月雨バルカン』

「ッガアアアアアアアアアアアアッ!？」

両腕が千切れ飛ぶ。肩口から腰までの肉や内臓が潰され飛び散る。片耳が削ぎ落とされ、脳しように撒き散らされる。体中の骨が粉碎され辺りに散らばり、更に粉々に磨り潰される。着弾の衝撃で飛び

散った岩石が全方向から叩きつけられる。どう考えても即死だ。

だが、即座にその傷は癒える。一瞬後にもう大部分は修復しているし、痛みも消えた。そもそも痛みを感じたかどうかも怪しいが。

『ふん、生きているのか。無駄にしぶとい奴』

南那籤が……いや、白が目に侮蔑を込めて言った。

「お陰様でな」

『アレを喰らって生きていたのはお前が初めてだよ。流石はイマジナルの造った「廃華の種」だな。再生力も半端じゃない』

「……知ってんのか」

『まあな。まあ、知ってんのは俺だが』

「……………」

『コイツは知らないよ。——何にもな』

雰囲気は黒から白に変わっていく。

「……………」

「コイツはどうやら自分の意志で動いていると思っっているようだが、違う。こんなのはただ、俺が良いように誘導していただけだ」

「……傀儡くわいって事か。悪趣味だな。『超越者』か？」

「答えるまでもないだろ、どうせそこまで踏み込んでんだから」

「まあ……なッー！」

地面を蹴り跳躍する。空高く飛び上がり、

「終わらせる……ッ」

「ふん、出来るもんならな」

「『廃華の種』——混成接続版、しやうけつじつぱん 炎羅葬樹・居並ぶ墓標——！！」

劍枝が、爆若葉が、ささくればり 笹暮針が、しゅえん 種宴が、つたいかぜ 蔦煎風

が、死絡蔓^{しがらみづる} が、尸断璃香^{したりが} が、一斉に 白 へと向かう。
それらは 白 の全方向から殺到し、奴を木っ端微塵に――

「ああ、言い忘れてた。君、内臓が潰れてるのにそんな激しく暴れて大丈夫？」

グジュリ、グシャグシャグチャグチャ！　と俺の体からナニが潰れる音がする。そして、

「――ッ！？　うああああ………ッ！！！？　………ッ………

………ア………！！？　――ッ！！！！！」

激痛。およそ人間が耐えられる訳がない痛みが、およそ人間が感じられる訳がない傷みが、俺を襲った。

「俺の力は、黒 より強力で強大だ。それこそ、カミサマの内臓器官すら指を少し動かすだけで思いのままだ。まあ、カミサマに内臓があるのかどうかは知らないがな」

唇の動きで何となくこう言ってるんだろうな、と思う。聞こえないから、分らない。つまり、返答は出来ない。

（位置支配、か。何とも厄介な代物だな。コイツの位置支配なら、俺が喰らわせたダメージも、別の『位置』に転移させるんだろうな）
こんな事を思考しながら、僅かに動く眼で 白 を見る。

（……ッ！　ツクソ、痛みでまともに考える事も出来ねえ。両腕はもがれるわ、両脚は骨ごと潰されるわ、踏んだり蹴ったりだな。文字通り手も脚もでねえ）

なんて冗談も、この絶望的状况を覆す打算にはならない。しかも、傷は回復しても、痛みは未だに燻り続けている。

（……万事休す、いや、最早こんなのは、戯言としか言いようがな

いな)

絶望的な思考しか出来ない。これでは何のために半カミサマになったのか分からないじゃないか。

「……………ふざけんなよ」

「あん？」

白　が怪訝そうな顔でこちらを見下ろしてくる。

「……………ふざけんじゃねえ。何だよこのふざけた状況は、何で俺が這いつくばってんだ何でお前が見下してんだ何で俺は動けねえんだ何でお前の力に屈服しかけてんだ何で俺が喰らわせたのに生きてんだ何で何で何で何で何で何で何で何で！！　俺は認めねえぞ！何があろうと何が起ころうと何が現れようと何が消え去ろうと！！　認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ！！！！　……………そのためには、お前、邪魔だなア」

「な……………ツ！？」

何かが驚いているが、ドウデモイイ。とにかく、全てケシテヤル。全て、全て、全て全て全てすべてすべてすべてすべてすべてすべてスベテスベテスベテスベテすべてすべてすべてスベテスベテ！！！！

「『廃華の種』——禁忌解放1《セカンドシフト》——^{ほっが}萌芽」

「ま、ず——っ」

「……………磨り潰せ。禍^{かじつ}実」

白の体を、不可視の一撃が、磨り潰した。

第十六話 南那鏡 黒白（中）（後書き）

.....何も言
わないで下さい。

正直、自分の思考回路のどうにもならない壊れっぷりにぐうにかして打ち克とうとしてるんです。

でも感想は欲しいんです。

この際酷評だろうと構いません。どしどし送って下さい。
うう.....。

イマジナル「.....ドンマイ」

エンプティ「.....何も、言えません」

ハデス「.....強くなれ」

ヘラ「.....大丈夫。明日があるさ」

作「.....ありがとう」

頑張ります。

第十六話（下）南那籤 黒白（前書き）

今回はいつ天編の『一時的』な最終回。だからと言って、いつ天をもうしない訳じゃないので、これからもうよろしくお願いします！では始まります。

第十六話（下）南那籤 黒白

0

さあ、そろそろ終わらそう。

1

『萌芽』。

『廃華の種』適合者が『種核^{シード}』のリミッターを外す事で発動する、
『侵食による』凶化解放^{ギアズシフト}である。

リミッターは適合率にもよるが、『咎識零華』の場合は、総じて三
段階の解放^{シフト}がある。

その第一段階が、『萌芽』だ。

変化は劇的だ。

変貌は劇的だ。

容姿については、説明は省くでしょう。どうせいつかその機会がく
るだろう。

能力についてだが、端的に言って、通常モードを『1』とすれば、

『萌芽』の場合は——『100』である。

そして。

能力が『1』から『100』になったのなら。

当然その副作用も、

『100』倍である。

ヒュー、ヒュー、ヒュー。

という空気の抜けるような、間の抜けた音がかすかに聞こえた、気がした。

しばらく歩き、それがようやく、自分の喉から吐き出される音なのだと、分かった。

彼女は——『咎識零華』は、満身創痕のまま、永遠に続くように見える荒野を、歩いていた。

宮阪高校のセーラー服はぼろぼろのぼろ雑巾のように破れ。

手足には何の損傷もないにも関わらず、口からよだれのように黒ずんだ血を垂れ流している。

正に、瀕死の重傷だ。

(……力の、反動か)

彼女は、はつきりと、己の『死』を自覚していた。四肢にはもう、生前の腕力すら遺されていない。か弱くか細い少女程度の力もないだろう。

それでも。

「……………な、んで」

零華は、両手で 白——いや、『南那籤』の服の襟を持ち、引き摺りながら彼を 座標 へと連れて行くこととしていた。

「……………何でだと？」

零華は呟いた。

独り言のように。

「……………決まってるだろ」

零華は呟いた。

独白のように。

「……生憎ながら、約束してんだよ」

零華は呟いた。

誓うように。

「アイツに、『好きにする』ってな。……だから、俺は、お前を、助けてやるよ」

「……………」

「助けてやる。っつーかてめえ、俺を、ぼこぼこに、しやがった、恨みは、ぜってえ、晴らすからな。精々、イマジナルの、裁判^{せうきあう}でも、受けてろ」

一言一言、叩きつけるように南那籤を睨みながら言う。

「ま……………」

「おっと、ここだここ。ほーらよっと！」

両腕に力を込めて、南那籤を投げ飛ばす。そして、

「開け」

虚空がひずみ、穴が開く。道程だ。

その道程に、南那籤が吸い込まれて行った。

行き先は、『神の界域』。

南那籤にとって、始まりの場所だ。

南那籤が吸い込まれて行くのをしばらく見つめ、それから血へどを吐きながら、「開け」、と道程を開く。

「……………お別れの、あいさつしなきゃなあ……………」

少し悲しそうな表情を浮かべ、その穴に入って行った。

その、数分後。
零華は、『物語』が自分の思い通りになる訳がないという事を、思
い知る。

.....

「ハア、ハア、ハア、ハア……ゲホッ！ ……ハア、ハア」
道程 を歩きながら、零華は何とか傷を回復させようと、大嘘憑
き《オールフィクション》ノーマットゲージ や不傷者を全開にして、歩き続けた。
当然というか、やはり、ほとんど回復しない。
僅かに疲労を解消するのが関の山だ。
もつと悪いのは、使う毎に効果が薄れてきている事だ。
良薬と言えども乱用すれば効果が薄れるのは当然だ。
死にかけ、なのだ。

出口が見えてきた。

「……ハア、ハア」

必死になって歩いていく。いつ倒れてもおかしくない。

——やっとなついた。

と顔を綻ばせた。

——驚くかな？ いや、驚いてくれるかな？

——……少し、哀しいなあ。

そう思いながら生徒会室に入る。

血の匂い。

——しまった。血をなかつた事にし忘れた。

そう思いながら生徒会室に入っていく。

そこで。

血塗れで倒れている仲間を見た。

見て、しまった。

「……………え？」

最初に疑問。

「……げっこう？　みらい？　ひめあ？　たいと？」

次いで戸惑い。

「……な、なんで、みんな」

さらに恐怖。

「い、いつたい、なにが」

と、

「……れ、零華、か？」

血溜りの床に伏していた大兎が震える声で問い掛ける。

「た……大兎！？　い、一体何が」

「……鞘走」

「ッ！？」

「……あいつが、いきなり跳ね起きて、それで、俺たちを」

「……そんな」

——いや。一つだけ、心当たりがある。

——　　白　だ。

あいつは、止めの直前に南那籤の体から抜け出て、別の次元に逃げ込んでいた。

ならば、その行き先は？

決まっている。分身体である、鞘走　殺人の体だ。

「そういう事。」ご名答だね、咎識　零華——いや、『崩城　静柩』
君」

後ろからそんな声が聞こえ、零華が振り向いた直後。
ヒュンッ。

という音が聞こえて、

「ガア……ッ」

静かな断末魔の呻き声が聞こえた。

恐る恐るそちらを見ると、そこには。

首を切断された、鉄 大兎の死体が転がっていた。

本来ならここで、『七回死ぬまでは死なない』不死身の力が働き、
傷が回復するのだが、しかし。

回復はしない。

再生が始まらない。

つまり。

今の攻撃が、七回目。

つまり。

死んだのだ。

「あ……」

「残念。護れなかったねえ」

事実を簡潔に語ろう。

彼女が『ナニカ』をなくしたのは、単なる代償だ。

正当なる代償を。

平等なる対価を。

払っただけだ。

内容は単純。

エデルカの主に、四人を生き返らせたただけだ。

代償を、対価を払い。

代替品の『大切な物』を払って、生き返らせた。

故に、今の咎識 零華は、そして、『崩城 静柩』は、ただの死に体の如き存在だった。

『あなたは何を望むの』

『……こいつらを、生き返らせてくれ』

『蘇生は安くないわよ』

『……知っている。そんな事、百も承知だ』

『……あら、最古の魔術師ヴァンパイアもいるのね。高くつくわよ』

『構わん』

『ふうん。余程大事なのね』

『……………』

『良いわ。じゃあ呼び戻しましょう。彼らの命を。彼らの魂を——
その代わり』

『……………』
『……あなたには代償を払って貰うわ……………』
『……ッ！……ア……………』
『さあコレを、冥討の輪を潜^くり、天秤の片方に置きましょう。釣り合いがとれるように。釣り合いがとれるように』

差し出した代償は四つ。

一つ——生前の記憶。
一つ——大兎達との日々の記憶。
一つ——自らの寿命の四分の三。
一つ——自らにとつての世界の価値。
それらが一気に抜け落ちた後の零華は、まさしく抜け殻だった。

まあ、簡単に言つて、この世界での『咎識 零華』は、しばらく世界から抹消される。

それは『死』ではなくあくまで『一時停止』だ。

『咎識 零華』を、修復し、修繕するための一時停止。

ならば、その退屈な時間を潰すために、しばらく遊ばせてあげようじゃないか。

だから、存分に楽しんで来い。

『崩城
静枢』
くん。

第十六話（下）南那籤 黒白（後書き）

おそらくだけれど、一番報われないのって鞘走な気がする。
次回から、ソードアートオンラインの世界に行きます。どうかよろ
しくお願いします。
では、また次回。

お知らせ

『中二だねえ』さんの感想で言われたとおり、自分自身で読み返してみたのですが、確かに酷い出来だ、ということが分かりました。流石にこれはダメだ、と。

そのため、まことに申し訳ありませんが、SAO編を一旦全て削除して、別のストーリーを展開させたいと思います。既に、プロローグ2から剣十一話までを削除し終わり、新しい話を作っている最中ですので、これからよろしければ、この小説をお願いします。この度は、誠に申し訳ありませんでした。

プロローグ2（前書き）

リニューアル一話目。

ブローグ2

——ボクハダレ?——

——ボクハナニ?——

——ナンデコンナトコロニイルノ?——

——イツマデ、コウシテイルノ?——

——ハヤク——

——ハヤク——

——ハヤク、死ンジャエバ良イノニ——

——ソウスレバ、モウ苦シマズニスム……

「暗いわーッ！……！」

バコーン！……！！

「アデッ！？」

金槌で殴られました。

「全く……」

隣から凄く刺々しいオーラが突き刺さる。

「どこ行っただかと思っただら、まさか【廃魂の丘】にいるとは。こっちは心配していたんだよ？」

ちなみに今、俺はヘラに大量の荷物を持たされている。事務仕事に必要な道具らしい。中身を見てみると、『チビツ子を賸ける為の十箇条』やら『子どもの集中力を持続させる手段』やら、これ明らか

に事務仕事関係ないじゃん！ というような本ばかりが入っていた。
…… 苦労してんなあ、こいつら。

「聞いているのか？」

ヘラからの突き刺すような視線が痛い。地味に痛い。アレ？ なん
かだんだん気持ち良……

「目エ覚ませッ！！！」

ガインッ！！ という轟音が鳴り、俺の頭に振り下ろされる。威力
に押され、よろめく。つとと、荷物落ちそう。

よっこらせ、と荷物を持ち直し、再びヘラの隣に並ぶ。

「ちよつとからかっただけじゃねーか。そう怒んなよ」

俺がそう言つと、ヘラは嬉しそうな表情で、

「やつときみらしさつてのが戻ってきたみたいだな」

「え……？」

何を言ってるんだ？ 俺らしさ？

「いやー、ここに戻ってきたときは、魂を抜かれた人形ヒドガタみたいな感じ
だったからねえ。その様子だと、ほとんど自我も復活したみたい
じゃないか」

ああ、そゆこと。

「まあ、この回復能力に関しては、『廃華の種』に感謝しても良い
な」

あの植え込み作業はまさに地獄だったからな……。

「……うん。もっかいイマジナル殴つてこよう」

「どさくさ紛れに逃げんな」

イマジナルを殴りに行こうと走りだした刹那、足を払われ転倒した。
くそっ、もうちよいで逃げれたのに！！

「ああ、早く転生したいぜ……」

両手一杯に荷物を持ったまま、白い空を見上げて呟いた。

「ねえ、転生したいんだけど」

「良いですよ？」

エンプティが住んでいる巨大な城——通称【神殿】につくなり、俺はエンプティにこう切り出した。すると、間髪いれず即答で了承された。軽ッ!?

「だって、事務仕事に限れば、静枢さん何の役にもたってないじゃないですか」

「事務仕事すらろくに出来ないチビツ子にそんなと言われる日が来るとは思わなかったぜ」

「ぐう……で、でも、文字すら読めないよりはマシですうー」

「十回に九回失敗する奴が偉そうに言うんじゃねえ」

「う……………うわぁ——ん!」

終には大泣きし始めた。

「うつ、うつ、ひどいです…………私だって、がんばってるのに…………」
マジ泣きだった。あー、なんか、罪悪感が…………。

ちらりと横を見ると、エンプティの事務仕事の指導をしていたツクヨミと、ヘラから発せられる殺気に気付いた。怖えよ。その視線だけで身体に穴が開きそうだよ。
やむを得ず、謝ることにした。

「あー、その、すまんかった、エンプティ。少し調子に乗ってたっつーか、つい苛めたくなっただっつーか」

これは果たして謝罪の内に入るのだろうか。

「いや、入らないね」

「入らないな」

ツクヨミとヘラからジト目でこんなことを言われた。出会ったときも言ったけど、ナチュラルに思考を読むな。

「うつ…………うつぐ…………ひつく…………うつ」

罪悪感で死にそうだ。

なんかツクヨミ達からも早く謝らないとぶち殺すと言いたげな視線（死線？）が飛んでくる。

「エンプティ」……

「ふえ？」

「すいませんでしたー!!」 全身全霊の力を込めて、土下座した。

その後、一時間ぶつ続けで平謝りに謝り続けてなんとか許してもらった。謝っている途中もツクヨミからは物理的なダメージを負いそうな死線を受け、ヘラからは物理的なダメージを負うような蹴りを背中に喰らった。

「……じゃあ、転生儀式——はっじめるよー！」

イ
—
イ!!!

エンプティの号令（？）に、その場に集まった古今東西の神々が返す。これって、軽くアイドルじゃね？ 人気ありすぎだろ。エンプティがなんかステージに陣みたいなもの描いている今も声援が止まない。洗脳レベルの信仰具合だぞ。大丈夫か、天界って。もしかして、あのチビツ子……悪女か？ 一体何やつたらこんな神々からの信仰を集められるんだ？ アレか。異性の交わりか。もしそうだとすると、この人数相手に？ ……引くわー。

「準備出来ましたよ」

俺が悶々と馬鹿なことを考えていると、エンプティから声がかける。かなりの間考え込んでいたようだ。

ステージに上り、こちらを見上げている神々を見る。
 なんか、皆一様に羨望の眼差しを向けてきてるんだけど。なぜ？

「じゃあ、お伝えしますね」

エンプティが手に持っていた巻物を広げ、俺に向かって読み上げる。

「あなたが行く世界は、魔法先生ネギま！ です」

『ネギま！』？ 題名とは裏腹に死亡フラグ満載の超ハードな世界？

「容姿を決定してください」

ゲームの設定画面みたいな要求だな。

「んじゃ、SAOのキリトで」

「容姿決定……っと。じゃ、次は五つまで能力かその他要望を決定してください」

「一つ目は魔法の才能。属性は火、風、光、雷、闇。特に闇は闇の魔法マギア・エレベアが使えるようにしてくれ。

二つ目は鍛冶スキル。そこら辺は、まあ、魔法具みたいなもんが造れるようなスキルを。

三つ目は魔力と気。魔力はナギの三倍で気はラカンぐらい。魔力は最低でも闇の魔法が使えるくらい。

四つ目は新魔法の開発力。ネギみたく独自呪文が造れるくらい。

五つ目は……絶対にミスって女にするんじゃないぞ？」

少々睨んで念押しする。

「わ、分かってますよ」

引きつった笑顔で答えるエンプティ。信用し難いが……まあ、なるようにしかならん。

「えと、じゃあ、その魔方阵の中に入ってください」

「は？ あー、分かった」

何するつもりだ？ また変なことするつもりじゃないだろうな。

俺が魔方阵に入り、続いてエンプティも入ってくる。すると、キイイイイイン。と魔方阵が光を発し始めた。

「じ、じゃあ、失礼します」

「は？ なに……」

が、と続けることは出来なかった。エンプティの唇が、俺の唇を塞いだからだ。

オマケ。

「いいなあ。あの半神」

「ホントだよ。あの半神」

「心底羨ましいぞ、あの半神」

『エンプティ様とキス出来るなんて』

ロリコン
紳士ばっかな天界。

プロローグ2（後書き）

次回もよろしくお願いします。

キャラ設定3（前書き）

キャラ設定です。

キャラ設定3

結城 キリト《ゆうき きりと》

外見年齢 16歳

容姿 SAOのキリト（桐ヶ谷 和人）と同じ。

始動キー アインス・ツヴァイ・ドライ。日本語で1、2、3の意味。ギリシャ語ではなくドイツ語。そのことから、キリトはこの始動キーを適当につけたのだと思われる。

アーティファクト 『湖の解錠者』——大量の鍵を付けた鍵束型のアーティファクト。一つ一つの鍵には色んな作品に出てくる武器、宝具などの名前が刻まれていて、その鍵を束から外し、魔力を込めて空中で半回転させることで、その武器を出現させ、使うことができる。例えば、FATEの 約束された《エクス》 勝利の剣と記されている鍵を使えばエクスカリバーが、BLEACHのクロス・オブ・スキャットフォルドと記されている鍵を使えばそれが現れ、使うことが出来る。

再現率は九割以上で、同時使用は二つまで、使用限界時間は一時間前後である。

元ネタはイソップ寓話の『金の斧』。

魔力量（ナギをAA+と仮定して） SS+

気 ラカンとほぼ同じ。

得意魔法 サギタ・マギカ魔法の射手 雷、火、光。 キーリブル千の《・》 アストラペー雷の

《ヨウイス・》

テンペスター
暴風。スルグリエンス

燃える《ウーラニア・》

フロゴシス
天空。

能力

不老 歳を取らない。ただそれだけ。

鍛冶スキル 様々な魔剣を造り出すスキル。

開発力 色んな魔法を作成出来るスキル。

キャラ設定3（後書き）

次回もよろしくお願いします。

葱一話（前書き）

リニューアル二話目

葱一話

「……………あああああああああああああああああああ
ああ！！？？」

落ちる！ 落ちる！ 落ちる！ 怖い怖い怖い怖い怖い！ なんで今回は空から！？ なんで今回に限って空から！？ テンプレート通りだけど、それをわざわざ守る必要もないよね！？

「あー、もう！」

仕方ない。使うのはマジで嫌だけど、こうなったらもうコレに頼るしかない！

「来れ《アダット》！」

俺がカードを持って叫ぶと、右手に鍵束が現れる。その中から適当に一本を取り出す。って……えーと。

「どうやって使うんだコレえええええ！？」

マズいマズいマズいマズいマズい！
マズいマズいマズいマズいマズい！

どんどん地面が近づいてきてる。もうなりふり構ってられん！

「《開け》！」

鍵を空中に突き出し、叫ぶ。鍵を回し、そして、ゴォッ！！と風が渦巻き、俺の手にソレ《・・》が握られる。それは、

「……第？」

とある名作魔法ファンタジーのハ。ーポツ。ーという作品で登場する世界最速のスピードを誇る筈、ファイアボルトだった。

「無事に着地出来るんなら何でも良い！」

俺はファイアボルトにサーフィンでもするように足をかけ、そのまま地面と平行になるように降りていく。

そして、無事に着地して、「ふう」と一息つく。良かった……生きて良かった……ッ！

辺りを見回す。そこは周りが木で囲まれたオアシスのようなところ

だ。ここの外側は砂漠みたいだし。少なくとも日本じゃないことは確かだ。

「微かに魔力を感じる。つつーことは、ここは魔法世界か？ とすれば、問題はどの時期かってことだな」

ここで挙げられる選択肢は二つ。大戦期、つまりナギ・スプリングフィールドが主人公の時代か、魔法世界編、つまりネギ・スプリングフィールドが魔法世界に突入した時系列か。後者は可能性は低い。なぜなら、こうも緊迫した魔力があちこちでぶつかりあっている。いくら魔法世界でも常にこんな緊張状態なわけあるか。ストレスでハゲるわ。つまり、前者か。

「去れ《アベアット》」

とりあえず、ファイアボルトを鍵に戻す。このとき気が付いたのが、俺の服装が替わっていた。SAOでキリトが着ていたような黒いボロコートに、同じく黒いズボンという出で立ちだ。だからといって、別に意味はない。ただ、分かりやすい説明をしなければならなかったのか？ 地味にシヨックだよ……。まあいいや。

親指と人差し指で鍵束を摘み、眺める。

「……なんだこりゃ」

さっぱり分からないというほどでもないのだが、逆に言えば大まかには理解出来ても、具体的な使用法は分からない。推察するに、おそらく鍵に対応した他作品の道具を取り出すとかいうようなアーティファクトだろう。確認のために、もう一度やってみるか？

適当な一本を束から外し（この鍵束だが、引き千切るように引く張ると簡単に抜ける。どうやら何らかの力で、鍵の取り外しが楽に行えるらしい）、

「《開け》」

今度は、巨大な剣に変わる。いや、これは、剣というより……、
「……斬月？」

BLEACHの黒崎 一護が使う斬魄刀、斬月だった。

「……………」

無言で斬月を振り上げ、魔力を込める。喰わせるように、練り上げていく。そして、

「……月牙——天衝！」

振り下ろす。ゴアッ！！という轟音とともに、魔力で形成された巨大な斬撃が空に向かって飛んでいく。途中、軌道上をふわふわ飛んでいた竜に当たって、竜が消し飛んだ。……知らね。

「去れ」

斬月の威力と、このアーティファクトの力は大体把握したので、俺はアーティファクト——湖の解錠者をカードに戻す。このアーティファクトは、チートすぎる。しばらく封印しようと、心に誓った。

このとき、俺は気付かなかった。

パクティオーカードの裏面、その中央に『00:02:32』という数字が浮かんでいたことを。

この失敗を、俺はのちに後悔する羽目になる。

葱一話（後書き）

次回もよろしくお願いします。

葱二話（前書き）

リニユーアル三話目

紅き翼のキャラがよく分からない。
アルが空気。

葱二話

SIDE ナギ

ゴウウウウウウン!!

「うおっ!?! なんだありや?」

「かなりの魔力ですね。ほら、直撃した 鷹グリフィヤウン 竜が綺麗に消し飛びましたよ」

確かにアルの言うとおりだ。鷹竜を一撃で消し飛ばすなんて、俺でもキツイぜ。

「よっし、決めた」

「何をだ?」

詠春えいしゅんが聞き返してくる。はっ、決まってるだろ?

「アレを撃った奴のそこに行く。そんで戦う!」

あんなだけの力を持つてるんなら、久々に楽しめるかもしれないからね!
な!

「……この、戦闘狂は……」

「仕方ありません。鳥頭ナギですから」

なに言われても気にしねえ! 絶対に戦ってやる!!

SIDE キリト

「おい、そこのお前!」

唐突に声をかけられた。振り向くと、馬鹿っぽい赤毛のガキと、ため息を吐いている野太刀を持った剣士、無駄に髪の毛の長い優男がいた。「えーっと、誰だお前」

こんな馬鹿っぽい奴みたいないない。いない、はずだ。

「俺はナギ・スプリングフィールド！ またの名を千の呪文の男！」
サウザントマスター

最強の魔法使いだ！

「あんちよこ見ながら魔法唱えてる奴の台詞じゃないぞ……」

野太刀を持った剣士——多分、詠春が突っ込む。うるせー、とナギが言い返しながら、こっちに向き直る。

「そんなワケで、戦おう」「断る」まだ言い切ってねえよ！

何でこの馬鹿と戦わなくちゃならん。俺まだ魔法の練習もしてないのに、無理無理。生けるチートキヤラ相手に無理だって。

「さっきの一撃、お前だろ？ アレにはびっくりしたぜ？ なんせ、鷹竜が消し飛ぶほどの威力の魔法を軽々と撃ったんだからな。だから、戦う」

「……………ハ？ ナンノコトデス力？」

「片言ですねえ」

黙ってる古本。燃やすぞ。

「ありや俺のアーティファクトだよ。俺の実力じゃねえ」

「嘘だな。お前からは俺よりも強い魔力が感じられる。それに、アーティファクトの力だろうが、その力を使っているのはお前自身じゃねえか」

どうやら言い逃れとかは出来ないようだ。チツ、馬鹿の癖に妙に鋭いじゃないか、見誤っていたぜ、ナギ。

「分かった分かった。戦ってやるから」

「マジか！？ よっしゃー！」

えーと、地面を足の裏で掴む感覚、だったっけ？ そんなで、気を集めて……

「んじゃ、行くぜ！ 百重千重と重なりて 走れ……ガッ！？」

「油断大敵ってね」

ナギがあんちよこを取り出して魔法を詠唱し始めた直後、瞬動を使いナギの水月を肘打ちで突く。同時に掌をナギの胸に押しつけて、気を集中させる。

「烈破掌！」

気を爆発させて、ナギを吹き飛ばす。

「グッ……！」

「遅い」

今度は虚空瞬動を使ってナギの背後に回る。右手を振りかぶり、

「プラ・クテ・ビギナル、魔法の射手、集束・雷の三十矢！」

渾身の力を込めて正拳突きを放つ。気を使わずに放ったため、打撃力はそれほどではなかったものの、魔法の射手の分はきっちり入ったようだ。あんまダメージなさそうだけど。

「はっ、なるほど。確かに俺は油断してたみてーだ。ありがとな、お陰で勉強になった」

勉強嫌いだけどな、と付け加えるナギ。ヤバい。多分これ次に本気がくる。

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！ 千の雷……！」

やべっ。このままじゃ死ぬ！

「アデアット！」

鍵束を取り出す。

「《開け》！」鍵で呼び出す。

そして、

ドゴオオオオオン……！ と轟音が鳴り、俺に千の雷が直撃した。

SIDE ナギ

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！ 千の雷……！」

ドゴオオオオオン！！　という轟音とともに、俺が放った千の雷が奴にぶち当たった。これで、少しはダメージを与えただろ。

「これ……死んでんじゃないか？」

「望みは薄いでしょうね。魔法障壁を張るような仕草はありませんでしたし」

え”？　マジで？　まさか、死んだ？

「ヤッベー……？」

と、気付いた。何かがおかしい。この魔力？　気？　とにかく、変な力が辺りに充満している。

「インヴェイダース・マスト・ダイ」

土煙の中から、そんな声が聞こえた。そこには、真っ黒なコートを羽織った、黒髪の男が立っていた。

「危ねー。夜笠出すのが間に合わなかったら死んでたぜ」

少々顔を青ざめさせて奴が呟く。だが、俺に取って大事なものはそこではない。

無傷だ。あの千の雷は俺の得意な電撃系最強呪文。最低でも腕の一本と生きていた。それなのに、奴は全くの無傷。こんな奴、今までいなかった。

「へ……」

だからこそ、俺はこいつと本気で戦いたい。あ那时的俺の予感の間違つてなかった。それが、嬉しい。

「残念だけど……お前らは既に『セーブ済み』だ」

「な……！？」

「ほう、これは……」

「おいおい、マジかよ」

唐突に視界が真っ暗になる。いや、まるで塗り替えるように、侵略するようになり、黒が俺たちの周りを覆い隠していく。目の前から奴が消える。待て！　俺は、まだ……。

「ようこそ、ゲームの世界へ」

SIDE キリト

うだー、死ぬかと思った。よりもよって電撃系最強呪文撃つ奴があるか。あと数秒夜笠出すのが遅かったら消し飛んでたぜ。

『コラー、出しゃがれー!』

今俺が持っている携帯ゲーム機からこんな声が聞こえる。

ナギである。ついでにアルことアルビレオ・イマと、詠春こと青山詠春もついでに閉じ込めた《セーブした》。ナギだけだといろいろ面倒だし。

「やなこった。だってお前、出したらまた戦い挑んでくるじゃん。めんどいったらねーよ」

不意打ちした奴が言うな、と自虐してみる。

『良いから出せー!』

「だが断る」

『ふざけんな!』

「さーて、魔法練習しよ」

『聞けよ!』

騒ぐ馬鹿は無視して、俺は一人特訓を始めた。

「えーと、まず……プラ・クテ・ビギナル、光の精霊100柱、集
い来りて敵を射て、魔法の射手、連弾・光の100矢」

端的に言って、成功した。簡単だった。楽勝だった。なので、調子
に乗って、

「プラ・クテ・ビギナル、来れ雷精風の精、雷を纏いて、吹きすさ
べ南洋の風、雷の暴風」

ズガアアアアアアアアン！！と、目の前にあつたはずの木
々が吹き飛んだ。

「魔力込めすぎたかな……」

『出せー！』

『うるさいぞ、ナギ』

『うつせ、つーか何で詠春はそんな落ち着いてんだよ！』

『騒いでも事態は好転しない。なら、少しのチャンスも見逃さない
ように待つべきだ』

『??? つまり、何が言いたいんだ？』

『……この、鳥頭は……』

『仲がよろしいですね、こんな状況に』

『どこがだ！！』

「うつせー……」

そろそろ耐え切れなくなった俺は、無言でゲーム端末に近づく。軽
く操作して、アルと詠春のみ外に出す。

「おや」

「な……」

『俺は！?』

「お前はダメだ鳥頭」

詠春は外に出るや否や、野太刀を抜刀し、構える。

「何のつもりだ貴様……?」

めちやくちゃ睨み付けてくる。

「正直、ナギはともかくあんたらをセーブしとく理由はないから」

「どういうことだ？」

「んー……」

俺は手を重ねて合掌のポーズを取り、

「神鳴流教えて？」

「は？」

「そっちのローブには魔法を教わりたい」

「はあ」

すごい呆れたような表情をされる。そんなおかしいことを言ったかな？

・ナギの巻き添え喰らって閉じ込められる。

・そのまま十分ほど放置。

・やっと解放された直後にいきなり「教えて？」と頼まれる。

……じゅうぶん理由になんじゃねえか。ノリで馬鹿なことやったのが間違いだったのか。やっぱ使わなきゃよかった。

パチッ。

「……ん？」

背後からいきなり変な音が聞こえた。見ると、端末から煙が吹き出している。そして、

ボンッ！ と爆発した。

「ナギーッ!？」

詠春が爆発地点に駆け寄る。

「痛ッ……」

「ナギ!？」

呻きながらナギが煙の中から現れる。おお……無事だったか。

「何だったんだ？ あれは」

「さあ？」

俺に聞くな。今日初めて使うんだから、知るわけねえだろ。

アーティファクトも自動的にカードに戻ったようだ。なんか煙吹い

て……アレ、何だこの数字。十三分三十七秒？
ドクンツ。

$$\begin{matrix} \lceil \\ h \\ \vdots \\ ? \\ \lfloor \end{matrix}$$

ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ。

「なに、
が」

ドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツ。

「お、きて……」

ドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクン！！

「が……！」

身体が熱い。熱い。熱い。熱い。熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い！！

「な……が……んだ！」

「おい……じょう……か……」

「……は……の……暴走……！？」

ナギたちが何か言っている。だが、聞こえない。聞こえない。聞こえない。聞こえない。聞こえない。

焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける
焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける
焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける焼ける
溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける
溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける溶ける
死ぬ？

「ガアアアアア……!？」

そのまま、意識を失った。

葱二話（後書き）

次回もよろしくお願いします。

葱三話（前書き）

リニユール四話目。
文才のなさには絶望気味。

葱三話

SIDE ナギ

俺がアーティファクトから解放された直後、いきなりあいつは苦し
みだした。心臓を掴むように胸に爪をたて、身体を痙攣させている。
「なにが起こったんだ!」

「おい、大丈夫か!？」

いきなりどうしたってんだよ!

「これは……魔力の暴走……!？」

「暴走? これが?」

「ええ。彼の体内で凄まじい魔力の奔流が渦巻いています。このま
ま放っておけば、おそらく、あと数十分で」

死にます。

アルは一度言葉を区切って、言った。

「でも、なんだってそんなことに……」

「あなたとの戦闘が原因でしょう」

「え……?」

「それは、プレッシャーかなにかでつてことか?」

「おそらくは。彼は臍肩目で見ても魔法戦闘をしたことがあるとは思
えません。さらに言えば、彼の体内には魔力の他に膨大な量の気
が流れているようです。あの戦闘ではそれを魔法とともに行使して
いました。本来であれば反発するはずの二つの力を、力づくで押さ
え付けて。同じ極の磁石を錘で無理矢理繋げているようなものでし
ょう。戦闘時はそれを無意識で行っていたから――」

「戦闘の緊張感が抜けたときに、その錘が外れたってこだな」
アルの説明を詠春が引き継ぐ。

「はい。しかも、彼はアーティファクトも併用していました。身体にかかる負荷は尋常なものではないでしょうね」

「おいおい嘘だろ。つーことは、俺が戦いを挑んだからこいつが倒れたってことになるじゃねーか。」

「どうするんだ、アル」

「そうですね……戦いを止められなかった私たちの責任でもありませんし、とりあえず我々のキャンプまで運びましょう。詠春、手伝ってください」

「分かった」

詠春が地面から助け起こし、背負う。そして、キャンプへ向かって歩きだす。

「……………」

「おや、さっきから黙っているようですが、どうしたんですか？」

「……やっぱ、あいつが倒れたのって、俺のせいかな？」

「そうですね。あなたの責任です」

「う……………」

「ですから、今度から無闇に突っ走ることがないようにお願いしますね」

「……………」だー、分かったよ「ちっ、しょうがねえな。」

「なあ、こいつ死んでないかな？」

「「え!?!?」「」

SIDE キリト

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

...

.....ブハッ!?

死ぬかと思った。仰向けだった姿勢から跳ねるようにして起きる。すると、身体全体に痛みが走った。めちゃくちゃ痛い。

「あれ?」

目の前の光景を見て気が付く。ここは魔法世界じゃない。それどころか、現世ですらない。それを見て、俺は自らの身に起こったことを理解した。

「あ、お目覚めですギヤアアアアア!」

反射的にアイアンクローを繰り出した。この舌つ足らずな声は……ッ、

「てめえなに考えてんだバカがあーッ! 一回使用しただけで死に到るようなアーティファクト渡すんじゃないねえ——ッ!」

「痛いです痛いです痛いです！ 割れちゃいますからやめてください！」

簡単に言って、俺はこの少女に間接的に殺されたわけだ。

こいつの話を纏めると、神との仮契約で現れたアーティファクトは普通のものとは比べようもなく強力で、それ故に使うとき、身体が耐えきれなくなるそうだ。だから、大概の転生者には不老ではなく不老不死をつけるらしい（俺の場合は忘れてたんだと）。さらに、アーティファクトを使えばこいつからの魔力（神力？）も流れ込んでくるわけで、そうなると身体がその魔力を抑えておくことが出来ずに死に到る、ということらしい。つーかさ……

「そういう大事なことは、最初から言えや！！」

「ごめんなさい、忘れてました！！」

知らずに使っちゃったからこんな事態を引き起こしちゃったんだぞ？ 忘れたで済むと思ってんのか？

「次からは死なないように設定しますからもう許してくださいお願いします」

「なんか棒読みなのがムカつくなお前」

バカにされてる気分。

「まあいいや。次から死ななければ構わないし」

死ななきゃ大丈夫。生きてりゃなんとかなるさ。

「じゃあ、そろそろ戻しますね」

「おう。ちゃんと死なないようにしてくれよ」

「分かってますよ。……少し変な副作用が付きますが（ボソッ
ん？）」

なんか言った？

「では、さよーならー」

そう言っただけを送り出したエンピティは、なぜか笑みを浮かべていた。なんか嫌な予感がす……

「……それにしても、アルビレオ・イマも混乱していたんでしょうか？ 魔力と気の同時併用ごときで、あんな苦しむわけないじゃないですか。第一、成功すれば究極技法の『咸卦法』ですし。気じゃなくて、私の神力ですよ。……もしかして、バカなんじゃないか？」
少女は小さく嘆息した。

これだから作者は、と。

「うわああっ！」

「うおおっ！？」「」

ん？ 今、俺以外の声も聞こえたぞ？

「びつくりさせんなよ、お前」

隣から笑いを堪えるような顔をしているナギが話しかけてきた。

「ああ？」

「……こいつは男だこいつは男だこいつは男だ……」

俺は人におぶられているらしい。そいつは黒服に逆立った黒髪、眼鏡をかけた剣士、詠春だった。なんかぶつぶつ呟いているが、なに言ってるんだ？

「あなた、自分の身体見てみればどうですか？」

アルがなぜか悪意が込められたような微笑を浮かべ、俺に言った。自分の身体？

服装は変化していない。厳密に言えば、サイズが少々合っていないことだ。さっきまでピッタリだったのに、なぜだ？　つか前髪が鬱陶しい。頭を俯かせると、それが鼻っ柱をくすぐる。そのたびに払い除けたくなる。

「……アレ？」

そこまで考えて、やっと気付いた。俺の髪——こんな長かったか？　それに服のサイズ。服の大きさが変わったのではなく、俺の身体が小さくなったのだとしたら？

嫌な予感がする。まだぶつぶつ言っている詠春の肩を叩き、地面に降り、そこで明らかに身体が小さくなっていることを再認する。

「まさか……おい、誰か鏡持ってないか？」

アルが相変わらず悪意ある笑みを浮かべたまま、俺に化手鏡を投げ渡してくる。それをキャッチし、覗き込むと、

「な、何じゃこりゃあ!？」

思わず叫ぶ。

そこには、女の子にしか見えない、線の細い顔があった。

葱三話（後書き）

アルはバカじゃありません。作者がバカなんです。
次回もよろしくお願いします。

葱四話（前書き）

リニョーアル五話目。

キリトと詠春がマジバトル？

テイルズ技勃発。

葱四話

Aさんの証言。

「いや、本当に驚きましたよ。いきなり彼の身体から湯気のようなものが立ち始めたと思ったら、みるみる内に髪が伸びるわ背は縮むわで」

Eさんの証言。

「……背負ってたら、いきなり抱えていた身体が熱くなりだして、なにかと思えばさっきまで少年だったはずが少女のようになっていた。しかも、そのあとから背中にや、や、柔らかな感触が……うわああ（このあとからE氏が錯乱したため、インタビューを中止しました）」

Nさんの証言。

「……ぷっ。……くつくつくつ……くすっ、ぷくく……
… あははははははははははははははははははは！」（こ
こから先のインタビューは要領を得ないと判断したので打ち切りま
した）」

大笑いしているナギに魔法の射手を千矢放ったあと、このメンバーの中で唯一まともに話ができるアルにもう一度詳しく事態を説明させた。

こいつはこの紅き翼の中でも二番目くらいに常識人だから……口
リコンであることを除けば。

「心外ですね。私は」

「変態の言い訳なんざどうでもいいからさっさと説明プリーズ」

「はあ、分かりました」

ため息つきたいのはこつちだ。なんせ起きたら女になってたんだか
らな。……俺はこの瀬能 ナツルだよ。

～説明中～

……なるほど。

「いや、ほんとに済まん。こんな面倒かけちまって」

「構いませんよ。もともと私たちのリーダーが原因ですから」

「でも、その喧嘩を買ったのも俺だし」

「こちらこそ押し売りのようなことを……」

「いや、こちらこそ……」

「いえいえこちらこそ……」

「何をやってるんだ？」

俺とアルのやりとりを馬鹿を見るような目で見てくる詠春。つかし
ーな、奥様方の譲り合いを再現したつもりだったんだが……。

「気にするな。あ、それより神鳴流教えてくれよ。ほら、斬岩剣と
か雷鳴閃とか……」

「いきなりそれか？ まあ、確かにお前のようなバグキャラならす
ぐ出来るかもしれないが……」

え？ 俺ってそんな認識？ やだなあ、たかがナギ含め三人を閉じ
込めただけじゃないか。それはあんま剣の腕には関係ないような気
がするが。

「まあいいや。早く教えてくれよ」

「分かった分かった。晩飯のあとで教えてやる」
詠春が若干うざそうにしながらも許可してくれたので、思わず「うっしゃ！」と飛び跳ねた。そのとき、胸に違和感があったせいで、再び沈んでしまった。

さて、晩飯を喰い終わり、俺は詠春と対峙していた。詠春の手には野太刀、『夕風』。そして、俺の手には同じく野太刀、銘は『贄殿^{にえとの}遮那^{のしやな}』。知っている人は知っている（多分ほとんどの人が知っている）、とてもない斬れ味を持つ大太刀だ。

「そんなものどこに持ってた？」

「昼に造った」

「はあ!？」

その言葉に偽りはない。俺がエンプティに頼んだスキル、『鍛冶スキル』で即席の工房を作り、とりあえずそこら辺に落ちていた武器を溶かし、カンカン打ち続けてたら、なんか出来た。斬れ味にも強度にも問題はなかった。適当な木を千本斬っても折れるどころか刃こぼれすらしなかった。作成の過程で何が起きたのやら。某殺人料理人の料理並みに謎だ。

「むちゃくちゃな奴だな」

「……すみません」

否定出来ません。第一、神からもらったアーティファクトですら既にむちゃくちゃなんです。あれ以上のむちゃくちゃさなんて、あとはいせいで魔法開発力ぐらいです。ごめんなさい。

「じゃあ、早く始めようぜ」

「ああ、そうだな。……その前に、一つ聞きたい」

「何だよ」

「お前の名前だ。よく考えたら、一度も聞いていない」

「あー、そういえば……」

なあなあで一緒に行動して、一緒に飯まで喰ってたんだなー。俺にはぬらりひよんの力も備わってんのか？ だとしたら、すっげー嫌だ。あんな後頭部長くなりたくない。

「じゃあ、自己紹介でもしようか。俺は結城 キリト。旧世界日本出身だ」

「なら、こっちも名乗ろうか。神鳴流、青山 詠春だ」

詠春が夕凧を構える。俺も贅殿遮那を構える。そして。

「神鳴流奥義、斬岩剣！」

夕凧を横一文字に振るった。俺は咄嗟に身体を沈めてかわす。お返しとばかりに、

「斬岩剣！」

逆袈裟に斬りかかる。詠春は身をそらしてかわす。

距離をとる。詠春は驚くどころかむしろ呆れて、「やっぱりバグキヤラじゃないか……」と言った。うん。俺も呆れた。まさか、一回で真似出来るとは思わないよ、普通。

「教え甲斐があるのかないのか……」

頭痛がするというようにこめかみを押さえる。そこまで言う？

「まあいい。次行くぞ」

「おう、来い！」

詠春が走り込んでくる。

「斬鉄閃！」

「おっと、斬鉄閃！」

「斬空閃！」

「つとお、斬空閃！」

「百烈桜花斬！」

「ちいつ、百烈桜花斬！」

一旦距離をとる。こっちは真似と刀振るのでかなり息が上がっている。対して向こうは涼しい顔だ。

「はあ、はあ、はあ」

「今日はもうやめるか？」

「断る！ 斬岩剣、式の太刀！」

「なっ！？」

式の太刀で斬撃を飛ばす。詠春は一瞬目を見開いて、しかし次の瞬間それを最小の動きでかわし、こちらに様々な剣撃を放ってくる。

「おおっと、危ない！」

「雷光剣！」

「雷光剣！」

同じ技、だが打ち負ける。威力はまったく桁違いだ。流石はサムライマスター、その腕前は伊達じゃないってことか。

「同じ技なら打ち負ける……あ」

そうだ。ならあれがあるじゃんか。せつかくナギとの喧嘩で使ったもんなのに、すっかり忘れてたぜ。

「……行くぞ、詠春！」

そう叫んだ直後、既に俺は走り始めていた。拳に気を集中させ、地面をかするようにして振り上げる！

「魔神拳！」

「ッ！！」

詠春はそれを紙一重でかわし、急接近した俺に目を剥く。

「襲爪雷斬！」

贅殿遮那に雷を纏わせ、斬り上げる。後ろに跳んで詠春がかわす。落ちてくる俺に一撃見舞おうってか？ 甘い甘い。斬り上げがあるなら、斬り下ろし《…………》もあるに決まってるだろ？ 纏わせた雷が先行して地面に向かって落ちる。詠春はギリギリでかわす

が、夕風を弾かれる。俺はそこに刀を振り下ろし、

「神鳴流、浮雲・旋一閃！」

体術！？　まずった、忘れてた。

なんだか分からない内に身体が回転し、地面に叩きつけられる。咄嗟に気で身体を強化してダメージを軽減する。

「ぐっ……」

思わず息を詰まらせるが、即座に対応。抑えつけられていない左手を詠春へ向け、無詠唱の光の射手を十矢放つ。

飛び退いて避ける詠春に、起き上がりつつお返しの斬撃を見舞う。

「衝皇震、朧月夜、抜砕竜斬！」

「くう……ッ！　雷鳴剣！」

「まだまだあ！　幻魔衝烈破！　獣破轟衝斬！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

それから一時間、ヒートアップした俺たちは、周りの環境をひたすら蹂躪しながら、当初の目的なぞ放り出して、ただただ相手を殺さんばかりに、剣を打ち合った。

『俺は絶対にアイツらには逆らわない』　byナギ・スプリングフ
イールド

『大艦隊が来たらあの二人に押し付けましょう』　byアルビレオ・イマ

……やりすぎたかなあ。

葱四話（後書き）

次回もよろしくお願いします。

葱五話（前書き）

リニューアル六話目。
ラカン登場。そして……。
独自呪文登場。

葱五話

あれから五日たった、その昼前。俺は贅殿遮那（偽）を持ち（偽の理由は、詠春との鍛練で神鳴流を連発していたらほんの少し刃こぼれしたから）、ひたすら神鳴流の動きの反復練習をしていた。いやこれが面白い。五日間繰り返し続けていたお陰か、いつのまにか全ての技を式の太刀まで修得していた。詠春はどんよりした顔で「俺が何年もかけて修得した技を、たった五日で……」と呟いていた。正直、済まんかった。

この五日間で、さらに二振りの剣を造った。銘は『衿々切丸』と『六幻』。知っている人は知っている、とある作品でも代表的な刀だ。効力も原作通りで、前者は妖怪（悪魔、魔法世界の生物含む）だけを斬ることができる。後者は使い手の安全を考え、『禁忌 三幻式』までしか扱えないようになってる。

まあ、そんなことはどうでもいい。

それよりも、この身体のこと重要だ。

この前、贅殿遮那（偽）を叩き直したとき、暇潰しに念話でエンプティにこの副作用について聞き出した。声を荒げないように自分を律するのが大変でしたよ。

『ああ、はい。まあ、そんな心配することじゃありませんよ。時間が経てば戻りますって』

『具体的には、どのくらい？』

『そうですねえ。……じゃあ、その確かめ方をお教えますよ。まずですねえ、カードの裏面に数字みたいな浮かんでません？』

『ああ、あるぞ。それがどうした』

『そこに浮かんでいる数字をもとに計算するんですよ。使用時間に比例してそのエセけんぶファー状態も続くんです。例えば、5分使

ったとすれば、 $5 \times \frac{1}{2}$ の「2.5で、「一日間と半日」になります。いちいち計算するのは面倒でしょうけど」

「……じゃあ、俺の場合は……六日間と半日イ!？」

『そういいんですねえ』

はらわたを引きずりだしてやりたい気分だ（死）

「神域は無敵ゾーンですよーだ」

「……………」（殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺、殺殺殺殺毆殺碎殺
爛殺斬殺蹴殺抹殺磨殺絞殺壞殺絶殺決殺必殺、否、全殺、殺殺殺殺
殺殺殺……）。そうかい（二力ッ」

（ガタガタブルブルガタガタブルブル）

てな感じで、つつがなく念話は終了した。

あと一日半。

あと一日半の辛抱だ……！

「キリト、行くぞ」

「……はっ！？ お、おう」

危ない危ない。もう少しで自分を見失うところだった。女の身体って結構ストレスたまるんだよな。え？ 一天天ではどうしてたつて？ 一京分の一のスキルの一つで消してましたけど、何か？

この後、オスティア?（よく分からん）に攻め込んでいたヘラス（同じく?）の大軍を適当に追っ払った。ナギが千の雷で鬼人兵を吹き飛ばし、詠春が神鳴流を鬼人兵に叩き込み、アルが重力球で鬼人

兵を磨り潰していく中、俺は適当に融合して作り上げた魔法で鬼人兵を消し飛ばしたりした。

数百の欠片に分割した冥府の石柱に高密度の紅き焰を装填し上空から打ち出す、名付けて『裁きの星々』ってとこか？ ソドムとゴモラを滅ぼした天の火を再現してみようかな？的なノリでやってみたら、意外とイケた。

ついでにもう一つ考えてみたけど、リスクが桁違いの上に、これ下手すりゃ某魔砲少女の星光の破壊者のな砲撃魔法並みの破壊を生み出しかねんとの予想をし、とりあえずお蔵入り。今度じっくり取り組むとしよう。

そんなこんなで、一ヶ月くらい経ち。

森の中。

「んっふっふっ、こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じゃ、早速肉を」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「あつ、ナギ、おまつ……何肉を先に入れてるんだよ！」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ、ほらほら」

「ばっバカ、火の通る時間差というものがあってだな、まずは野菜を入れて……あー、ちょッ！」

「あー、うつせ、うつせーぞえーしゅん！」

「ちよっ、キリト、お前もナギ止めてくれ。日本人だろ！？」

「だが、断る。いいじゃん、テキトーで」

「なっ……！ ってゼクト！ ぽんぽん怪しげな肉を入れるな！」

ナギと詠春、それに最近紅き翼に入ったジジイ口調の子供（に見え

る何か)、ゼクトがギャーギャー騒いでいた。

え? 何で一ヶ月も飛ばしてるかって? そりゃ作者のつこ(r y

……大した出来事がなかったからですが、何か? 特筆すべきところを強いて挙げれば、俺が女から男に戻って狂喜乱舞してたぐら
いだが、そんなもん語っても面白くもなんともないということ、
一ヶ月飛んだわけだ。

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋
將軍』……と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン! ?」

「つ……強そうじゃな」

……えーと。

「分かったよ……詠春。俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。好きにするがよい」

「鍋奉行じゃ……? んー……嬉しくないな」

それは最もな感想だと思う。

その後も、ワイワイと鍋をつつく俺たち。

「おお、何じゃこのソース。旨いぞ?」

「ホントだうめえっ! ?」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ」

「それに大根おろしですね」

「コレがしょうゆか、スゲエうめえっ!」

「お前、確か日本で寿司食ったって言ってなかったっけ?」

何か団欒のような雰囲気が出てきた一同だが、……なんか忘れてる
ような……?

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

ナギがポツリと言う。

「姫子ちゃ……? ああ、オスティアの姫御子のことじゃな?」

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……
です」

「その戦だが……」

詠春がしいたけを口に運びながら言った。

「やはり、どうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭。つつか肉ばつか喰うな」

アレ？ そーいえば、確かこの後……

ドガツ！！！ とどこからか飛んできた剣が、コンロを真つ二つにし、さらに鍋をひっくり返した。ナギ、アル、ゼクトの三人は咄嗟に空中に放り出された肉を箸を使ってキャッチする。

「ああっ、俺の肉が！？」

俺は考え事をしていたため、反応が出来なかった。

と、上方から「食事中失礼~~~~ツ」と声が響いた。見ると、遠くの岩山に巨大な剣を肩に担いだ筋肉ゴリラが。

「俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！ いっちょやろうぜッ」

「何じゃ？ あのバカは」

「帝国のつてわけじゃなさそーだな」

一方、詠春は、

「えいしゅ……むお！？」

ナギが肉を頬張りながら、詠春の方を見ると、詠は「フ……フッフ……」と笑っていた。ひっくり返った鍋をモロに頭に被って。

「フ……食べ物を粗末にする者は……」

プルプル震えながら詠春は夕風を手取る。

「どーしたー、来ねーのかあ——！ 来ねーならこっちから……」

その言葉は、最後まで続かなかった。

「いッ……」

音もなく接近した詠春がラカンの剣を半ばから真つ二つに斬ったか

らだ。

「おほ」

「斬る」

直後、その岩山が詠春とラカンの攻防に巻き込まれ砕かれた。あれ
ってどうやったらそうなの？ 人間業なのかよ。

「お？ 詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります。ちょっと前、南で話
題になった剣闘士ですよ」

そんな情報はどうでもいい。問題は……

「……ッ！？ なんかすごい寒気が……」

「クククク……」

気が付けば俺は笑っていた。そうだ。何を忘れてんだ俺は。恰好の
実験台があるじゃないか。すっかり忘れてた。あの筋肉ゴリラなら
タブン直撃を喰らっても満身創痍で生き残るさ。

「クククククククク…… イイねイイね最ッ高だねエ。こんだけ相
応しい実験台もそうそう出会えることはねエだろオしなア。今の内
に思う存分愉しませてもらうとしましょオカア！？」

ダガン！！ と音を立てて跳び上がる。そのまま筋肉ゴリラのと
ころへ一直線に跳んでいく。

「……あン？」

見ると詠春が気絶していた。大方何かしらの道具を使ったお色気ト
ラップにでも引ッ掛かったのだろう。

俺は筋肉ゴリラに向き直り、

「ラアアアアアアアアアアアンクウウウウウウン！！」

「うおッ、何だあ！？」

「とりあえず死んどけ」

俺はそう言つと、既に詠唱を済ませておいた遅延呪文を解放した。

「双腕解放、右腕固定『冥府の石柱』！！左腕固定、『紅き焰』最
大出力！！ 術式統合！！！！ 『裁きの星々』！！！！」

「うおわぁッ！？」

筋肉ゴリラに燃える炎に包まれた石つぶてが降り注ぐ。筋肉ゴリラが避けた地面に、溶けるように開いた穴は、奈落への入り口のように不吉な雰囲気を漂わせている。

ラカンを見やると、顔面蒼白のまま固まっていた。

「まだまだ行くぜえ！！ 双腕解放、右腕固定、『雷の投擲』！！

左腕固定、『燃える天空』！！ 術式統合！！ 『太陽神の鎗』

！！！！」

「ぎゃあああああ！？」 必中のはずの攻撃を辛うじて避けるラカン。ちつ、これだからバグキヤラは！

「いい加減当たれやあ！！」

「ぜってー嫌だ！！ うおおお！？」

「はっはっはー、死ね死ね死ねエエエエ！！」

「ぎゃあああああ！！」

SIDE ナギ

「……………行かなくて良かった……………」

葱五話（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

葱六話（前書き）

リニューアル七話。

飛ばし飛ばしな気がするけど気にしない。

葱六話

どうにも考えさせられる光景が、今俺の前に広がっている。

「俺が最強オリ主だ！」

「薬味をアンチだ！」

「ハーレムハーレム……ぐへへへへ」

……………殺していいよねウザいから。

場所はグレート・ブリッジ。帝国に制圧されたブリッジの奪還作戦の最中。辺境に追いやられていた俺たち紅き翼が復帰して連合国側が攻勢に回ったところなのだが、もう少しで奪い返せる、というところで変化が起きた。

わけの分らないことを叫びながら突っ込んでくるイケメソ集団。

……絶対アレ転生者だよな。しかも下心丸出しだし。イケメソが言うすごい違和感があるというか、気持ち悪い。イケメソがブ男に見える。幻覚作用まであるとは、流石は転生者。外見と中身がまったく釣り合っていない。

とまあ、冗談はほどほどにしておいて、真面目に潰そう。あいつらはおそらくナギやネギを潰して自分たちに都合のいいように原作ブレイクを企んでいるタイプだろう。そういう奴らは大抵ネギが気に喰わないという奴だったり、3年A組の連中を自分の欲望に利用しようという輩だ。中には別の目的を持つ奴もいるのかもしれないが、そんな少数意見なぞ気にしてられない。相手が転生者ならこっちは本気でやらないと、潰される。

「何だあいつら」

ラカンが頭に『?』を浮かべて奴らを見ている。

「お前ら離れてろ」

俺は跳躍の準備をしてメンバーに警告した。

「あん? 何でだよ」

ナギはうずうずと身体を震わせていた。……お前は月詠か。そんな戦闘狂じゃなかったはずだぞお前。

「あいつは俺と『同類』だ。お前らじゃあ、喰われる」

「どういう……」

最後まで聞かずに飛び出す。

あいつらは俺が消し飛ばす。

SIDE 転生者

「お? 一人すつ飛んできたぜ?」

「あんなの紅き翼にいたか?」

「知るかよ。とにかく、突っ込んでくる雑魚は……」

『叩き潰す!』

全員の声が重なる。しかし、そこにチームワークなんてものはない。各々、圧倒的な力を振りかざし向かってくる敵を潰すだけだ。

そこに戦略などない。めちゃくちゃな陣形で、敵味方関係なく、巻き添えを喰う奴には嘲笑を浴びせるだけだ。それでよかった。

今日までは。

SIDE キリト

あいつら、バカだ。相手を効果的に倒す陣形を考えてすらいない。

勝手に力を振るっては勝手に味方を巻き込んでいく。そんな戦い方。

「クズには、天罰が必要か」

俺はつぶやき、呪文を詠唱し始める。敵は五人。確実に殲滅出来るだけの大呪文を放つ。

「アインス・ツヴァイ・ドライ。来たれ雷精風の精 雷を纏いて吹きすさべ南洋の風。『雷の暴風』」

魔力を喰ったそれは、従来 of 雷の暴風を遥かに越えた力を放出しながら突き進んでいく。

「はっ、こんなもん……うらあっ！」

一人の男が前に出て、軽く右手でそれに触る。すると、あっさりとかき消された。

「ッ……！」

「残念だったなあ。俺の力は『幻想殺し《イマジンプレイカー》』。

すべての魔法は俺には効かないぜ？」

偉そうに自慢する転生者A。

「……気に入らねえ」

「あ？」

俺は、多分清々しいくらいの無表情で、言った。

「自分で手に入れた力でもなくせに、偉そうに語ってんじゃねえよ」

「あ——」

Aが何か言うよりも早く、懷から取り出した一本のナイフを投擲。
『敵の急所を確実に突く』という概念を付与したそのナイフは、奴の首を的確に貫き、絶命させた。

「さて……」

俺は残りの転生者に向き直り、話し掛ける。

「お前らは今から俺の考えてみた新魔法の実験台になってもらう。

俺も転生者を一掃出来て一石二鳥だ」

「嘗めてんじゃねえぞ！」

バカが一人突っ込んでくる。あーあ、鬱陶しい。

「《開け》。遙か遠き理想郷」
アヴァロン

アーサー王の鞘を呼び出し、攻撃を防ぐ。

「双腕解放。右腕固定、『千の雷』。左腕固定、『燃える天空』。

さらに右腕解放・固定、『雷の投擲』。術式統合。『ゼウスの雷霆』

「

火の最大呪文、雷の最強呪文、それを安定した形に固めるために、

雷の投擲を組み合わせた、未実験の術式。

「な……何だよ、それ」

Bが戦きながら後ずさる。

「広域に広がる『爆発』の性質と、極高温の『雷』の性質を併せ持つ、未完成の殲滅呪文だ。これはギリシア神話に登場するゼウスの『雷霆』を再現してみようと頑張った一品だ……せいぜい、一撃で消し飛ばないようにな」

そう言つて、『ゼウスの雷霆』を、真下の転生者に向かつて、投げ落とした。

結論から言えば、やりすぎた。

いくら相手が転生者だからってマジになりすぎた。だって、あいつらがたつてたところ完全に融け落ちてるし（！？）、連合国側からも帝国側からもドン引きされた。

ナギは「今度から絶対にお前には逆らわない」と言われ、アルからは「自重を覚えましょう」と言われ、詠春からは「……もう何も言わん」と目を逸らされ、ゼクトからは「さっきの魔法教えてくれんかのう」と頼まれた。

紅き翼にも引かれる俺って……。しかも約一名違つこと言ってるし。

ちなみにこのあと、咸卦法を使うダンディーな眼鏡おじさんことガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグと、その弟子であるタカミチ・Ｔ・高畑が仲間になった。

あ
た
ら
し
い

な
か
ま
を

て
に
い
れ
た

！

葱六話（後書き）

次回はおそらく束の間の休息みたいな感じになると思います。
次回もよろしくお願いします。

ネギま！ 番外話「とある黒剣士の自由日常へフリータイム」(前書き)

この話に特に意味はありません。現状確認だけなんで。

何か間違っていたりしたら、ご指摘ください。よろしく願いします。

ネギま！ 番外話「とある黒剣士の自由日常へフリータイム」

SIDE キリト

「眠イ……」

目をごしごしこすりながら寢床から身体を起こした。限りなく眠い。二度寝したらあと三時間は寝たい。

「ふああ……」

欠伸をしながら洗面所に向かう。ここはなかなか快適で居心地がいい。近くにはビーチと海があるし、少し歩けばいろんな屋台が立ち並ぶ街がある。とんだVIP待遇だな。

「おや、おはようございます」

「んあ？……ああ、おはよ」

ふらふらと洗面所に向かう俺に、相変わらずよく分からない微笑を浮かべたアルが挨拶をしてくる。ほとんど反射的に挨拶を返し、洗面所で顔を洗い、軽くうがいをして意識をはつきりとさせる。

自分の部屋に戻り、いつも着ている黒いシャツに黒いズボン、ぼろぼろのロングコートを羽織り、背中の鞘に一昨日新たに造り上げた二振りの剣——『ダークリパルサー』と『黒^{こく}初^{しう}』を納刀する。

まるでSAOのキリトと瓜二つになってしまったが、これはなんだか気に入っている。なんつーか、格好いい。地味だけど、滲み出るような風格というか、……なんか説明しがたい『格好よさ』がある。ちなみに、『黒初』という名前は俺が適当につけた。白い『ダークリパルサー』の方は原作通りに名付けたのだが、黒い方は『はて、黒い方って名前何だったっけ？』となってしまうて、まあ、適当につければいいかー、みたいになつて、『黒初』という名前に落ち着いていたわけだ（『黒初』の『初』の字がなんとなく思い浮かんだ。特

に意味はない)。

それとはかく。特にやることのない今日は、既に予定を決めている。……矛盾している気がしなくてもない。バカなことを考えながら、部屋から出て居間に入る。すると、ゼクトがテーブルの上でトランプを組み上げて遊んでいた。……実年齢何歳か自分の胸に聞いてみると叫びたくなったが、かろうじて堪える。

精神を安定させる意味合いも込めて、テーブルに置かれていた飲み物を勝手に拝借。飲み干した。グラスを洗面所に戻って濯ぐと、適当に拭いてテーブルに置き直す。そして、もう一度今日の自分の行動の指針を心の中で繰り返す。

——今日は俺が前からしようと思っていたことをやる。

それは……。
と、

ガシャアアン！！と窓が割れ、二つの人影が居間に入り込んでくる。

敵襲！？と本を読んでいたアルは重力球を作り出し、トランプで遊んでいたゼクトは魔法陣を高速展開し、貴様ら俺の今日の目的を阻害する刺客なんだなそうなんだな！？と背中 của ダークリパルサ——と黒刃を抜き放つ。

その人影とは——

「てめえジャック！！俺の焼き鳥盗りやがったな！？」

「へっへーん、油断してたお前が悪いんだよ！」

「んだとてめえ！！」

「やんのかコラ！！」

床の上で取っ組み合いの喧嘩を始めるナギとラカン。十三の子供と四十過ぎのおっさんが組み合う光景はいかにもシニールだ。俺たち三人は早々に興味を失い、各々やりたいことをやりだした。つーか、朝っぱらから何で焼き鳥のことで喧嘩してんのこいつら？

清々しい朝にする運動ほど爽快なものはないと俺は決め付けている。俺は生前、起きるのだけは異常に早かったので、これは半ば習慣となっている（ちなみに『目覚め』が早いだけで『寝起き』は決してよくはない）。

そして今朝（というか最近）、やっていることは――

「雷鳴剣！」

「雷光剣！」

雷を帯びた刀同士がぶつかり合う。

ガギン！ と鉄と鉄がぶつかり合う音が朝の砂浜に鳴り響く。余波で砂が巻き上がり、砂埃がたってしまう。

「ちっ」

気で身体強化をして上空に跳び上がる。クルリと回転してその場から離脱。二刀を構え直し、いつ相手が飛び出してくるか、どこから来るかを警戒する。

静寂。

吹き抜ける風の音が聞こえる。そのまま一秒、二秒、三秒……

「斬空閃！」

「おおっと!？」

砂埃を断ち切るように斬撃が飛んでくる。ダークリパルサーでいなし、

「魔神剣！」

相手がいるであろう場所に魔神剣を放つ。

「アレ？」

そこには誰もいない。そして、

「斬鉄閃！」

後ろに向けて斬鉄閃を振るう。

「クッ」背後から斬りかかってきた相手——詠春は上体を必死に反らし、その剣閃を躲す。

「……やるじゃないか」

「それほどでもないぜ？ さっきのだって、偶然気付いたんだ」

「謙遜するな。お前はもう十分強いさ」

サムライマスターにそこまで言われると、頑張った甲斐があるね。

「んじゃ、俺はもう免許皆伝か？」

「自惚れるな。まだまだ俺に一太刀も浴びせてないだろ」

「つまり、お前を斬れば免許皆伝ってこと？」

「知らん」

思わずすっこけた。今まで自信満々に言ってたくせにそこですっぱりと切り捨てやがった。

「まあ、忒の太刀まで習得しているから、確かに免許皆伝の域ではあるんだが……」

なら免許皆伝って言うてくれりゃいいものを。

「俺が納得できん」

「意外と器小さいなお前」

こんな言い合いをしながら早朝鍛練をやり、朝飯は適当に街の露店で食べた。

SIDE ラカン

お？ 俺の視点か。よっしゃ、テンション上げて行くぜ！

ガッハッハッハ、俺が南の剣闘士、最強の名を欲しいままにしたジャック・ラカンだあ！……なんか違うな。もっとこう、かつこよさ溢れるようなやつが……見よ！ 我こそが紅き翼最強の傭兵剣士、ジャアアック・ラカアアアン！！……これも分かりにくい。

「なに愉快に百面相してんだ……」

ぬ？ 俺が頭を抱えて悩んでいると、キリトがバカを見るような目で見ていた。両手に露店で買ったのだろっ、いろんな料理の袋が提げられている。

「ん？ いや、敵に挙げる名乗り方をな」

「相変わらずよくわからんことに力をそそぐな……アンタは。何十年後かにソフトなスカートの捲り方とかを披露してる姿が頭に浮かぶぜ。あ、コレ要る？」

呆れたように言いながら袋の一つを差し出してくる。中には、よく分からない形をした魚の串焼きが入っていた。……コレって果たして喰っていいモンなのか？

「食中毒とかおこさねえよな、コレ……」

「アンタが食中毒に陥る姿が想像出来ねえ」

たぶん大丈夫だろうよ、と手を振って去っていくキリト。どうせまた、最近創ったらしい新魔法でも試すんだろ。名前は、なんだったか……。

ま、なんでもいいか。

俺は適当に切り捨てて出かける準備をする。

今日は夕方から本国首都にガトウに呼び出されていたしな。確か『完全なる……』なんちゃらに関するものだっけか？ まだ早エが、その前に俺もバカンスを楽しんでおかなくちゃな。

SIDE キリト

「さて、では始めよう」

そう言つて、精神を集中させる。手繰り寄せるイメージをしる。明確なビジョンを心に映せ。無限とも思えるほどの数が並ぶ回廊。空間のあちこちに散乱する『それら』を、一つ一つ、丁寧に繊細に、これ以上ないほどの具現を望め。

…

……

……

.....

.....

「ミリオンオーバー・ブレードハウス
『統剣蔵庫』」

瞬間、目の前の景色が変わる。

陽がそそぐ浜辺が、黒く寒い回廊へと。その壁、床、果ては天井や空中にまで、抜き身の刀剣類が無数に存在している。

「……やっぱ、維持にはかなり魔力が持ってたかえるな……」

苦々しく呟く。これはまだ実戦投入出来る代物じゃない。発動中は僅かどころか四割ほど動きが制限されるだろう。

本家本元を見真似て創り上げた偽の光景でしかない。

「……解除……っハア」

思わず息が洩れる。額には汗が浮かんでいるのが分かる。魔力の大部分が持っていた。まだ魔力運用の効率化が必要か。

リアリティ・マープル・タミ
『疑似固有結界』

型月の世界において、奇跡を起こす秘法、『魔法』に最も近いとされる、魔術の到達点の一つ。『固有結界』^{リアリティ・マープル}。自らの心象風景で世界を塗り潰し、一つの異界を創り上げる、魔術の中でも最も魔法に近い、魔術師が追い求める境地。

俺が行った疑似固有結界は、『自らが想像した心象風景を世界に張

りつける』ものだ。感覚的には写真を壁一面に画鋏で留めているようなもの。剥がそうと思えば簡単に剥がせる、仮初めとも言えない紛い物の世界だ。ゲンソウ

『ミリオントバー・ブレードハウス統剣蔵庫』は、俺が紅い弓兵の無限の剣が刺さる荒野を夢想して創ろうとした世界ゲンソウの、その成れの果てだ。

目的としては、成功の部類だ。俺は『溢れ返る剣が収納出来る固有結界が欲しい』という目的でこの『疑似固有結界』を創り出した。まあ、目的は達した。

しかし、やはり欠陥がある。

第一に、長時間の展開が出来ない。僅か三分の維持すら困難だ。まさか、これほどきついものとは正味な話、全く予想してなかった。だってあの紅い弓兵しかり、豪気な征服王しかり、涼しい顔して使ってるもん。反則だよ、英霊って。

それはさておき、第二に、これは俺の記憶している『刀剣』しか反映されない、ということだ。

つまり、一本一本の刀剣を完璧に、細部に到るまで記憶しなけりやならない。んなもん、完全記憶能力でもなけりや不可能だ。

仕方ないので、俺の代わりにどんなものでも完璧に記録してくれる魔法具を造り、それを使って現存する八十七本を全て記録し、その記録を俺の記憶として好きなときに引っ張ってこれるように某白い超能力者のごとくチョーカーのように首に巻き付ける形を取った。最大容量限界時間は約三千五百年分。本数に換算すればほぼ無限に近い無量大数程度だろう。まあ、生涯を通して無量大数本なんて刀剣を造るなんざ不可能に近いだろうが。

さて、じゃあ少し休むか。休日休むために使うもんだ。

OUT
SIDE

ネギま！ 番外話「とある黒剣士の自由日常へフリータイム」(後書き)

疑似固有結界：固有結界をワンランクダウンしたようなもの。『心象風景の展開』ではなく『理想風景の投射』なので、使い手の想像力が全ての鍵を握る。魔力の消費量が半端じゃなく多いため、並みの魔法使いが使おうとしても『無理』である。

こんな感じです。

固有結界ではないので、紅い弓兵のように詠唱は必要ないし、征服王のように自身の配下たちの力も借りる必要はありません。その代わり、通常の固有結界ゆりも魔力を消費しますが。

この話は息抜きと今の立ち位置を確認するために作った話なので、あんまり気にしないでください。

次回もよろしくお願いします。

葱七話（前書き）

そろそろ過去編はぱっぱと済まして本編入りたい……。
というわけで葱七話です。
よろしく願います。

葱七話

「会ってほしい人がいる。協力者だ」

本国首都に着いた俺たちに、ガトウがそう切り出した。

「協力者？」

ナギが聞き返す。すると、「そうだ」とガトウとは別の返事が返ってきた。

「マクギル元老院議員！」

「あんたか？ 協力者って」

「いや、わしちゃう」

じゃあなんで出てきたんだ。

「主賓はあちらの御方だ」

背後を振り返りながら言うマクギル議員。カツカツとヒールを鳴らしながら白いフードを頭まで被った人物が登ってくる。ナギと同じくらいの年の少女だ。

「ウエスペルタイア王国……アリカ王女」

フードの隙間から僅かに見えるその美貌を、ナギは口も聞かず見つめていた。

「ワハハハハ、上手いことやりやがって、こんガキヤ！」

「ああ！？ 何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたろーがッ！」

「してねっつの、何がイチヤイチャだバカ！」

……仲いいな、こいつら。やつぱアレか。類は友を呼ぶのか。ラカンのあの態度は若干俺でもム力つくが。

あの会合が終わって、首都に構えた拠点に戻った俺たちだが、見ての通りナギとラカンはずっとあの調子だ。特にラカンはナギをからかうのに忙しそうだ。

「なーに言ってんだよ。俺なんか『気安く話し掛けるな、下衆が』だぜ~~~~~？ ……いや、ありやいい女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫か、ジャック？ マゾかアンタ？ 俺あ、あんなおつかねえ女見たコトねえぞ」

「グハハハハハ、そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな、てめーはよ」

「んっだ、そりゃ。意味分かんねえ。触んなっつーの、勝負すつかてめえ！」

そろそろ五月蠅くなってきたな。黙らすか。

「オマエラ、それ以上騒いだら犬神家な」

「「すいませんでしたあ！！！！」」

「帝国」と「連合」。二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきた王国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下。

彼女は自ら調停役となり戦争を終わらそうとしたらしい。しかし、力及ばず泣く泣く俺たち紅き翼に助けを求めてきた、と。

……それにしても、すげえ仏頂面だな。

「要するに、戦争やりたい奴らがいるんだろ。まーた『あいつら
か!?!』」

ナギの言う『あいつら』とは、ここ最近存在が顕になった秘密結社、
『完全なる世界』^{「スモエンテレケイア」}だ。原作であれば、これから数十年後の次世代、
ナギの息子であるネギの世代まで続く、因縁の相手となるだろう『
敵』だ。

「『完全なる世界』……帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオス
ティア内部にまでシンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです……やはりこれは、思っ
た以上に根が深い……」

「前に訊いた話じゃ、中枢にまで喰い込んでるそうじゃねえか。ま
とめて潰すくらいしか出来ねーぞ、俺あ」

「貴方ならやりかねませんね」

「お前はこういう目で俺を見てんだ」

それからしばらく、休暇中に『完全なる世界』についての独自の内
偵が始まった。

ちなみに俺は調査には回らなかった。正確には、『俺本人』は調査
に参加しなかった。なら、どうしたか？

『妄想幻像』^{ザバーニヤ}と呼ばれる宝具がFateに存在する。アサシンであ
る『ハサン・サッバーハ』が持つ、自身を最大八十人にまで分裂さ
せることが出来る宝具だ。分裂させればさせるだけ戦闘力は半減す
るが、今回の目的はあくまで『内偵』なので、戦闘なぞすることは
ないから安心だ。

俺はそれを『湖の解錠者』を使って引き出し、三十人ほどに分裂さ
せて首都中に展開させている。ん？ TS？ はっはっは、もう諦
めた。

そして、今俺がやっているのは、

「記録、表出」
メモリー・オン

手の中に刃がギザギザに刃こぼれしている刀が現れる。目の高さまで持ち上げてためつ眇つ出来を確認する。……ふむ、七割程度の再現率か。まだまだだな。

「保存、終了」
メモリー・オフ

消去し、もう一度同じ刀を呼び出す。

（刀剣情報を精査――）

（基本性能を解析――）

（欠落部分を補完――）

（形成完了――）

「記録、表出――！」

今度の刀は上手くいった。オリジナル 原典と比べても遜色ない出来だ。

「保存、終了」

情報を記憶補助機器に保存し、一息吐く。

「あー、暇だ……」

基本暇なのだ。

「まさか……こんな……」

ガトウが片手で資料を見ながら呟く。表情は芳しくない。

「よお、ガトウ。どうしたい、深刻な顔してよ」

「ああ、ラカン。いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが、これがどうにも信じがたい内容でな。いや情報ソースは確かなんだが……うゝむ。信じていいんだか悪いんだか……しかしこれが確かなら、奴らの行動も……」

「んだ、ガトウ。ハッキリしねえな。もっと分かり易く言えや」

「いや、言ってもあんたにや興味ない話だよ、多分」

苦笑いしながら言う。確かにその通りだと思う。

「それよりこっちの方が深刻だ。この男にも『完全なる世界』との関連の疑いが出てきた……大物だよ」

そう言って一枚の写真が写された資料をラカンに見せるガトウ。

「こいつは……今の執政官^{コンスル}じゃねーか！！このメガロメセンブリアのナンバー2までが奴らの手先なのか！？」

「確証はない。外で喋るなよ？」

と、ガトウがそこまで言った直後。

ズズンッ！ と街で爆発が起きた。

「！？」

「何だ！？」

炎が上がる。人々がパニックに陥り、駆け付けた警備員が避難誘導を始める。

「大丈夫か、姫さん！」

「うむ」

ナギがアリカを抱え、着地する。どうやら攻撃されたところを寸でのところで跳んで回避したようだ。

「くそっ、こんな街中でデカイ魔法使いやがって！ 死人とかでてねうだろうな」

「やはり、今のは……」

アリカが魔法が着弾した場所を睨みながら言う。

「ああ、奴らの刺客だろ。アンタと俺、どっちを狙ったかは知らねえけどな」

片や魔法世界でも屈指の実力を持つ魔法使い、ナギ・スプリングフィールド。片やウェスペルタイア王国の姫君、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。どちらにせよ、完全なる世界にとっては狙う理由は十分と言えるだろう。

ナギが掌を拳でバシッ、と叩いて、好戦的な笑みを浮かべる。

「けど、ようやく尻尾をだしたな。逃がさねえぞ！！」

駆け出そうとしたナギだが、アリカにマントの裾を掴まれ「ぐえっ」とカエルのような悲鳴を上げて止まる。

「私も行くっ」

「ああ？」

「ここに私を一人残しておく方が危険だと分からねのか愚か者が。それに、私の魔法は役に立つぞ？ 忘れたか鳥頭」

「……ハッ、いいぜ姫さん、ついてきな！！」

「……で？」

「何か言い遺したい言葉はあるか？」

翌日、詠春と俺、互いにナギに青筋を立てて詰め寄っていた。心なしか、ナギが怯えてる気がしなくてもない。

「貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！！　どんな夜遊びだそれはっ！！」

「ガキはいいよなア……自分たちが暴れたいだけ暴れて後始末は全部大人に押しつけりゃいいんだから……知ってるか？　昨日俺が分身どもを総動員して後始末をしたことを、そのせいでまた性転換（こんなこと）になっちまったことを……ッ！」

詠春と俺の説教は続く。

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！　何の為に秘密裏に調査してると……大体、万が一王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だ！！」

「くそつたれ……何で俺だけがこんな目に遭わなきゃなんねーんだ……俺だつて暴れたかったつっの……」　「姫さんノリノリだったぜー？　楽しかったー、とかって」

「嘘をつけっ！」

「首斬るぞ？」

詠春と俺の説教（？）は続く。

「どうせ貴様が無理矢理連れ出したんだろっ！　姫にこんなご迷惑をおかけするとは、どうお詫びすればよいか、国際問題級の……」

「なあ？　斬られて殺されるのと消し炭にされて殺されるのと、どっちがいい？　嫌いな方を選ばせてやるよ」

「嫌いな方を選ばせんのかよ！？」

最早ただの愚痴になりつつある俺たちの説教だが、その途中に「詠

春さーん」とタカミチとゼクトが入ってくる。

「あのコワイ冷血お姫様が、今、廊下で僕に向かってニッコリ……僕ビックリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそつです」

その言葉に詠春が固まる。ナギの言ったことは正しかった、と。

「確かに笑いましたよねっ」

「うむ。驚いたのじゃ」

二人で喋りながら歩いていく。こう見ていると、仲のいい兄弟のようにはしか見えない。

「……………！」

「な？」

これ以上追撃出来ない詠春に、ナギがこんな顔↓（・ ・）ノをして言う。

だが……

「俺を忘れてねーかにやー、ナギくううん？」

ガシッ、ギリギリギリ……！

「ぎいやアアア！！」

アイアンクローを敢行した。

「グアアアッ……や、やめ……………（チーン）」

「な、ナギイイイイ！？」

後には、頭から血を流しているナギと、それを必死に介抱している詠春の姿が、そこにはあった。

葱七話（後書き）

次回はアーウェンクルスたちと戦うところまで行きたいです。
次回もよろしくお願いします。

葱八話（前書き）

遅れてすいませんでした！！

色々忙しく、執筆時間とかホントなかったので、気が付けばかなり遅れてました。

これから一週間更新、早ければ三、四日更新にしたいです。
では、葱八話どうぞ！

葱八話

SIDE キリト

俺たち——ナギ、ラカン、ガトウ、俺の四人はテロに関与していた執政官を告発するために、マクギル元老院議員の元を訪ねていた。

「マクギル元老院議員」

ガトウが呼び掛ける。マクギル元老院議員はこちらに背を向け、ガラス張りの向こうに映る街並みを眺めたまま、

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……^{ブラエトル}法務官はまだいらっしやいませんか」

広い部屋の中には、マクギル元老院議員、俺たち以外には誰もいない。それにガトウは確認をしたのだろう。

マクギル元老院議員は外の景色を眺めたまま、

「法務官は……来られぬこととなった」

と告げた。

「……ハ……？」

ガトウが僅かに疑問の声を上げる。それはそうだ。^{アポイント}訪問予約を取つ

た時のマクギル元老院議員は、無意味な戦線拡大を止められるかもしれないと随分乗り気だったのだ。いまさら法務官が来られなくなったなどで納得するはずがない。

「……あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ。ここに来て……慌てて水を差すのも、やはりどうかと思ってね」

「ハア」

ガトウが曖昧な相づちを打つ。

確かにマクギル元老院議員の話の筋は通っているだろう。一般的な視点から見ても、勝ち戦に余計な手を入れて邪魔はされたくないだろう。

だが、

（何だ？ この違和感は）

ナギを見ると、こっちも訝しんでいる様子だ。目が合う。アイコンタクトで互いの考えを伝える。静かに頷く。

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君たちも無念だろうが、今回は手を引いてだな

……」

「「待ちな」」

ナギと俺でハモる。少々気色悪いが、今は我慢だ。

「？」

「あんた、マクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

ナギが炎、俺が雷を放つ。揃ってマクギル議員（？）の頭に命中した。

「「な……」」

ガトウと、珍しいことにラカンすら驚愕の声を上げる。まあ、いきなりこんなもん見せられちゃ、仕方ないだろうが。

「ちょ——っ！？ ナギ、キリトおまつ……何やってんだよッ」

「元老院議員の頭いきなり燃やすって……！？」

……二人して焦りすぎだろ。

「バーカ、よく見てみな、おっさん」

「何っ……！」

ようやく気付いたらしい。

燃え盛る炎の中、佇む一つの人影。

「……よく分かったね、千の呪文の男、それに翔る黒風」

現れたのは白髪に学生服のようなものを着た青年だった。やっぱこいつか。

え？ つーかこいつさっき何て言った？ 『翔る黒風』？ え、そ

れどんな厨二病？ すごい恥ずいんだけど。

「ぶっ……翔る黒風……ダセゴブツ！？」

ナギがウザかったので顔面パンチしたあと、白髪に向き直る。

「おい白髪」

「……僕の名前は1《プリームム》なんだけれどね」

「そうかそれより腐れ白髪。一つ聞きたいんだが」

「……………何だい？」

いつも皮肉な笑顔を浮かべている白髪——プリームムの口元がわずかに引きつっていた。

「そのふざけた二つ名考えたやつら教える。ぶち殺してやる」

「それは出来ないな翔る黒風。いくら僕たちでも既に広まった呼び名の情報源を探るなんて無茶振りも甚だしいよ翔る黒風、それとも何かい翔る黒風、それは暗にこの呼び名を呼んだ魔法世界人を一人残らず完全なる世界に送れとも言つつもりかい翔る黒風？ まあ最終的にはそうするつもりだけど翔る黒風。今はまだ色々と事情があるのさ翔る黒風。だからまあ、諦めてくれ翔る黒風」

「オーケー死ぬ覚悟は出来てるってことだなクソが！」

そうと分かれば話は早い。即座に潰す！

「右腕解放『ゼウスの雷霆』左腕解放『ゼウスの雷霆』！ 重複統合、雷神槍『父神ころし』解放率50%！」

まだだ。あと50%出力を上げないと安定しない。溢れ返る力の奔流を、方向付けて循環させる。流れが定まったらそこへさらに魔力を上乗せしていく。30…20…10…完了。最大出力！

「消し飛べエエエエエー！！」

「ちよつと待て落ち着けキリト！ そんなデカさの魔法放つたらこころ一带焼け野原どころの騒ぎじゃないぞ！」

「落ち着けるか！ 俺をコケにしやがったあの白髪はこの世から消し去る……！」

ええい離せガトウ！ 俺は、あの、憎たらしくウザったく整ってい

る顔立ちと相まって余計に神経を逆撫でするクサレ人形野郎を灰にしなきゃ気が済まんだ！

「こんなもん撃ってみろ、灰も残らんぞ！？」

「知るか！」

「知れよ！」

とにかく、は・な・せー！！！！！！

葱八話（後書き）

変なテンションで書いたのでかなりおかしくなってますが、勘弁してください。

散々更新遅れてこんなって……ホントすいませんでした。

葱九話（前書き）

ええ、短いです。まことに申し訳ない。
……あの、ホントにすいません……。……。

葱九話

SIDE —

「……もついいかな？」

ギヤーギヤー騒いでいる四人を見ながらプリームムはため息とともに言う。

「わざわざ確認してくる辺り、お前って結構マジメだよな」

「その空気の中に突貫しろと？」

プリームムは頭痛がするとしても言いたげにこめかみを押さえる。

閑話休題。

若干緩んでしまった空気を引き締め、キリトたちはプリームムへと向き直る。

「さて、いくら僕でも一人で君たちの相手をするのはきついからね。援軍を呼ばせてもらおう」

「させつかよ!!」

言うが否や、飛びかかるナギ、ラカン。ガトウは両手を合掌のような状態にし、『咸卦法』を発動させる。キリトはダークリパルサーと黒初を抜き放ち、続けて飛び出そうとした、直後。

「行かせませんよ」

「喰らえ」

ラカンに水を操る美丈夫、ナギに炎を纏った筋肉達磨が立ちほだかる。

「!？」

攻撃をぶつけられ、ラカンとナギが後退する。

「強えぞやつら！」

「ハッハ、だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ万倍!!! 戦いやすいぜツ!!!」

相変わらずの調子のラカンとナギに、プリームムは馬鹿にするように笑い、右手を自分の耳の辺りに持っていく。そして、

「わ、わしだ! マクギル議員だ……うむ、反逆者だツ! ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むツ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、ユウキ、奴らは帝国のスパイだった! 奴らの仲間もだ! 今も狙われている、軍に連絡をツ……」

あの野郎……自分たちに都合のいいことを……ツ。

「オラアッ」

適当な剣を呼び出し投げつける。狙いは頭。それをプリームムは首を軽く振り回避し、返す刀で巨大な石化呪文を放ってくる。

「クラティステー・アイギス
最強防御拡散型」

右腕に装填していた防御魔法を形を変えて展開する。「ナギ、ラカン、ガトウ!」

『おおおっ!!!』

俺の声に反応して三人が突っ込む。

「……君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

プリームムが左手をこちらに向け、詠唱を始める。

「マズツ……」

ゴッ！！！！という轟音と共に、床から巨大な石柱が飛び出し、俺たちを襲った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6276s/>

いつか災厄の闇ウサギ

2011年12月16日18時04分発行